

第18回

全国高校生

歴史フォーラム

歴史を掘り起こせ!!

発表集

目 次

ごあいさつ	審査委員長・奈良大学学長 今津 節生	ii
審査結果の講評	第18回全国高校生歴史フォーラム実行委員長 比佐陽一郎	iii
審査結果 優秀賞		iv
審査結果 佳作		v
優秀賞研究レポート（高等学校等コード順に掲載、敬称略）		
駒場東邦中学校・高等学校		1
研究者名	伊藤拓生	
研究タイトル	新発見の山城「赤柴城」の存在意義 —その立地と縄張りの比較分析—	
岐阜県立関高等学校		15
研究グループ名	地域研究部	
研究者名	土本徳哉・森翔吾・岩原知哉・渡辺俊太・佐藤孝亮	
研究タイトル	戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材	
京都府立鴨沂高等学校		31
研究グループ名	京都文化コース2年生	
研究者名	石川健志朗・岩崎紗良・上田彩夏・大橋雫・小田原チヨ・酒井謙 竹内景翔・田中咲・中村明莉・樋口仁子・牧原佳乃子	
研究タイトル	本校が所蔵する明治時代の西洋画の作者について	
愛媛県立松山北高等学校		47
研究グループ名	郷土研究部	
研究者名	森川晴仁・岸本美花・岡部美紀・森貞裕太郎・谷口凱星・山住悠理	
研究タイトル	松山市に伝わる小野小町伝承の謎を解く	
長崎県立壱岐高等学校		63
研究グループ名	東アジア歴史・中国語コース2年 歴史学専攻	
研究者名	片野一帆・後藤健・須賀干城・丸山隼平	
研究タイトル	興原古墳の石材運搬に関する研究 —古墳時代社会解明への道しるべ—	
佳作ポスター（高等学校等コード順に掲載、敬称略）		79
第18回全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧		86

ごあいさつ

審査委員長・奈良大学学長 今津節生

奈良は我が国の建国の地です。飛鳥時代・奈良時代には都が置かれ、中国や朝鮮からさまざまな技術や文化を取り入れてながらも独自の発展を遂げ、国の礎となりました。奈良県は、3つの世界遺産や200件を超える国宝など数多くの文化財を有しています。奈良は日本という国の始まりの地であり、歴史文化資源の宝庫です。

奈良を歩くと、日本という国が若々しく元気で力に溢れた時代を体感することができます。我が国の建国に携わった当時の人々の行動や知恵は、現在を生きるための参考にもなるはずです。歴史や文化の蓄積の中から、今の時代にあった知恵を見つけ出すことができると思います。

1300年以上の歴史をもつこの地に奈良大学が誕生したのは1969年のことです。本学には、文学部に国文学科・史学科・地理学科・文化財学科の4学科と社会学部に心理学科・総合社会学科の2学科の合計6学科を置いています。さらに大学院に文学研究科・社会学研究科があり、世代を超えてさまざまな方が学ぶ通信教育部を置いています。一つのキャンパスの中で約3,900名の学生が学んでいます。奈良で学びたい学生が全国から集まり、自宅外から通う学生は半数を超えます。全国から奈良に集まった仲間と歴史・地理・文化財・文学など、貴方が好きな学問を学びながら一緒に青春を過ごせる場所が奈良大学です。さらに、大学図書館には56万冊以上の蔵書があります。特に15万冊を超える文化財専門書を擁しており、大学図書館ランキングで1位になったこともあります。奈良大学図書館は日本屈指の歴史・文化財情報に関する「知の拠点」としても注目されています。

「全国高校生歴史フォーラム」は、高校生が自分たちで調べて考え、真実を発見するなど、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを導入することで、歴史や地理、文化・文化財を探究する醍醐味を実感してほしいという願いから2007年に始まりました。第1回目は全国の22校から72編の応募が集まりました。第18回目となる今年度は、参加校が全国31都道府県から68校、応募点数が86編を数えました。今回も審査委員会による厳正な審査の結果、優秀賞に5編、佳作として6編が選ばれました。いずれも時間をかけ工夫を重ね、知恵を絞った力作です。授賞された皆さまには、心からおめでとう、とお祝い申し上げます。

最後になりましたが、「第18回 全国高校生歴史フォーラム」の開催にあたり、ご尽力を賜りました皆さまに心から感謝申し上げます。特に、ご指導にあたられた先生と熱心に研究して応募された全国の高校生の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

審査結果の講評

第18回全国高校生歴史フォーラム実行委員長 比佐 陽一郎

全国の高校生の皆さん、今回も全国高校生歴史フォーラムに沢山の研究成果をお寄せいただき、誠にありがとうございました。それぞれの課題に真摯に取り組み、個人で、あるいはグループでその成果をまとめ上げた応募者の方々、そしてそれらを指導し、暖かく見守ってこられた先生方やご家族の皆様に篤く御礼を申し上げます。

すべてのレポートに目を通しながら、若い皆さんの発想力や感性に驚き、時には感動しておりました。長く研究を続けていると視野が狭くなったり、自分の考えに固執したりすることも多くなりますが、この歴史フォーラムのレポートを見るたびに、自由な発想や行動力の重要性を改めて思い知らされます。

今回もレベルの高いレポートが数多くあり、研究者である多くの大学教員が喧々譁々議論をしながら審査を進めました。発想や着眼点に重きを置く人、研究の過程を重視する人、様々な観点から意見を出し合いましたが、やはり決め手になるのは、レポートからにじみ出る皆さんの努力であったり、地域への愛情だったと思います。一つのテーマについて、じっくり調べて課題を解決することは、この先の人生で必要不可欠な事であり、それを今の段階で経験できている皆さんは、これからも様々な困難に出会いながらも、逃げることなく前に進んでいけるものと確信しています。

この歴史フォーラムで取り扱われるテーマは、いわゆる文化財です。文化財とは長い歴史の中で人々によって生まれ、受け継がれてきた地域の財産です。世の中は便利になり、生活様式や社会の在り方が変化する現在、高齢化や過疎化によって文化財の保護はどんどん難しくなっています。そのような中で地域や身の回りの文化財に着目し、そこに光を当てようとする皆さんの力は、これからの社会の中でますます存在感を増すことと思います。今回、優秀賞、佳作に選ばれた方々は、発想力、調査手法、成果のまとめ方が少しだけ？上回った人たちですが、そこにチャレンジしようと思う気持ちはすべての皆さんに共通するものであり、賞には関係なく尊いものです。

今回賞に選ばれた方々は、応募いただいた皆さんの代表として、是非、楽しみながら、その成果を広く発信してください。惜しくも賞に届かなかった皆さんも、研究のすばらしさ、楽しさを忘れることなく、文化財に向き合い、その価値を多くの人たちに伝えていてもらいたいと思います。皆さんのこれからの人生が文化財によって広がり、深まることを期待します。

審査結果

優 秀 賞

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



駒場東邦中学校・高等学校

研究者名：伊藤拓生

研究タイトル：新発見の山城「赤柴城」の存在意義
—その立地と縄張りの比較分析—



岐阜県立関高等学校

研究グループ名：地域研究部

研究者名：土本徳哉・森翔吾・岩原知哉・渡辺俊太・佐藤孝亮

研究タイトル：戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材



京都府立鴨沂高等学校

研究グループ名：京都文化コース2年生

研究者名：石川健志朗・岩崎紗良・上田彩夏・大橋雫・小田原チヨ・酒井謙
竹内景翔・田中咲・中村明莉・樋口仁子・牧原佳乃子

研究タイトル：本校が所蔵する明治時代の西洋画の作者について



愛媛県立松山北高等学校

研究グループ名：郷土研究部

研究者名：森川晴仁・岸本美花・岡部美紀・森貞裕太郎・谷口凱星
山住悠理

研究タイトル：松山市に伝わる小野小町伝承の謎を解く



長崎県立壱岐高等学校

研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース2年 歴史学専攻

研究者名：片野一帆・後藤健・須賀干城・丸山隼平

研究タイトル：興原古墳の石材運搬に関する研究
—古墳時代社会解明への道しるべ—

審査結果

佳 作

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



筑波大学附属中学校・高等学校

研究者名：大谷一真

研究タイトル：坂本龍馬秋山某宛書簡における「秋山先生」考



世田谷学園中学校・高等学校

研究者名：濱崎孝則

研究タイトル：下野薬師寺の戒壇設置について
—氏寺からの官寺化として—



静岡県立富士高等学校

研究者名：渡邊 正太郎

研究タイトル：富士郡における土族の地方行政進出
—沼津勤番組員を中心に—



静岡県立浜名高等学校

研究グループ名：史学部

研究者名：加藤大雅・馬淵太一

研究タイトル：人と道と道の関係性
～東海道、姫街道、そして犬くぐり道などからの考察～



愛知県立五条高等学校

研究者名：小山さくら

研究タイトル：各務支考賛松尾芭蕉図の研究



長崎県立大村高等学校

研究者名：前田英太郎

研究タイトル：大野遺跡や出津遺跡のキリシタンが禁教令下の時代に発見されなかった理由について
～大村氏・深堀氏との関係性・歴史や地理的環境から読み解く～

優秀賞研究レポート

(高等学校等コード順に掲載)



新発見の山城「赤柴城」の存在意義

－その立地と縄張りの比較分析－

駒場東邦高等学校

伊藤 拓生



(1) はじめに

長野市周辺には川中島の戦いの際に築かれた数多くの城が現在も残っている。上杉謙信に対抗した武田信玄は、海津城を中心に、雨飾城や鞍骨城といった城を取り込み、強力な山城ネットワークを築き上げた。これらの城は発掘調査を含め、多くの研究がなされており、現在多くの事実が分かっている。このように今ある城を調べる研究がある一方で、新たな城を見つける研究もある。それは京都新城のように発掘調査で見つかることもあれば、デジタル技術を用いて、地形図から新たな山城が見つかることもある。色で地形を表した地形図から遺構と思われる影を探すこの方法では、多くの城が発見されてきた一方、それは全国には普及しておらず、同様の方法で城が見つかることがまだあると思われる。

このような状況は川中島周辺も例外ではないと考え、地形図の1種であるCS立体図を見たところ、長野市松代町赤柴の山中に曲輪や堀切などを持つ未発見の城跡のような影が地図上で確認できた(図1)。そこで現地調査を行い、それが曲輪や堀切、土塁、切岸などを持つ未発見の山城であると判断した(以下地域名をとって仮に赤柴城と呼ぶ)。そこで本稿は、この新発見の山城、赤柴城の構造を分析した上で、どのような役割があったのかを考察する。

(2) 赤柴城の発見とその構造

1. CS立体図と赤柴城の現地調査

近年新しい山城や遺構が見つかることがあるが、それらは赤色立体地図などの地形図によるものが多い。これらの地図は色の濃淡で斜面の緩急を表し、細かな微地形も地図上に表す。そのような地形図の中に、長野林業総合センターが考案したCS立体図というものがある。CS立体図は他の立体図と同様に斜面や平地を表すのと同時に、赤と青の二色を使うことで凹凸を視覚的に捉えやすくしているのが特徴である。

今回、そのようなCS立体図で長野市赤柴に山城のような影を見つけた。CS立体図では、堀切や曲輪など傾斜が異なるものは異なる色、濃度で表示され、実際の城は図2のようになる。赤柴にある影もこれらと類似しており、ここに未発見の山城があると推定した。

2024年4月28日に実際に現地調査をしたところ、きれいに削平された曲輪をはじめ、3メートルほどの堀切や切岸など多数の遺構が確認された。現地では写真を撮るだけでなく、ケバで城の構造を視覚的に表す縄張り図を作成することで、城の詳細な構造を記録した。また、現地での調査の後、様々な資料(参考文献参照)や埋蔵文化財地図にないことを改めて確認した[註1]。

2. 赤柴城周辺の地理

まず、赤柴城が立地するのは長野県松代町赤柴の山中である(図3)。標高は約750m、比高は約230mで、主郭と麓との直線距離は約400mである。松代から地蔵峠を通り、上田へ抜ける長野真田線がすぐ近くを通る。この地蔵峠を通る道は昔から街道として存在しており、千曲川沿いの葛尾城が健在だったころは、この街道を使って松代方面に抜けていたと思われる。1550年に寺尾城が攻められた時、信玄が真田幸隆を援軍として送った際に通った道もこの街道と考えられており、当時この街道は武田氏にとって大切

であった〔註2〕。現在、木の間からは皆神山や松代周辺など平野部も見える。

山の続きにはノロシ山、向かいの山には関屋城、少し離れたところに雨飾城などがある。平野部にある松代城（海津城）とは直線距離で5 km以上離れている。

3. 赤柴城の構造

図4は現地調査で作成した縄張り図である。現地で歩測をして測量し、作図をした〔註3〕。これを見ると、城は両側の斜面が比較的急な細い尾根に築かれており、Ⅰ郭、Ⅱ郭、Ⅲ郭、Ⅳ郭の4つの曲輪から成ることが分かる。Ⅰ郭は上下2段に別れており、上段の堀切側には土塁Aが築かれている（図5、6）。土塁の東側は少しだけ開いており、堀切に木橋をかけた虎口だった可能性もある。Ⅰ郭の下段には上段との境目に虎口Bがある（図7）。曲輪の東側には細い道の跡もあり、この虎口は北側からの道を取り込むものだったと考えられる。正面から曲輪の側面に開いた虎口に誘導する導入路は技巧的なつくりである。主郭下段の曲輪の北側はとても急な切岸となっており、正面への強い攻撃を可能としている（図8）。

Ⅱ郭はⅠ郭の南側に位置し、Ⅰ郭より少し高い場所に位置する。Ⅰ郭は削平がされており、小屋のようなものが建っていたことが考えられる一方で、Ⅱ郭は自然地形に近く、恒久的な建物が建っていたとは考えにくい。Ⅰ郭とは深さ3.5 m程（目測）の大きな堀切Cによって隔てられており、Ⅰ郭への攻撃を防いでいる（図9、10）。Ⅱ郭の南側にも浅い堀切Dがあるが北側の堀切と同様に縦堀にはつながっていない〔註4〕。

Ⅲ郭、Ⅳ郭はⅠ郭の北側に築かれており、Ⅱ郭と同様に削平は甘い。Ⅲ郭とⅠ郭の間、Ⅲ郭とⅣ郭の間にはそれぞれ浅い堀切Eと堀切Fがある。Ⅳ郭は堀切Fのそばに遺構と思われる人工地形があるが、北の端は明確でない。

このように、当城は主郭と思われるⅠ郭を除いて削平が全体的に甘く、規模を考えれば50人から多くても100人程度が守っていたと推測される。しかし、小さいながらも主郭の側面に開いた虎口や、Ⅰ郭の南側にある大胆な堀切など守りのプランは明確である。

（3）赤柴城と他の城の比較

赤柴城はその立地から、在地勢力や真田氏、武田氏などによる築城が想定できるが、管見の限りでは資料には赤柴城は登場しない〔註5〕ため、その構造や立地から築城主体や役割を想定する必要がある。そのため、ここでは赤柴城の構造と立地をそれぞれ周辺の城郭と比較して、その役割などを検討をすることにする。

1. 構造の比較

まず、赤柴城の縄張りを周辺の城と比較する。城の構造は、その役割で大きさなどが多少は左右される一方で、その城の防御の要となる部分を中心に、築城主の差が出ることが多い。逆に言うと、同じ築城主によって築かれた城は似た構造を持っているということである。よって、赤柴城と似た構造を持つ城と比べることで、赤柴城が誰によって築かれたのかを明らかにすることができる。

初めに前提として、赤柴城は地蔵峠を通過して上田へ抜ける道が眼下に通るため、赤柴城

の築城主はこの道と深く関係していると推測できる。この道を重要視したと思われる勢力として、第一に在地勢力を挙げることができる。この辺りには東条氏など多数の在地勢力がおり、山々に城を築いていた。第二に想定できるのは川中島の戦いで善光寺平に進出してきた武田氏だ。在地勢力の城を取り込む中で、赤柴城も改修、または築城された可能性がある。以上のように、赤柴城の築城主は在地勢力または武田氏と絞ることができる。

次に、在地勢力と周辺の武田氏の城の構造を比較する。比較するポイントは、虎口の形状である。虎口の形は、築城主の縄張り技術を顕著に表し、同じ大名家の城は似た構造をした虎口を持つことが多い。特に武田氏の虎口は明確な構造を持つものが多く、よく縄張りの判断基準になってきた。ここで、赤柴城の主郭にも特徴的な曲輪の側面に開口した虎口、いわゆる比企型虎口がある（図11）。比企型虎口は正面に火点を集中させた上で、曲輪の側面に開口をする虎口である〔註6〕。この虎口は比企地方に限らず全国各地で見ることができる一方で、発達した虎口の形状であるため、すべての築城主が等しく用いることができた訳ではない。比企型虎口の発生には時間差もあり、この虎口の有無を周囲の城と比べることで、赤柴城の築城主の技術力を周囲の城と比べられる。

ここで、実際に他の城と比企型虎口の有無を比較してみる。まず前提として、在地勢力の城と思われるのは、関屋氏の関屋城、清滝城、笠原氏の笠原城である。もともとは、松代周辺に他にも多くの在地勢力の城があったと思われるが、川中島の戦いにより、多くの城が武田側に改修されたと言われる。一方、武田側の城は鞍骨城やノロシ山をはじめとした松代周辺の10城を分析する。表1はこれらの13城の比企型虎口の有無をまとめたものである〔註7〕。これを見ると在地勢力の城では比企型虎口が確認できない一方で、武田氏の城は比企型虎口が10か所中5か所の城で確認できたことがわかる。在地勢力の城と武田氏の城ではデータ数が異なることも否めないが、在地勢力の城はそもそも土塁などを用いた明確な虎口も持っていないという点で、比企型虎口の存在の可能性は低い。比企型虎口のように敵を曲輪の側面に誘導するという発想も見られず、在地勢力の城は堀切での徹底的な遮断を重要視している。その一方、武田氏は土塁などによって虎口が明確化されている上に、松代周辺では比企型虎口を持つ城の割合は50%と高いといえる。実際この比企型虎口は松代周辺の城だけでなく、1530年ごろに築城されたといわれる笹尾城や武田氏末期の城まで幅広く確認することができる。このデータからは、在地勢力の城と比較すると武田氏の城は技術面で優れていると評価でき、比企型虎口の有無に明確な差があると言える。以上より、特定の虎口の有無という視点では、比企型虎口を持つ赤柴城は比企型虎口を用いない在地勢力ではなく、武田氏によって築かれたと推定できる。ただし、街道を見下ろすという立地から、元々あった在地勢力の城を武田氏が改修して現在の姿になったということも考えられる。

現在の赤柴城の縄張りが武田氏の手によるものと分かったところで、同じ山続きにあるノロシ山と虎口以外の点についても比較していく。まず堀切について、両城は共に堀切を設けているが、それらは縦堀につながっていない。松代の武田氏の城では、縦堀につながる堀切が多く築かれているが、ノロシ山や赤柴城がある山々は斜面が急であるため、両城では縦堀があまり設けられなかったものと思われる。主郭の背後の尾根には共に2つの堀切が築かれているが、その深さは赤柴城とノロシ山のいずれも3m程度である。堀切の上部の幅もおおよそ同じであり、堀切の規模間や形状はとても似ている。また両城の曲輪に

ついて、どちらも主郭とそれに続く曲輪（赤柴城の場合は2段の主郭）はきれいに削平されているのに対して、その以下に続く曲輪は自然地形に近いものが多い。削平された曲輪の幅が7～8m程度であることや、長さが15m程度であることも両城で一致している。さらに、土塁が城の背後に対して部分的に築かれている点でも赤柴城とノロシ山は共通しており、両城は極めて似た構造をしていると評価できる。

以上分かったことをまとめると、赤柴城は在地勢力と城よりも武田氏によって築かれた（改修された）城に類似しており、特に同じ山続きに築かれたノロシ山と構造が酷似していると評価できる、ということである。

2. 立地の比較

構造の次は、赤柴城の立地を周辺の城と比較して検討する。構造は築城をした勢力を表す一方で、立地は普遍的に城の役割を表す。主に検討するのは城の麓からの比高とその面積だ。まず、城の比高は平野部とのつながりを表す。狼煙台や監視のための城は視界の開けた比高の高いところに築かれるが、兵を駐屯させるような城は、平野部への出撃の利便性を踏まえ、比高の低いところに築かれる場合が多い。一方、城の面積は当時駐屯していた人の大まかな数を表す。監視のための城は兵の数が少ないため、面積は小さくなる一方、拠点城郭のような城は、兵の数も多く、城の面積も大きくなる。よって、比高と面積を比較検討することで、赤柴城の築城された意図を考察することができる。

具体的に検討するのは、赤柴城を含め、武田氏によって使用された11城である。比較対象は赤柴城を築いた武田氏の城のみとする。比較の視点となる比高は、国土地理院地図を用いて主郭と登城路の麓の標高差を求めた。また、比高とともに比較する面積は、縄張り図を参考に、ひなたGISのCS立体図から求めた〔註8〕。

図12は以上のようにして求めた比高と面積をまとめたグラフである。横軸に比高、縦軸に面積をとっており、赤柴城のデータは赤く色を変えている。この図からは、赤柴城を除いたドット（青いドット）は主に三つのグループに分かれることがわかる。

左真ん中のグループ（仮にグループ①）は、竹山城や寺尾城をはじめとした城のグループで、比高はそこまで高くないが面積は中ぐらいの城である。竹山城と寺尾城はいずれも海津城の両翼を担う城であり、両城とも広い曲輪を持っている。他のグループ①の城も、その面積の大きさから多くの兵が駐屯できたと推測できる。また、比高が低いことから平地部とのつながりの強さも考えられ、これらは平野部での戦いの際に機動的に兵を動かすための戦略拠点としての城であると考えられる。

右下のグループ②は、雨飾城やノロシ山などのグループで、面積が他のグループより小さい一方、比高がとて高いのが特徴である。ノロシ山はその名の通り狼煙を伝える城だと言われており、松代地域の城の多くを見渡すことができる。古城山城にも物見と思われる曲輪が存在し、雨飾城も視界がとて良い。比高が高いことで、このようなメリットがある一方で、城から兵が出撃することには少々向いていない。そのため、それぞれの城は必要最小限の大きさの曲輪しか設けていない。グループ②の城は、平時は物見としての役割を果たし、有事にはその要害性を生かして籠城し、相手の追撃を遅らせたのであろう。

右上は鞍骨城だけからなるグループ③で、比高が高い上に面積も大きい。比高が高いことからグループ②と同様に視界が優れ、南方への連絡網の拠点と言われる大峯山や、海津

城、上杉氏の本拠である善光寺などを見渡すことができる。その一方、縄張りは周辺の山城の中では大規模であると言え、広大な曲輪や堀切を持つ。グループ①と②では共存し得なかった比高と面積であるが、鞍骨城ではどちらも周辺の城の中でトップクラスである。これは鞍骨城がもともと清野氏の城として築かれていたことも理由としてあるが、それ以上に何としても敵の手に渡ってはいけない司令塔としての役割があったが故であると思われる。

以上3グループの役割を大まかに分析したが、赤柴城はどれに入るのでしょうか。まず最初に否定できるのがグループ③である。司令塔としての役割を持つ鞍骨城には比高も面積も明らかに及ばず、グループ③としての役割は完全に否定できる。では、赤柴城はグループ①と②のどちらに属するのか。グラフ上では赤柴城はちょうど中間あたりの微妙な位置に存在しており、これだけだと判断ができない。そこで、表3のように赤柴城から見える城を考えると〔註9〕、赤柴城から見える武田氏の城はノロシ山と松代城に限られていることが分かった。当時は、ノロシ山からは鏡台山などを経由して葛尾城や岡城などに伝達したと言われている。狼煙を伝えるルートが複数あり、この赤柴城もノロシ山から地蔵峠付近を経由して伝達するルートの一部であった、ということも考えられるが、赤柴城から見える城が他に少なかったことから、赤柴城は狼煙を伝えたり、物見としての役割は期待できないのではないかと〔註10〕。また、赤柴城はグループ①にしては大きさが小さすぎ、善光寺平からも遠いという立地も考えると、戦略拠点としての役割も考えづらい。ではグループ①、②のどちらにも属さない赤柴城の役割は何か。一つの説として街道の監視や、山城ネットワークの後ろの抑えとして、武田氏本隊撤退の援護をする役割などが推定される。まず街道の監視について、赤柴城の麓では街道が方向を変え城に取りつくように曲がっている（図3参照）。広い範囲の監視の場合はなるべく比高の高いところに築城したほうがいいが、目的の決まった監視は麓との距離感も大事である。赤柴城はこの街道を見渡すのに一番いい位置であることを考えると街道の監視という役割が考えられる。次に武田氏本隊撤退の援護説について、赤柴城は小さい規模の割に比企型虎口や4本の堀切など防御が充実しており、最後まで籠城することのできる構造である。この街道は上田への裏道という点で、海津城からの撤退の際は重要な道になると考えられる。地蔵峠は急峻なため撤退のスピードが落ち、追手が追い付いてくることも想定される。そのような中で少ない兵で籠城して相手を足止めする役割の城がこの場所にあることは考えられないだろうか。この場所は山道に入る直前でもあり、足止めにはちょうどいい立地である。十分な根拠はないが、松代地域における山城ネットワークの後ろの抑えとして赤柴城が築かれた可能性は十分あるのではないだろうか。

（4）おわりに

CS立体図という全国的に普及していない方法で見つけた赤柴城は、街道を見下ろす位置にあり、比企型虎口や4本の堀切といった防御施設も備わっていた。築城主については比企型虎口の有無から武田氏であることが分かったが、役割については3つに分けたグループのいずれにも当てはまらなかった。現在の時点で考えられる赤柴城の役割は街道の監視や、山城ネットワークの一部として武田氏本隊の撤退時間を確保する役割が考えられる。

参考資料

参考文献

- ・大平喜多間『松代町史 上巻』臨川書店、1927年
- ・児玉幸多、坪井清足『日本城郭体系 第8巻 長野・山梨』新人物往来社、1980年
- ・中澤克昭、河西克造『甲信越の名城を歩く』吉川弘文館、2018年
- ・中田正光『【新装版】戦国武田の城 城郭から見た武田三代史』洋泉社、2010年
- ・西股総生『パーツから考える戦国期城郭論』ワンパブリッシング、2021年
- ・松岡進『中世城郭の縄張りと言空間 土の城が語るもの』吉川弘文館、2015年
- ・宮坂武男『信濃の山城と館 第2巻更埴・長野編』戎光祥出版、2013年
- ・山梨県教育委員会、長野県教育委員会『中部地方の中世城館2 山梨・長野』東洋書林、2001年

- ・国土地理院「国土地理院地図」

<https://maps.gsi.go.jp/#5/36.104611/140.084556/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>、2024年9月1日最終アクセス

- ・国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」<https://dl.ndl.go.jp/ja/>、2024年9月1日最終アクセス

- ・長野市行政地図情報「遺跡地図」

<https://www2.wagmap.jp/nagano/Map?mid=7&mpx=138.23595879115487&mpy=36.528967044117124&mps=25000&mtp=dm&gprj=3&fid=1001-15&ffid=1001-15>、2024年9月1日最終アクセス

- ・HINATA GIS「ひなたGIS」

<https://hgis.pref.miyazaki.lg.jp/hinata/hinata.html#6/37.856000/140.097000&l=%5B%5B%7B%22n%22:%22pale%22,%22o%22:1,%22z%22:610%7D%5D,%5B%7B%22n%22:%22pale%22,%22o%22:1,%22z%22:609%7D%5D%5D>、2024年9月1日最終アクセス

註釈

1. 現在、長野県埋蔵文化財センターに縄張り図や写真を添付した資料を提出して、赤柴城を発見したことを報告をしている。なお、その時提出した資料と今回の研究レポートは全く異なる。

2. 1550年、『高白斎記』に、

「高梨坂木和談於半途対面昨日寺尾ノ城へ取カケラルノ間真田方ハ助トシテ被越候」

とあるように、武田方となっていた寺尾氏の寺尾城は高梨氏と村上氏の連合軍に攻められた。これに対して、武田信玄は真田幸隆を援軍として送った。しかし、この頃は敵対する村上氏の居城、葛尾城（1553年自落）が健在であり、千曲川沿いに進軍することは敵対する勢力の目の前を通ることを意味していた。よって真田幸隆は、上田から松代へは地蔵峠を通過する街道を通っていたと考えられている。また葛尾城が自落した後も、塩崎の対陣など上杉氏との戦線が動く中で、海津城から平野部に出ずに上田へ撤退できるこの街道の意味は大きかったと考えられる。

3. 縄張り図の具体的な作図方法は以下の通り。

- ① CS 立体図と国土地理院地図を重ねた地図の北と、コンパスの北を合わせる。
- ② 遺構の平坦面の淵の長さを歩測で測り、実線を遺構の向きをと合わせながら地図に書き込む。この時、単歩 40 歩分が 30m として計算した。
- ③ 斜面の下も②と同様に長さを計測し、点線で地図に書き込んだ。
- ④ 実線と点線の間をケバで表現した。この時、傾斜がきつところほどケバを密度を濃く、緩いところほど密度を薄く書いた。
- ⑤他の遺構と関係性を見いだせないもの、自然地形と考えられるものは地図に記入しなかった。
- ⑥最後に現地で書いた地図をトレーシングペーパーで書き写し、清書をした。

4. 堀切は縦堀と連続することで斜面の移動を制限していることが多い。しかし、これらは斜面が緩やかで敵の移動が可能となっている時の対策であり、斜面が急な場合は縦堀を設ける必要はない。よって、赤柴城において縦堀につながっていないことが築城主の技術力の無さを表すことはなく、逆に臨機応変に築城していると評価できる。

5. 今回の赤柴城の発見を受け、赤柴城が当時の史料に記載されていないかを調べるために、国立国会図書館のデジタルコレクションにおいて様々なキーワードで検索した。字名の赤柴や豊栄、地蔵峠、ノロシ山などを検索したが、赤柴城に関連する記述は見つからなかった。国立国会図書館のデジタルコレクションで調べられる史料は限られているため、もしかしたら他の所に関連した記述が眠っているかもしれない。

6. 比企型虎口とは西股総生氏によって提唱された虎口の一種で、長方形に突出した曲輪の側面（細長い曲輪の場合もあり）に開口部を設け、前面に火点を集中させる虎口である（図 1 1 も参照）。杉山城や小倉城、腰越城など埼玉県比企郡の城に多く見られることから「比企型」虎口と呼ばれている。実際は比企地方に限らず全国各地の城で見られ、長野県の城でも見ることができる。しかし、この比企型虎口の発生は全国で均一に起きた訳ではなく、比企型虎口を使える者と使えない者がいた。武田氏や後北条氏らは早くにそれらを駆使していた。

7. 現地調査ができなかった城に関しては、宮坂武男氏の『信濃の山城と館 第2巻更埴・長野編』を参考にして分析をした。この後の分析の際も同様。

8. 城の比高については、国土地理院地図の断面図作成ツールを使用。また各城の面積は、縄張り図とひなな GIS の地形図を照らし合わせながら、できるだけ正確に計測をした。

9. 現在、赤柴城は木で囲まれているため木の間からしか遠くは見えないが、当時は周囲の木はある程度切られていたはずである。ここでは木を無視した状態でどれだけの城が見えるのかを検証したい。そこで、国土地理院地図の断面図作成機能を用い、赤柴城と指定の城の間に視界を遮る山や尾根などが無いかを調べることで、互いの城が見えていたのかを検証した。

10. 後北条氏の長浜城周辺の狼煙のルートが複数つくられていたように、武田氏も狼煙のルートを複数設けていた可能性は十分ある。しかし、赤柴城の次の狼煙台を考えたとき、山奥で細かく狼煙をつなぐことになり、かなり効率が悪い。よって赤柴城に狼煙台としての役割はないのではないか。

図・表



図1. 赤柴城のCS立体図

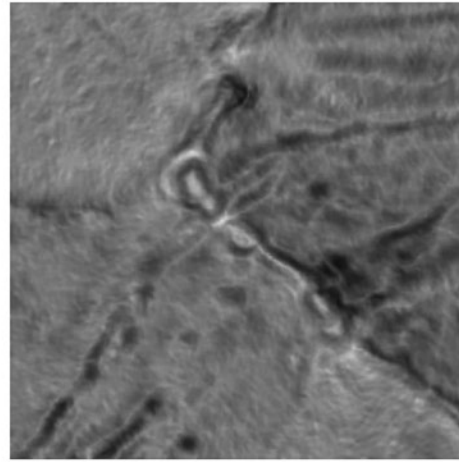


図2. ノロシ山のCS立体図

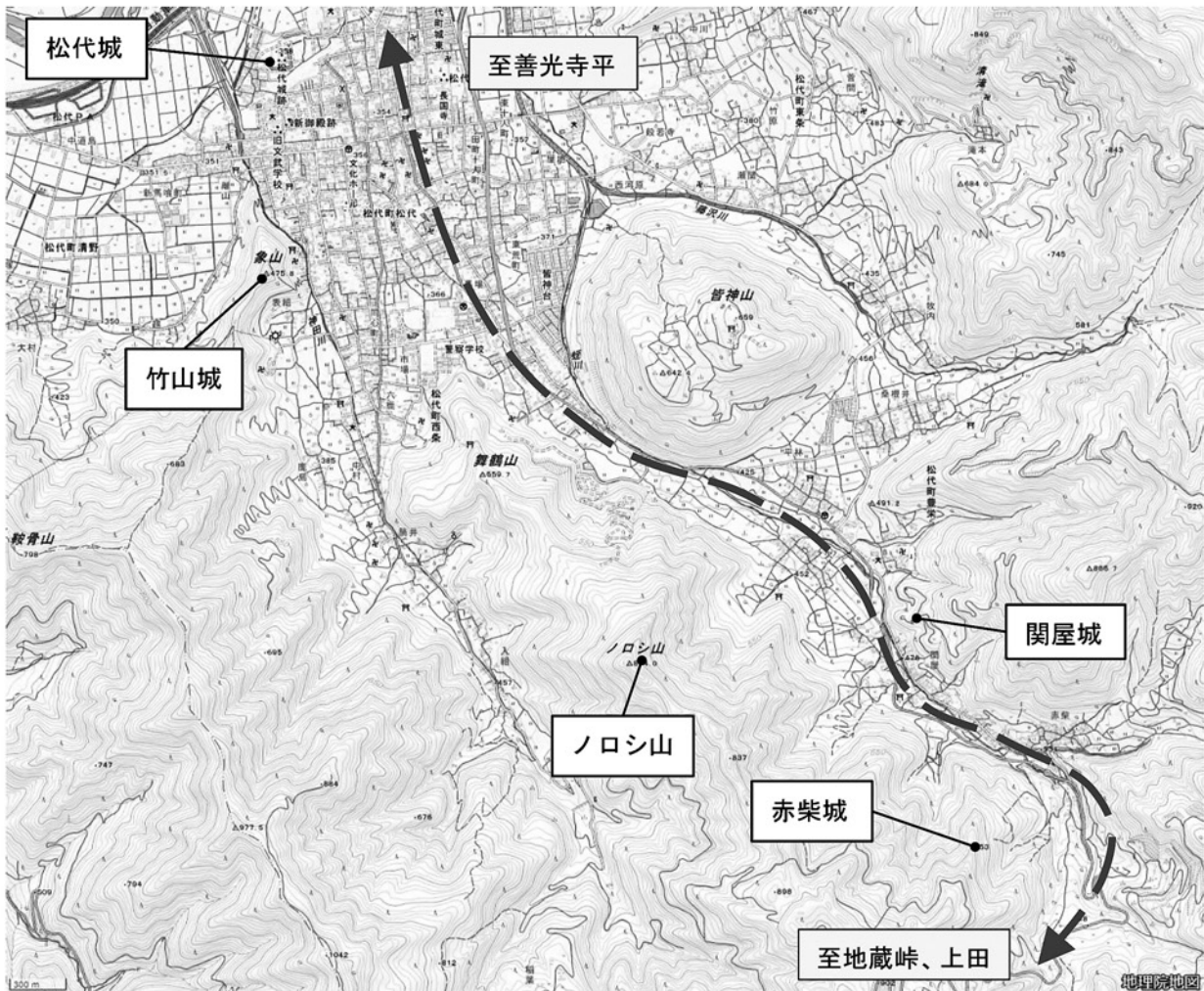


図3. 赤柴城周辺の地理 (赤い点線が街道)

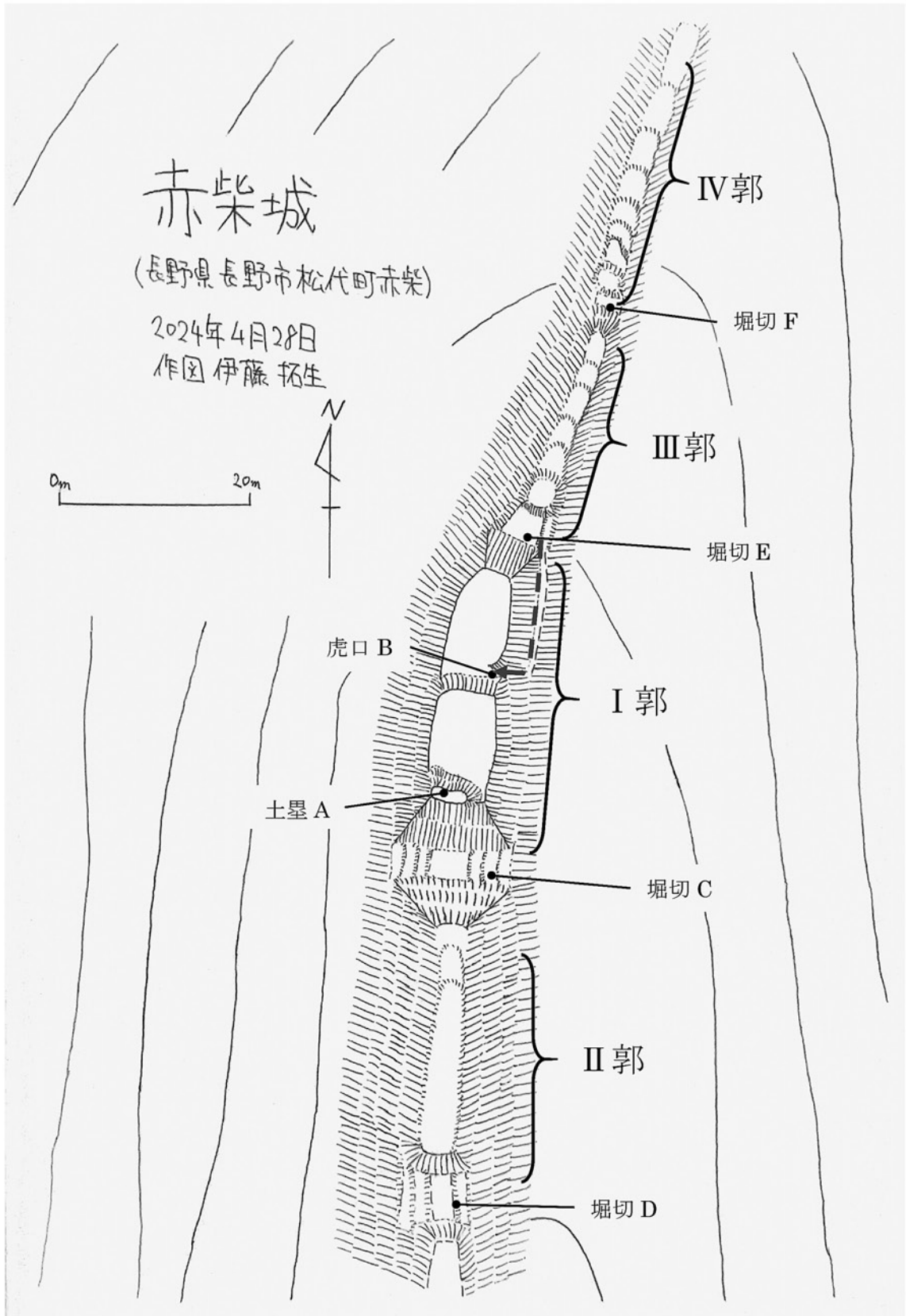


図4. 赤柴城城縄張り図 (点線が想定される道)



図5. 主郭の写真（奥が上段、土塁もある）

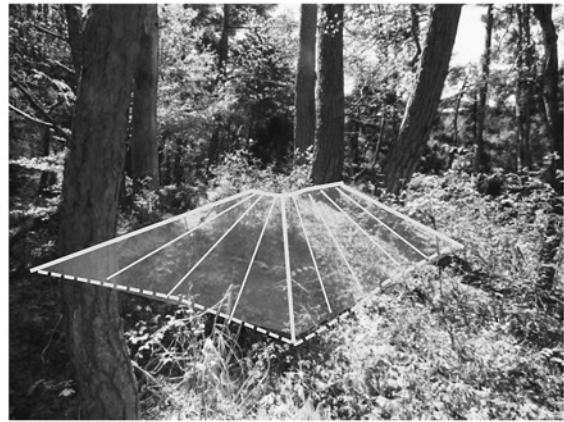


図6. 主郭土塁Aの写真



図7. 主郭虎口の写真（矢印は図4、11と対応）



図8. 主郭北面の切岸の写真



図9. II郭から見た堀切Cの写真



図10. 横から見た堀切Cの写真

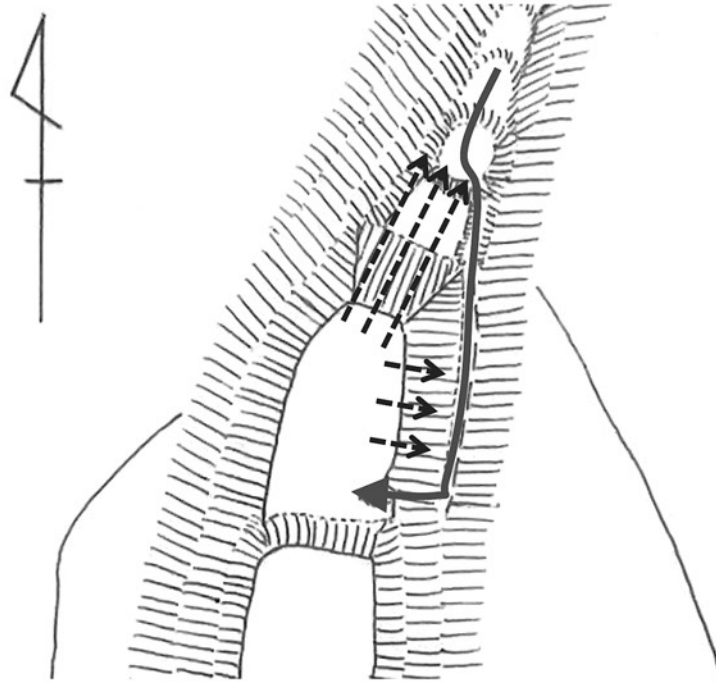


図 1 1. 赤柴城の比企型虎口（点線の矢印が火点を表す）

表 1. 赤柴城周辺の比企型虎口の有無

	比企型虎口の有無
赤柴城	○
ノロシ山	×
雨飾城	×
竹山城	○
寺尾城	×
金井山城	○
古城山城	○
鷲尾城	×
鞍骨城	○
天城城	×
唐崎山城	○
関屋城	×
笠原城	×
清滝城	×

※中段の 10 城が武田氏、下段の 3 城が在地勢力の城

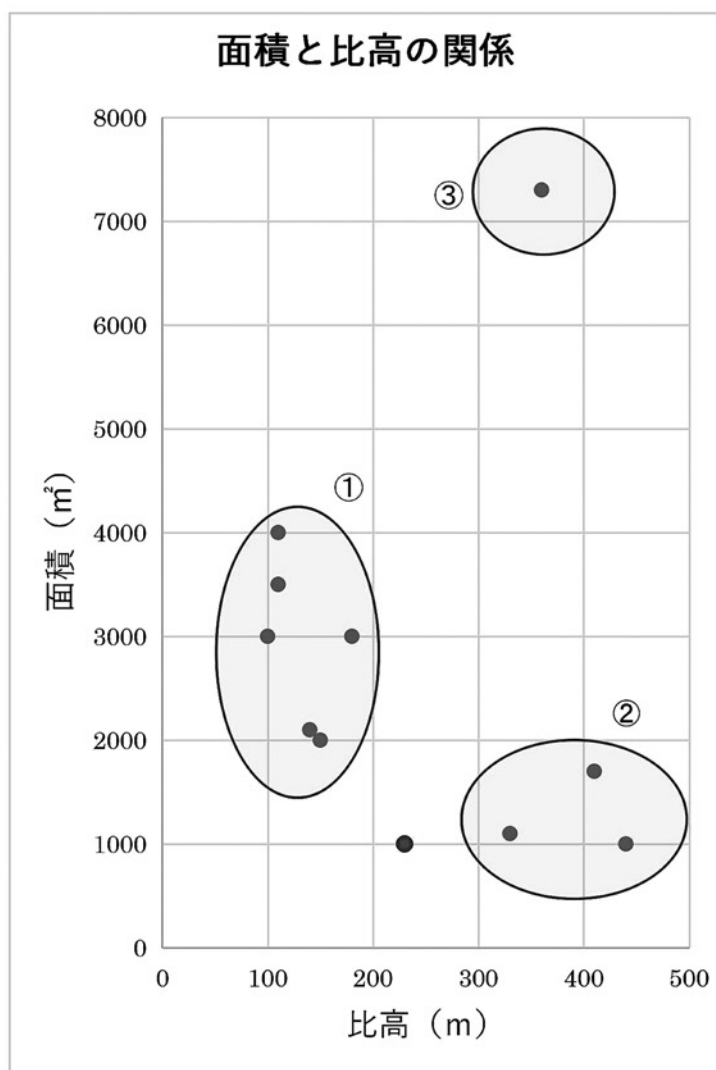


図 1 2. 面積と比高の関係

表 2. 面積と比高の関係

	比高	面積
赤柴城	230	1000
ノロシ山	440	1000
竹山城	110	3500
鞍骨城	360	7300
鷲尾城	150	2000
雨飾城	410	1700
寺尾城	110	4000
金井山城	140	2100
唐崎山城	100	3000
天城城	330	1100
古城山城	180	3000

表 3. 赤柴城から見える武田氏の城

	赤柴城からの視界
ノロシ山	○
竹山城	×
鞍骨城	×
鷲尾城	×
雨飾城	○
寺尾城	×
金井山城	×
唐崎山城	×
天城城	×
古城山城	×
海津城	○



戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材

岐阜県立関高等学校地域研究部

土本徳哉 森翔吾 岩原知哉 渡辺俊太 佐藤孝亮



下呂市祖師野八幡宮幣殿の床板に残るチョウナ痕 (2024.5)

目次

- はじめに ～飛騨川流域の製材と運材～
- 第1節 樽について① 祖師野八幡宮の床材調査
- 第2節 樽について② 棟札に登場する樽
- 第3節 鉄製工具について① 生産と調達
- 第4節 鉄製工具について② 工具類に関する推察
- 第5節 近世事例からの類推
- まとめにかえて ～「どうじゃこう」と「田の神祭り」～



はじめに ～飛騨川流域の製材と運材～

永禄10（1567）年8月、稲葉山城を攻略した織田信長は、同年12月、武儀郡関町の商人長谷川三郎兵衛に、飛騨川流域から関町までの樽之座の特権を与えた（注1）。樽とは、皮付きの丸太もしくは加工した板材をさす（写真1～4）。飛騨川を使って流送される丸太を陸揚げし、木挽きした上、販売する特権を与えたということである。飛騨川流域の木材産出量は、本流木曾川のそれに匹敵するほど豊富であった（注2）。美濃制圧後、岐阜城下町の整備を急いだ信長は、三郎兵衛に命じ、飛騨川流域から岐阜に向け、陸路・河川を用いた建築材の大量輸送を行わせたと考えられる。

「楽市楽座」のイメージでとらえられがちな信長だが、製材や鍛冶などの特定業種に関しては、特権的な座の制度を認めていた（注3）。長谷川家は、樽之座以外にも、関町代官職や加茂郡迫間の土地開発も任されている（注4）。関町や長谷川家への厚遇とも言える政策は、岐阜城下町の整備、領内の産業振興のための一環だったと考えられる。

2019年以降、「信長の東美濃征服」に関する研究を進めている関高校地域研究部は、上記の知見を踏まえ、飛騨川流域の製材・運材の問題に焦点を当てた研究を行うことにした。この問題が、信長自らが朱印状を発給するほどの重大事であったことに、強い関心を抱いたからである。調査にあたっては、自治体史の検証と現地調査、レポートの作成と再検討を繰り返し行った。以下はその成果である。第1節では樽の伝世品、第2節では棟札に登場する樽、第3・4節では鉄製工具を扱い、製材・運材の諸問題にアプローチする。さらに第5節では近世の事例を参考に、戦国・織豊期の流送・陸送の実態を想定してみる。第6節では、長谷川三郎兵衛の末裔が取り仕切る関市春日神社の神事芸能「どうじゃこう」や、富加町加治田伊和神社の「田の神祭り」について触れつつ、今後の課題を模索する。

第1節 樽について① ～祖師野八幡宮の床材調査～

木曾川・飛騨川合流点（美濃加茂市川合）を40kmほどさかのぼると、下呂市金山町にいたる。昭和初期まで運材の拠点として栄えた金山湊の所在地である（注5、写真5、地図）。飛騨川支流の馬瀬川をさかのぼった場所にある祖師野八幡宮に、古い板材があると聞いた我々は、許可を得て幣殿に入り調査を行った（注6、写真6、地図）。

幣殿の床材8枚には、材の長軸に向かって斜行するチョウナ痕が、はっきりと残されていた（写真7・8）。加工痕の平均値は長さ6cm、横幅2・6cmほどで、板材の材質・加工痕・加工法には共通性が見られる。「春日権験記絵巻」に描かれているように、立てかけた板材を片手で支え、利き手に持ったチョウナを斜めに振り下ろしながら調整した様子が目に浮かぶような資料である。（注7、図版・復元図参照）。幣殿には、チョウナ調整の床材以外にも、台ガンナで平滑にした床材が使用されている。台ガンナ普及は近世以降であるから、こちらは元禄8（1695）年の改築にともなう床板であろう。一方、前掲のチョウナ調整の床材は、台ガンナの普及以前、中世の所産と考えられる（注8）。社殿造営の鎌倉期を上限、台ガンナ普及以前の織豊期を下限とする年代を想定しておきたい。いずれにしても、前掲の信長朱印状に登場する樽を彷彿とさせる貴重な資料である。

第2節 樽について② ～棟札に登場する樽～

史料を調べる中で、美濃加茂市内の2カ所の神社の棟札に「樽」が登場することを知った。以下に紹介する。廿屋白山神社は、関・加治田から神淵に向かう街道付近に所在する（注9、写真9、地図Bルート④）。社殿葺き替えにともなう弘治3（1557）年棟札

には、樽32をはじめ各種用材の数量が記載されている（注10、写真10）。願文中の「大小檀越」とは、領主の佐藤紀伊守忠能（大檀越、加治田城主）と、地侍の池庭彦兵衛ら（小檀越、名主層）をさすと考えられる（注11）。紀伊守は、弘治2（1556）年、斎藤道三と息子義龍の戦いで義龍に加勢し、義龍より知行を宛がわれた。紀伊守の所領は、加治田を中心に現在の富加町・美濃加茂市、および飛騨川に面した金山と下麻生、飛騨川支流の菅田と神淵に広がる（注12）。金山・下麻生は川湊であり、菅田・神淵は飛騨川から長良川水系に抜ける街道の要衝にある（写真11・12）。金山・下麻生・菅田・神淵を加治田と結べば、山あいの商業地と城下町加治田をつなぐ流送・陸送ネットワークが完成する（地図A・Bルート）。飛騨川流域の差配を任された紀伊守は、ネットワーク整備を急いだのではないだろうか。前述の廿屋白山神社棟札や、菅田須波神社の紀伊守奉納棟札は、その間の事情を物語る史料といえよう（注13、写真12）。

加治田の南方、関から飛騨への道中に位置する下蜂屋の天神神社には、天正15（1587）年の棟札が残る。願文には、可児郡金山の森家家老細野右近介が、樽木315を寄進したとの記載がある（注14、写真13）。本能寺の変後、東濃・中濃は森長可の統治下に置かれたが、長谷川家の関町支配は存続した（注15）。秀吉は、建築や造船のため、飛騨川の木材生産を重視したと言われる（注16）。315もの樽板寄進が物語る通り、長谷川家の差配の下、樽生産はいよいよ盛んとなったにちがいない。「樽」「樽木」の文字が墨書された弘治3年、天正15年のふたつの棟札。「樽之座」が登場する永禄10年信長朱印状。この三者（1557・1567・1587）をつなぐと、16世紀後半の木材活用の様相がおぼろげながら浮かびあがる。

第3節 鉄製工具について① ～生産と調達～

信長は、なぜ、樽之座の特権を関の商人に任せたのか。その背景を考えたい。

鍛冶町として知られた関は、室町期に刀剣生産のピークを迎えた。古田憲司氏は、①背景に日明貿易があったこと、②商工業者の自治都市であったこと、③鍛冶町である以前に番匠（大工）の町であったことを、種々の文献史料を駆使して明らかにした（注17）。

同時に、考古学分野でも、製鉄工房の古町遺跡（関市平和通）や、鍛冶屋敷跡の重竹遺跡（関市下有知）の調査の結果、素材の搬入・加工や在郷鍛冶の実態が、明らかになった（注18、写真14・15）。重竹遺跡では、土塁と堀で区画された室町～近世初期の鍛冶屋敷跡が見つかり、建物内から火床・焼土・木炭・鉄滓・羽口・砥石等が検出された。出土遺物には、14～17世紀初の陶磁器、短刀・小柄・鋸・切羽・鉄鍬・槍金具・筭・火打金・鎌・鋏・釘・鏝・留め金具・鉄輪・毛抜き・鉄錘等の鉄製品が含まれていた（注19）。山樵・大工道具は出土していないが、他の鉄製品同様に、重竹の鍛冶屋敷のような在郷の工房で制作されたと考えるのが自然である。

15世紀以降、関の鍛冶集団は各地に拡散する。興味深いことに、関を離れても「関鍛冶」を名乗っている。隣接する加茂郡では「蜂屋関」（美濃加茂市蜂屋）、「小山関」（美濃加茂市小山）、「酒倉関」（坂祝町酒倉）が知られている（注20）。これに加え、富加町加治田も、鍛冶集団の集住にちなむ地名と考えられる。加茂郡の4カ所の鍛冶場のうち、小山は飛騨川、酒倉は木曾川に面し、前掲の重竹遺跡も長良川沿いにある。いずれも、川湊を意識した立地を選んだのであろう。これに対し加治田と蜂屋は、大河川沿いから離れて位置するが、街道沿いの商業地・武家地として栄えた場所である。以上のことから

ら、関鍛冶の加茂郡方面への拡大の背景には、岐阜・関と飛騨川流域を結ぶ運材・製材の発展や、関の商工業者の勢力拡大があったと考えたい。信長が、樽之座の差配、加茂郡迫間の土地開発を任せたのも、関町の持つ鉄製農工具の供給力を評価したからであろう。

第4節 鉄製工具について② ～工具類に関する推察～

中世の工具類に関しては、出土品・伝世品ともに資料に恵まれていない。ただし、前掲の祖師野八幡宮床材の観察からは、大鋸引きではなく、クサビとゲンノウを用いた打ち割り技法で丸太を板状に割り、表面をチョウナで整えた様子がうかがえた（注21）。

チョウナ以外の工具としてはヤリガンナに注目したい。台ガンナ普及以前、材の整形にはチョウナとヤリガンナが使用された。関市内では、日龍峯寺多宝塔（鎌倉期）の塔内円柱に、長軸に沿って縦に走るヤリガンナ痕がはっきりと残されている（注22、写真16）。中濃地域のヤリガンナ出土事例としては、美濃加茂市蜂屋の尾崎遺跡出土品が挙げられる。出土状況から8世紀後半～11世紀頃の遺物と推定されている（注23）。古墳出土の小型品とは異なり刃部が大きく、絵巻物に登場するものに類似しており、日龍峯寺の柱加工に使われたヤリガンナもこれに近いと考えられる。

ヤリガンナから台ガンナへの移行期に関しては、建築遺構や絵巻物の調査から、近世初頭を想定するのが一般的である。その関連資料として、前掲の祖師野八幡宮保管の元和3（1617）年棟札の加工痕のあり方が、非常に興味深いので紹介しておく。願文が書かれた棟札表面には、台ガンナで平滑に仕上げた痕跡が残る。これに対し、裏面にはチョウナによる荒い整形痕のみが残されていて、台ガンナ調整は省略されていた。紀年銘もあり、移行期の木材加工の実態を知り得る稀有な資料である（注24、写真17・18）。

チョウナ・ヤリガンナの使用例にも触れておく。調査の過程で、加治田にチョウナやヤリガンナを使用する佐藤正裕氏の家具工房があることを知った。また、部活動の過去の記録から、飛騨市の大工、荒木昌平氏の工房訪問時（2018）の写真・動画を見出した。現在の職人仕事では、材を平滑に仕上げるという本来の目的ではなく、表面に飾り模様を付ける目的で使用されているが、加工の過程、特に手さばきや刃先の動きと加工痕、材の仕上がりとの関連性を知る上で、様々なヒントを得た（注25、写真1・2・19・20）。建築遺構や出土品に関する実験考古学的検証は、今後の課題のひとつとしたい。

第5節 近世の事例からの類推

本流木曾川の運材は応永年間（15世紀初前後）、支流飛騨川のそれは享禄元（1528）年にさかのぼるといふ。木曾川では幕府が、飛騨川では在地領主の三木氏が、それぞれ関わったとされる（注26）。本節では、乏しい中世史料を補完するため、近世史料、聞き取りや踏査の知見を交え、以下、中世の運材の様子を想像したい（注27）。

南飛騨や郡上の山々から切り出された丸太は、谷筋から本流に送られた。丸太は、せまい急流をくぐり抜けるため、「一本流し」で流送された。飛騨川と馬瀬川の合流点付近にあった金山湊はその一大拠点であった（写真21）。急流を通過し、川幅が広く流れがゆるやかになる下麻生湊に集められた丸太は、筏に組まれ、各地の湊で船頭を換えつつ伊勢湾方面まで運ばれた（写真22）。①濃尾平野各地の商業地の発展、②流通経路の整備、③各種技術の水準、④地理的な条件、以上①～④の観点から考え、前述の近世運材の光景は、すでに、戦国・織豊期に現れていても何ら不思議ではないと判断する。陸送についても、近世の事例を参考に言及したい。金山・下麻生・太田等で陸揚げされた丸太は、木挽

きされたのち、陸路、上有知や岐阜に運ばれた。前述の通り、金山からは放生峠を越え上之保にいたる道と、金山から袋坂峠・北条峠を越え中之保にいたる道のふたつがある（地図Cルート）。峠に車道が開通するのは明治以降であり、それ以前は、牛馬（荷駄）もしくは人（歩荷）が荷を背負って運んだ。津保川では、木材の流送や鶴飼も行われているので、板材の流送も行われたはずである（写真23）。なお、津保川流域のCルート開通時期は、斎藤新五が津保を知行地としたのちとするのが妥当であろう（注28）。

下之保まで陸送された板材の一部は、さらに西に向かい上有知まで運ばれた。見坂峠を越え、口野々を経て上有知にいたる地図Dルートである（注29）。『飛州志』によれば、関ヶ原の戦い以前、上有知の佐藤氏が飛騨川流域の流通を掌握していたという。津保川流域を支配していた加治田の斎藤氏が衰亡したのちは、佐藤氏が津保川を統治し、同時に飛騨川からの流通ルートも掌握したと考えられる（注30）。この間の事情は、当地に残る諸文献や棟札の内容とも整合的である（注31）。このほかの陸路として、前述の通り、神淵から伊深・加治田に抜けるルート（地図Bルート④⑤）、下麻生から伊深に抜けるルートがある（地図Aルート②③）。下麻生・神淵・伊深はいずれも紀伊守の所領であるから、A・BルートはCルートに先行し整備されていたと考えべきである。

A～Dのルート以外にも、ルート間を結ぶ峠道が多数存在する。陸送が盛んになり、流通経路が多様化・複雑化すれば、当然、新規参入者も増加したはずである。利害衝突が頻繁に起きるのは必然であり、その間の事情や公権力介入による事態収拾の過程は、樂市制札の条文からも読みとれよう（注32）樽に関しても例外であるはずがなく、長谷川三郎兵衛宛朱印状発給の背景には、複雑な既得権益を一元化することにより、岐阜城下町の整備を迅速かつ円滑に進めようとした織田政権の意図があったと考えられる。以上に見た通り、飛騨川流域の製材・運材の支配権は、加治田佐藤氏（弘治2～永禄8年、A・Bルート整備）、加治田斎藤氏（永禄8～天正10年、Cルート整備）、上有知佐藤氏（天正10～慶長5年、Dルート整備）の順に引き継がれ、さらに金森氏（慶長5～16年、B・Cルート一部封鎖？）を経て、長期に渡る尾張藩政期を迎えることになる。

まとめにかえて ～「どうじゃこう」と「田の神祭り」～

長谷川家は、江戸期を迎えたのちも、尾張藩に下麻生湊の差配を任されていた（注33）。制限を受けつつも、特権の一部を認められていたようである。『関市史』によれば、長谷川家の歴代当主は、関町の総鎮守春日神社で演じられる神事芸能「どうじゃこう」の主役を、現在にいたるまで務めているとある（注34）。この芸能について調べたところ、その内容が、運材・製材の問題と深く関わりそうなので、次の研究に繋げるためにとりあげておく（以下、神事芸能の内容については注35の文献より引用）。

「どうじゃこう」の起源については、天文6（1537）年以前にさかのぼることが判明している（拍子木墨書の紀年銘）。演目は、「四方浄め」「薙刀振り」「棒振り」「宝獅子」「箕獅子」「どうじゃこう」「豊年踊り」の7番で構成されている。1から5番は魔除けや除災のための呪術的要素が強く、7番は田楽や田遊びの系譜をひく。5・7の境の6番には、芸能全体をさす呼称ともなった「どうじゃこう」と呼ばれるからくり芸が挟み込まれる。名称は、祭りの執行者が、演目中に「どうじゃこうなりけり、じざいなりけり」と囃すことに由来する。この文言を「童子夜行なりけり、自在なりけり」と解し、「夜、童子が深山に火を放ち、魔物を退治し太平を導く」との意味に解釈する見解がある。

実際、猿面童形の木偶2体と小松明を載せた「お船」（木箱）を縄で操り、大松明に点火するという仕掛け（お船渡し）がこの芸能の見せ場であり（写真24）、関以外では、静岡県浜松市水窪町（西浦の田楽）、長野県下伊那郡阿南町新野（雪祭り）にのみ残る。水窪は、天竜川支流水窪川沿いの山あい、阿南は天竜川右岸の南信・三河境に広がる高原地帯に所在する。いずれも運材・製材に深い関わりを持つ。水窪や新野の場合、2体の木偶はそれぞれ「観音と船頭」「恵比寿と大黒」をあらわす。海上の補陀落浄土に降臨する観音、漁業・航海の神恵比寿は、ともに、船や船頭と同様、舟運や運材を連想させる。関の「お船」の側面には、波のうねりが表現されているので、水窪・阿南同様、水運と関わるとみてよい（写真25）。童形の木偶に関しては、日月とともに船に同乗することから、護法童子に擬する見解があるが、姿かたちや囃し言葉から考え、穏当であろう。

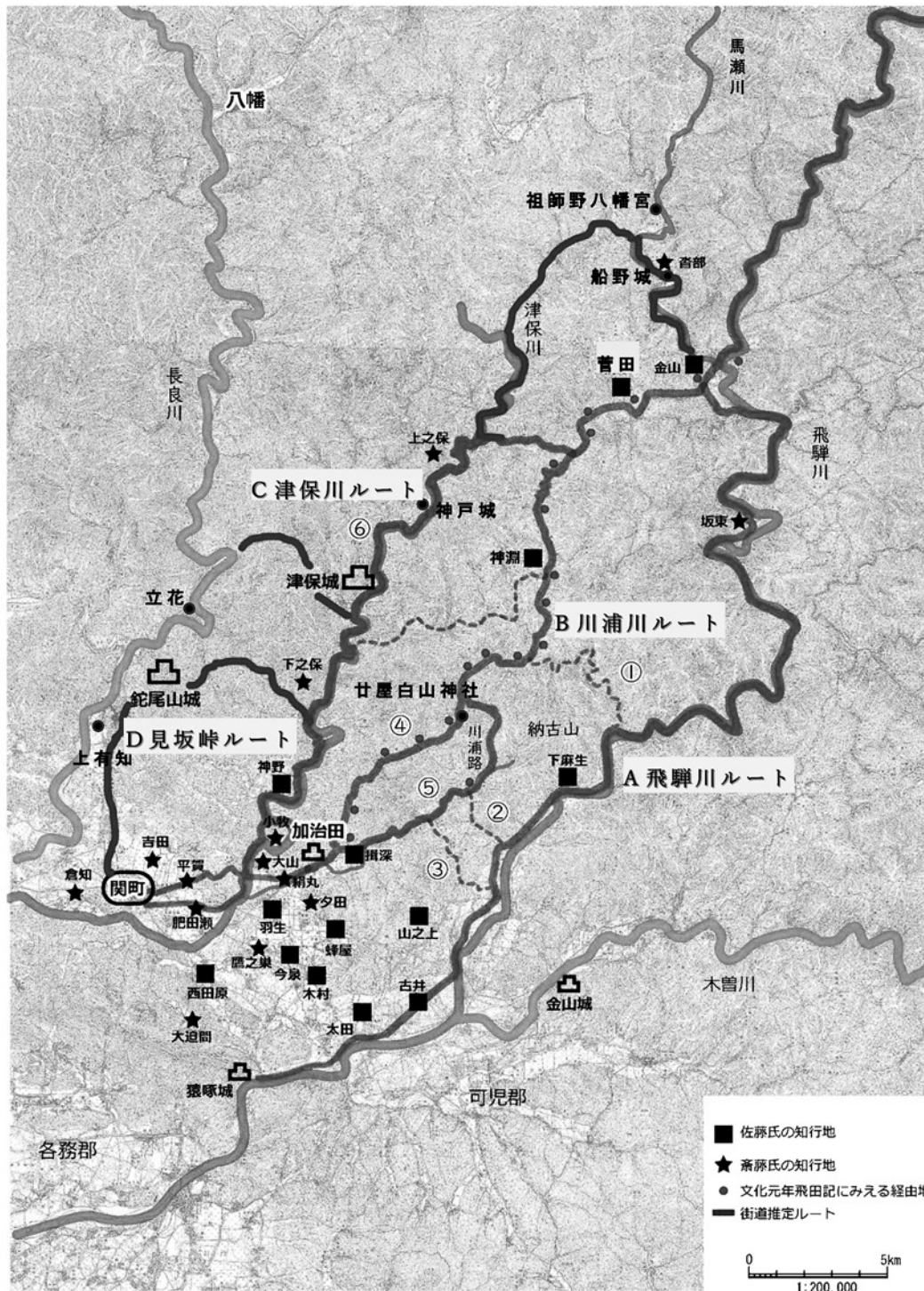
船に乗り込み山の魔物を退治する護法童子の勇ましい姿と、山林資源の利権に食い込む関の商工業者のたくましい活躍ぶりは、我々には、まるで二重写しのように見えるのだが、いかがであろうか。「自在なりけり」の自在とは、本来、「意のまま」を意味する仏教用語であり、自在人、観自在菩薩、自在天など、初期漢訳經典にたびたび登場する。護法童子や自在天はインド在来の神に由来する仏法の守護神で、密教の普及とともに日本でも広まった。狭義には、修験者の使役する神霊をさす場合もあるという（注36）。

神仏分離令（1868）まで、春日神社別当の大雄寺は、関町の新長谷寺の末寺であった。十一面観音を本尊とする新長谷寺は、元来、天台真言2宗を兼ねる特異な寺院である（注37）。自在の掛け声、観音や護法童子の登場、闇と炎の演出など（本来夜に上演）、「どうじゃこう」に潜む濃厚な密教色は、新長谷寺に由来するのだろう。さらに想像をたくましくすれば、天竜川流域と関市にのみ残存する「船渡し」のつながりに関しても、山中を縦横に移動する修験者の介在を想定できよう（注39）。神仏の加護の下、時流に乗った商工業者たちが「自在」を謳歌する神事芸能が「どうじゃこう」だったのではないか。

「どうじゃこう」に付随し、富加町加治田の「田の神祭り」にも言及しておく。演目構成は「どうじゃこう」に近似し、元々その中に「お船渡し」が含まれていたとされる（注38）。弘治2（1556）年創建の龍福寺勸請開山の蘭畹玄秀が「龍福寺十境」のひとつに選んだ「村田楽」とは、この「田の神祭り」をさす。関に同じく密教との関わりも深い（注40）。加治田は宿場町・城下町であり、刀匠が在住する鍛冶町でもある。関の「どうじゃこう」、加治田の「田の神祭り」、そして長谷川家をはじめとする関の商工業者の間に、強い結びつきがあったと考えた方が自然であろう。長谷川家と並ぶ関の有力商人羽瀨意休は、加治田城主佐藤紀伊守と姻戚関係にあり、早々に、信長に内応していたと言う（注41）。政治・経済双方において、関と加治田は極めて近い存在だったのである。

以上、信長の岐阜町整備は、飛騨川流域の木材資源、関の商工業者の技術力があってこそ達成されたのであり、信長自身も、関町の自治権を損ねることはなかったという（注42）。そのような商工業者の連帯維持のために必要だったのが、まさに神事芸能であった。春日神社では、「どうじゃこう」に加え、刀匠による神事能が幕末まで行われていた。今後は、関とその周辺の中世的要素を残す芸能を調査し、地域の中世史を再検討したい。

「どうじゃこう」は毎年4月、「田の神祭り」は5年に1度の4月、それぞれ執り行われている。来年はその5年に1度の年である。古い芸能が今も伝わる幸運に感謝しつつ、まずは両神事芸能の参観、記録、聞き取りの準備を進める予定である。



【加治田領を中心とした関連地図】 関・加治田方面から飛騨川流域に向かう陸路及び水系を明示。『関高等学校地域研究部研究報告 第9号』掲載の島田論文より引用・加筆。①A・B（弘治3年～）、②C（永禄8年～）、③D（天正10年～）の順にルートが整備されたと考えられる（本文参照）。



写真1 樽板（屋根板）の製作

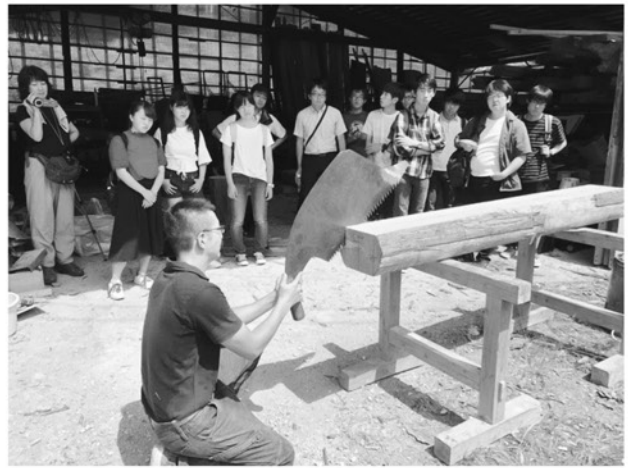


写真2 大鋸（近世以降に普及）の実演
※ともに荒木昌平氏の工房（飛騨市）



写真3 樽板製のひさし（上面）



写真4 樽板製のひさし（下面）
※ともに、加茂郡七宗町神淵の民家



写真5 馬瀬川(左)・飛騨川(右)合流点



写真6 板材調査の様子
写真6～8は祖師野八幡宮で撮影（下呂市）



写真7 チョウナ痕の様子



写真8 チョウナ痕の様子 (拡大)



チョウナ使用の復元図

※「春日権験記絵巻」を参照に作図 (作成: 杉浦ひのか)



写真9 廿屋白山神社 (美濃加茂市)



写真10 廿屋白山神社棟札 (部分)
「津々野 (廿屋)」、「弘治」の文字が確認できる
美濃加茂市民ミュージアム寄託



写真 11 下麻生湊（加茂郡川辺町）



写真 12 菅田須波神社（下呂市）



写真 13 下蜂屋天神神社（美濃加茂市）



写真 14 古町遺跡出土の砥石
関市文化財保護センター蔵



写真 15 古町遺跡出土鉄滓
総出土量は160キロに達する
関市文化財保護センター蔵



写真 16 円柱に残るヤリガンナ痕
日龍峯寺多宝塔内部（関市下之保）

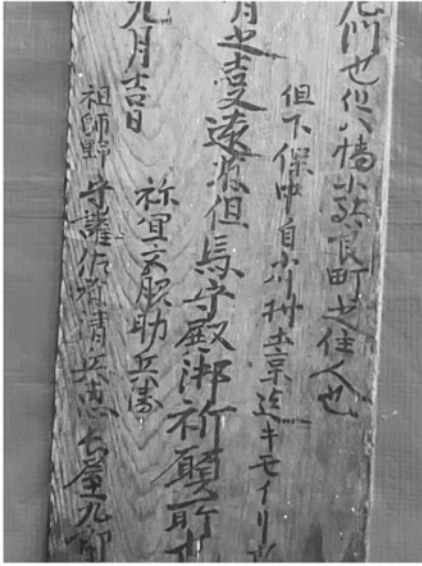


写真 17 祖師野八幡宮元和三三年棟札
台ガンナで仕上げた表面



写真 18 祖師野八幡宮元和三三年棟札
チョウナ痕の残る裏面



写真 19 チョウナの使用例



写真 20 ヤリガンナの使用例
※右は荒木昌平氏、左は佐藤正裕氏の実演



写真 21 飛騨川（加茂郡七宗町付近）
幅の狭い急流が続く（現在はダムあり）



写真 22 復元された筏
美濃加茂市市民ミュージアム蔵



写真 23 津保川の貯木場付近
関市大洞の小字名：定木場



写真 24 「どうじゃこう」
「お船渡り」のからくりの実演



写真 25 「どうじゃこう」の「お船」(木箱)

「どうじゃこう」の「お船」の拡大写真。春日神社の祭礼では「木箱」と呼ぶ。木箱の中には、猿面・童形の木偶2体、小松明が乗る。索縄からくりで大松明に近づけ着火させる。木箱の側面に描かれた「波のうねり」から、木箱が船であることがわかる。

【注釈・引用文献】

(注 1) 「長谷川三郎兵衛宛織田信長朱印状 (永禄十年十二月)」、『関市史史料編 古代・中世・近世』(関市教育委員会 1995) ほか

(注 2) 『美濃加茂市史通史編』(美濃加茂市教育委員会 1980) ほか

(注 3) 『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』(関市教育委員会 1996)

(注 4) 「長谷川五郎兵衛尉宛太田一吉・一柳可遊連署書状 (天正十八年九月)」、「長谷川道知宛織田信忠判物 (天正六年三月)」、「長谷川道知宛織田信孝判物 (天正十年)」、『関市史史料編 古代・中世・近世』(関市教育委員会 1995) ほか

(注 5) 『金山町誌』(金山町教育委員会 1975)

(注 6) 田口方一『東総社 祖師野八幡宮略記』(2000)

(注 7) [#]春日権現験記絵巻 (模本) [文化遺産オンライン \(nii.ac.jp\)](http://www.nii.ac.jp) を参照。植村昌子氏 (竹中大工道具館) のご教示。

(注 8) 村上由美子氏 (京都大学総合博物館) のご教示。

(注 9) 前掲『美濃加茂市史通史編』(1980)

(注 10) 「廿屋白山神社棟札 (弘治三年三月)」、『美濃加茂市史史料編』(美濃加茂市教育委員会 1977) ほか

(注 11) 地侍・有力農民層が願主となり、領主・領民の繁栄 (五穀豊穰・武運長久等) を願う棟札願文の内容は、後述する「祖師野八幡宮棟札 (元亀元年)」(下呂市) や「大野神社棟札 (天正八年)」(関市)、「祖師野八幡宮棟札 (元和三年)」(下呂市) にも共通する。祭礼を通じて結束を強めていった村落のあり方や、地侍 (侍身分を獲得した有力農民層) と国衆 (大名の上級家臣、地方領主) の主従関係を考える上で、見逃せない史料である。

(注 12) 「桑原右近衛門尉 (佐藤忠能) 宛齋藤范可 (義龍) 知行宛行状 (弘治二年十二月)」や「かち田年貢銭目録」に、下麻生、金山、桐原 (菅田)、神湊の地名が登場する。『富加町史 史料編』(富加町教育委員会 1980) ほか。なお、この知行宛行状に関しては、弘治元年に発給されていたと考える見解もある (木下聡『齋藤四代』2020)。

(注 13) 前掲『金山町誌』に記載がある。棟札の翻刻は明らかにされていない。

(注 14) 前掲『美濃加茂市史通史編』や神社案内板に記載がある。棟札の翻刻は明らかにされていない。

(注 15) 前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

(注 16) 前掲『美濃加茂市史通史編』ほか

(注 17) 前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

(注 18) 古町遺跡に関しては、『関市遺跡発掘情報』(関市文化財保護センター2019)、「古町遺跡現地説明会資料」(関市文化財保護センター 2018) を参照。重竹遺跡に関しては、『重竹遺跡 I』(関市教育委員会 1979) に詳しい。

(注 19) 上記 (注 17) のほか、『関市史考古・文化財編』(関市教育委員会 1994) を参照。

(注 20) 重竹遺跡の付近に「兼定」という小字名が残されていることから、前掲『関市史通史編』では「和泉守兼定」の屋敷に擬する見解が紹介されている。重竹遺跡で明らかになった在郷鍛冶の実態は、加茂郡内の関鍛冶集団のあり方を考える上で示唆的である。なお、加茂郡の関鍛冶の所在地に関しては明らかにされていないが、本校社会研究部 (地域研究部の前身) が、蜂屋地内で鉄滓や砥石を採集したとの記録が残されている (神保朔郎『蜂屋の歴史』1978)。

(注 21) 金出ミチル「重要文化財吉川八幡宮本殿に見られる打ち割りによる製材技法について」『建築史学第 32 号』(1999)、安森弘昌「へぎ板にみる木質と木工技術の関係性」『神戸芸術工科大学紀要 芸術 工学』(2019) ほかを参照。

(注 22) 日龍峯寺多宝塔で目視により確認。

(注 23) 『尾崎遺跡発掘調査報告書』(美濃加茂市教育委員会 2002)

(注 24) 2024 年 5 月 11 日、祖師野八幡宮の許可を得て調査を行った際に確認した。なお、古建築に詳しい大工の荒木昌平氏(樹杜屋あらべえ代表)によれば、棟札裏面に残るチョウナ痕には、江戸初期・中期の手仕事の特徴が残されているとのことである。

(注 25) 前掲の荒木昌平氏、半布里工房代表の佐藤正裕氏のご協力による。

(注 26) 長谷川忠崇『飛州志』(延享年間)に記載が見られる。前掲『金山町誌』、前掲『美濃加茂市史通史編』、『七宗町史通史編』(七宗町教育委員会 1995) ほか。

(注 27) 運材に関しては、前掲『金山町誌』、『美濃加茂市史通史編』、『七宗町史通史編』、および『川辺町史通史編』(川辺町教育委員会 1996) を参照にした。

(注 28) 材木の陸送に関しては、(注 26) の自治体史に加え、『富之保村誌』(富之保村 1925)、『上之保村誌』(上之保村 1938) などの戦前の記録、平成初年の聞き書きをまとめた『武儀の語り草 第 4 集』1992 が参考となる。佐藤忠能に代わって加治田領を治めた斎藤新五に関しては、「斎藤新五宛織田信長知行宛行状(永禄八年十一月)」(前掲『富加町史史料編』ほか)によりその様相が捉えられる。忠能の時代にはなかった津保川流域や平賀・肥田瀬・吉田・倉知など、飛驒川流域と関町を結ぶルート上に新知行が与えられているがわかる。

(注 29) 前掲『金山町誌』、および『美濃市史 通史編』(美濃市教育委員会 1979) ほか。佐藤氏改易後(1615)、上有知と飛驒川流域の流通経路を支配した金森氏が、間見峠(神渚・三和間)と氷坂(下之保・関町間)を封鎖し、関町に商品が流れ込まないようにした逸話は有名である(『上有知旧事記』、『美濃市史 史料編』(美濃市教育委員会 1979) 所収)。

(注 30) 前掲(注 26) の文献を参照。

(注 31) 「佐藤金森由緒書」(前掲『美濃市史 史料編』1979)によれば、佐藤氏の支配領域は小野・西神野・志津野、すなわち津保川流域にまで及んでいたという。志津野の吉祥寺(臨濟宗)には佐藤氏の位牌も保管されているので、津保川右岸の一部に佐藤氏の支配が及んでいたのは確実であろう。さらにその対岸(津保川左岸)の集落、上大野に所在する大野神社は、近隣の集落(小野・西神野・神野・大野・志津野)のみならず、上有知の鎮守も兼ねていた。このことから佐藤氏の津保川流域への影響力浸透が読みとれよう。

(注 32) たとえば、「市平賀制札写(永禄十一年)」(前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』)には、他所から移ってきた者は反対や苦情を申し出ないこと、債務者に対する不法な取り立てや差し押さえを認めないこと、違反者は速やかに処罰することなどが、明記されている。以上の条文からは、商業発展にともなうトラブルの増発や公権力の関与がうかがえよう。このような、中世後期の市場と領主権力との関わりについては、すでに『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』(1979)や『岐阜県の歴史』(2012)などで言及されている通り、様々な議論が重ねられているが、実態には不明な点が多い。とはいえ、岐阜町に 3 カ所(美園・岩倉・中河原)、上有知領に 2 カ所(古市場)、加治田領に 2 カ所(津保・市平賀)、樂市の所在が確認されているし(『関高等学校地域研究部研究報告 第 9 号』2024)、樂市とは断定できないが、加治田領内に位置する商業地の中では、金山の飛驒街道沿いに上市場・下市場・万場の地名が(前掲『金山町誌』)、神渚の飛驒街道沿いに万場・下市場

の地名が（前掲『七宗町史通史編』）、富加町高畑地内には市場裏の地名が（前掲『加治田町史通史編』）、それぞれ残されている。いずれも街道や河川に近い交通の要衝であり、古寺社の近くに位置する。流通経路の問題とあわせて今後の課題としたい。

（注 33）前掲『川辺町史通史編』

（注 34）『関市史民俗編』（関市教育委員会 1996）の記載。「どうじゃこう」成立時（16世紀初頭前後か）より、長谷川家が主役として仕切っていたかどうかは不明であるが、戦国期には樽之座座方・関町代官であり、江戸期にも関町庄屋を務めていたことを考えると、全時期を通じて、深いかわりがあったと考えるべきであろう。

（注 35）「どうじゃこう」に関しては、前掲『関市史民俗編』に加え、清水昭男「関祭り頭屋祭りと「童子やこう」芸」『岐阜県の祭りから』（1996）、西岡陽子「美濃における三信遠系の田遊び「どうじゃこう」を中心に」『民俗芸能研究第 53 号』（2012）に詳しい。

（注 36）佐和隆研、高井隆秀著、田村隆照編『密教事典』（1975）

（注 37）前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

（注 38）前掲清水論文「関祭り頭屋祭りと「童子やこう」芸」『岐阜県の祭りから』

（注 39）天竜川流域と関市にのみ残る「お船渡し」に関しては、前者から後者への伝播を想定する見解が強いようである（たとえば前掲清水論文）。ただ、両者のつながりを示す歴史的資料の存在は確認されていない。我々の推論通り、「お船渡し」の成立に密教が深く関わるのであれば、修験者こそ、情報・文化の伝達者としてふさわしいと考える。時代こそ違いますが、同じ中濃地域の那比新宮神社所蔵の大般若経奥書（1333）には、楠木正成の築城、護良親王に関する伝聞が書き留められている（『岐阜県の歴史散歩』2006）。峠道・尾根道を自在に移動する修験者の活動は、林産業とも親和性が高いと思う。修験道、神事芸能、林産業の関りについては、今後の課題としたい。

（注 40）前掲『富加町史通史編』に記載。加治田に所在する白華山清水寺は、江戸中期に臨済宗妙心寺派に改宗する前まで真言宗に属していた。本尊十一面観音像は平安中期作の坐像であり、関市の新長谷寺に同じく、修験道及び観音霊場の道場としての性格を有する。

（注 41）前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

（注 42）同上

【お世話になった方々】

島田崇正氏・山内正明氏（富加町教育委員会） 森島一貴氏（関市文化課）
植村昌子氏（竹中大工道具館） 村上由美子氏（京都大学総合博物館）
北村隆幸氏（NPO 法人ふうめらん） 館弘士氏（岐山高等学校）
富加町教育委員会 半布里文化遺産活用協議会 関市文化財保護センター
美濃加茂市民ミュージアム 天正寺 龍福寺 祖師野八幡宮 郡上高等学校
株式会社パレオ・ラボ SeaLandSky EARTHSHIP 半布里工房 樹杜屋あらべえ



タイトル：本校が所蔵する明治時代の西洋画の作者について

学校名：京都府立鴨沂高等学校

研究グループ名：京都府立鴨沂高等学校京都文化コース2年生

氏名：石川健志朗 岩崎紗良 上田彩夏 大橋雫

小田原チヨ 酒井謙 竹内景翔 田中咲

中村明莉 樋口仁子 牧原 佳乃子



はじめに

京都府立鴨沂高等学校は、1872（明治5）年に創設された新英学校（女紅場を併設）を起源としており、今年152年目を迎える。新英学校時代は男子も在籍していたが、2年後には女子のみを受け入れることとなり、その後京都府女学校、京都府高等女学校、京都府立第一高等女学校などとして女子の高等教育にあたっていた。戦後の学制改革により、男女共学の新制高等学校として1948（昭和23）年以降は「京都府立鴨沂高等学校」を名乗り、現在に至っている。長期間にわたる学校活動のなかでさまざまな史資料が集められ、それらが貴重なものであることは、これまでも考察・分析されている【1】。そのうち絵画作品は、上村松園や鹿子木孟郎、太田喜二郎など美術史を彩る人物の作品を所蔵していることでも注目されてきた。1980（昭和55）年に本校が作成した『所蔵美術図録』（以下『図録』）は、これらの絵画に関わる基礎的な知識・情報の集大成である【2】。

このレポートは、本校所蔵絵画の作者を考察し、『図録』では「アーネスト＝ウェットン夫人」（エリザベス＝ウェットン）作とされている絵画のうち、（少なくとも）4作品の作者は別人である、という仮説を提示し、その論証への道筋を示すことを目的とする。真の作者と考えられる人物「白川幸（しらかわさち）」については、知られることは限られており、特に画壇（美術史）での認知度はゼロと言ってもよい。この人物の事績や来歴が明らかとなることによって、明治時代前半における美術史及び女性史上の知見が広がることも期待できる。

1）問題の所在

はじめに、このレポートで取り上げようとする一連の絵画作品について整理しておきたい。

表1は、1879（明治12）年11月2日・3日に、京都東山の「双林寺文阿弥」で開催された「油画展観」の出品目録である。そのうち、本校の前身である「女学校」を出品人とするものと、「ウェットン」を筆者とするものあわせて8点のリストである。

【3】

表2は、2024年現在、本校メディアルーム（図書館）閲覧室などに展示されている絵画そのものを確認し、『図録』記載の制作年代および作者名を補足したものである。

『図録』にはそれぞれのサイズも記載されており、①は59cm×69cmのヨコ構図、②は168cm×58cmのタテ構図、③～⑧は44cm×50cmのヨコ構図（ただし⑦のみ50cm×44cmのタテ構図）である。〈図1～図8〉

表1と表2を比較した時に、私たちは、明治時代に女学校が出品（所蔵）しているものとよく似た画題（タイトル）の作品が含まれていること、しかし別人が筆者となっていることに疑問を持った。単純に考えれば、これらは同一作品ではないだろうか。筆者が異なるということは、よく似た名前でも別々の絵画作品が存在したことになるが、これは不自然ではないだろうか。

なお、表2のうちの④・⑤・⑥・⑧は、2001（平成13）年9月25日から10月24日までを会期として京都府京都文化博物館が開催した特別展『京都洋画のあけぼの』に出品されている【4】。

2) 仮説の構築

i 「作者」とされたアーネスト＝ウェットン夫人（エリザベス＝ウェットン）とはどのような人物か

まず『図録』の記述で確認する。

アーネスト・ウェットン夫人＝「1872年本校が女紅場として開校された翌年、1873年英人アーネスト・ウェットン夫妻が建築と英学の教師として着任、1877年まで在任していたことまではわかっているが、それ以後のことは不明である。夫妻はともに絵をよくした。明治初期の京都で、西洋遠近法や油絵の技法ができる人がほとんどいない時期、夫妻の存在は実に大きなものだったと思われる。…これらの絵は、当時の絵画そのものとしては勿論であるが、京都の西洋絵画発達の歴史的な意味からも非常に珍しく貴重な作品である…」。

アーネスト・ウェットン＝「1873年女紅場の教師として着任…氏は、また建築技師でもあったので、京都府の建築についても貢献している。また後に京都府画学校でも指導的立場にあった田村宗立も氏に油絵の技法をならったりしている…」。

次に『京都洋画のあけぼの』の図録には以下のように記されている。

「エリザベス・ウェットン 嘉永四年（1851～？） イギリス人アーネスト・ウェットン夫妻は、明治六年に女紅場の英語および建築教師として着任し、明治十年まで在職した。十二年の雙（双）林寺の展覧会に『比叡山夕景』『箱根山中』などを出品している米国（ママ）人ウェットン氏はウェットンであろう。以後は不明。アーネスト・ウェットンは明治八年第四回京都博覧会に油絵三点を出品している。女紅場の後身、京都府立鴨沂高校にはウェットン夫人作と伝える作品が本展出品作を含めて七点、アーネスト・ウェットン作油彩画が一点ある。」この計8点が、表2の①～⑧である。

以上から、夫アーネストと妻エリザベスのウェットン夫妻が、1873（明治6）年から1877（明治10）年まで本校の前身（およびそれに併設された女紅場）の教師であったこと、西洋画（油絵）を描くことができたこと、が読みとれる。このように明治時代には多くの外国人が官公庁に雇用され、日本人に新たな技術や知識を指導・伝授した事実はよく知られており、教科書では「お雇い外国人」と記述されている。研究によると、夫 Ernest Wetton は「建築教師」で明治6年当時28歳、同じく23歳であった妻の Elizabeth Vaughan Wetton の職種の欄には「油絵教師」と記されている。雇期間は明治6年から明治10年まで、夫妻の住所は「京都府下山城国愛宕郡第一区聖護院村一二四一番地」であった【5】。

エリザベスの人物像について、1872年の創設時に8歳で入学した生徒の証言によると、世界の知識や数学などを英語で教えられたこと、「チイサイチイサイ」と愛情込めて呼ばれ我が子のようにかわいがられていたこと、1878（明治11）年11月離任する際には「very very true friend」などと記された愛情に満ちた手紙を受け取ったことなどが挙げられており、エリザベスとの親密な関係性をうかがうことが可能である【6】【7】。エリザベスは、当時の日本では珍しい西洋画を教え、かつ生徒とは相互信頼で結ばれた“名物教師”のような存在であったと考えたい。

ii 2024年現在、これらの絵画はどのような状態にあるか

①『叡山風景』（エリザベス）と②『女紅場之創始』（アーネスト）は、校長室に飾られており、普段は生徒の目に触れることはないが、私たちは総合的な探究の時間は特別に見学させていただいた。そして③～⑧の6点は、本校では「メディアルーム」と呼ぶ図書館の壁面という、私たちの身近に展示されているが、これらの絵画は誰が描いたのか、どの時代の作品なのか答えられる人は少ないだろう。気になったのは、③～⑥には作者名と作品名が記された小さなパネルが付けられているので、それを見ればタイトルと作者だけはわかるが、⑦『滝』と⑧『桂離宮庭』にはそれが付けられていない、つまり「見ただけではどういう絵画なのか全くわからない」ことである（このパネルは図1～8でも確認できる）。

このパネルは、1980（昭和55）年の『図録』作成時か、その前後につくられたものと思われるが、⑦と⑧に付けられていない理由は不明である。③～⑥とは少し違う題材であり、タッチや表現も少し異なるため、同一人物の作品であると判断することがためらわれたのではないかと類推する。

iii 1932（昭和7）年、これらの絵画はどのような状態であったか

新英学校創設から60周年にあたるこの年には、記念式典と関連する行事が大々的に行われた。その様子を記録した冊子【8】には、本校の歴史を顕彰する資料展示の写真が掲載されており（図9）、展示されている⑤・⑥・⑦・⑧とそれぞれの画題を読み取ることができる。⑤には『紫宸殿』、⑥には『小御所』、⑦には“風景画”、⑧には『桂離宮』とある。また「明治十一年（正しくは10年）まで女紅場教師たりしイルネストウエットン夫人の油繪なり」というキャプションも読み取れる。この記録冊子の本文には「…十一（ママ）年十一月まで女紅場の教師であったイルネスト、ウエットン夫人の油繪が目につく。紫宸殿、小御所、桂離宮、風景畫、いづれも立派なもので、本校の寶である…」と記述された部分もある。この時点で、これらの絵画はエリザベス＝ウエットンが描いた貴重な絵画であるという認識が定着していたとわかる。

ただし、区切りの年を祝う記録冊子の性格上、その内容について、それまでの本校の歩みを美化・称賛する意図が強く表れているほか、ウエットン夫妻のことを前任の教員であった「イーバンス夫妻」と誤解している部分もあるため、冷静かつ公正な立場で客観的事実が記されているかどうかは注意が必要であろう。あわせて、⑦が“風景画”となっており、本来の画題が忘れられて（失われて）いたこともわかる。

iv 1879（明治12）年、これらの絵画はどのような状態であったか

表1と表2の作品名を比較すれば、このような対応関係が想起されよう。

A = ⑦ B = ⑥ C = ⑤ D = ⑧ E = 該当なし F = ① G・H = 該当なし

表1は、これらの絵画が制作された段階で作成された出品リストであり、ここに誤解や誤伝が入り込む余地はきわめて小さい。つまり⑤～⑧すなわちA～Dは「白川幸（女）」を「筆者」と考えなければならない。これこそが本レポートで提示したい仮説の要点なのである。

⑤～⑧以外について言及しておく。Fと①との関係は、1935（昭和10）年に「出

品人」の丹羽圭助から京都府立第一高等女学校に直接寄贈された（ために本校に所在している）ことが確実であるため疑いようがない【9】。なお、表1のE・G・Hに該当すると思われる絵画を本校は所蔵していない。ちなみに、Hは日本史の近代文化・洋画の項で必ず取り上げられる高橋由一「鮭」の別バージョンと考えられる。東京芸術大学が所蔵し、現在は重要文化財に指定されている「鮭図」は1877（明治10）～1879（明治12）年の間の制作とされており、Hはその同時期の作品であるが、60周年の記念冊子によると「先年何処かの展覧会へ貸出した俣還って来ないといふことである」とのことで、国民的絵画を本校が持つチャンスがあったことと惜しまれる。また、表2の②・③・④は表1で該当するものが見当たらないため、②はアーネスト、③・④はエリザベスを作者とすることは否定できない。

以上、『御所紫宸殿』『小御所』『滝』『桂離宮庭』の4点の洋画を描いたのは白川幸である、と結論付けたい。

v 本当の「作者」と考えられる白川幸（女）とは、どのような人物か

白川幸【10】<図10>は飛騨国高山（現在の岐阜県高山市）の出身で、生年は1856（安政3）年。実家は願生寺という浄土真宗大谷派の寺院である。住職である父や2人の兄の影響もあって、幼いころから絵画や漢詩文に親しんでいた。10代前半で明治維新の混乱に巻き込まれたこともあって故郷を離れ、大阪・京都でそれらを学ぶかたわら、大阪の集成学校（大阪府立北野高等学校の前身）では英学も学んだようである。画業の師は村田香谷、漢詩文の師は菊地三溪という。

そして1877（明治10）年1月からは京都府女学校（本校の前身）に在籍することとなった。同年11月までエリザベスから直接西洋画を学んだと考えられる。また、翌1878（明治11）年には京都博覧会に出品して「妙技牌銅賞」を受けたことから、その才能が非凡なものであったこともうかがえる。一方、漢詩文の分野では、女学校在籍前の1876（明治9）年には師の菊地三溪による序文がある詩集『琴水小稿』がまとめられた。その漢詩は当時の中国・清を代表する漢詩文学者に高く評価されていたという。「琴水」は彼女の号である。

このように漢詩と洋画に“二刀流”の才を発揮していた彼女は、ほどなく女学校の「助教」「授業補」となった。単に生徒としてではなく、教員としての役割も担っていたのである。その関係もあってか、静御前や山内一豊の妻といった歴史上の女性らの伝記をまとめた『本朝彤史（とうし）列女伝』を在職中に執筆・編集している【11】。「自書画賛」とあるので挿絵も本人が描いた。その序文も菊地三溪が記しているが、注目したいのは当時の京都府知事である榎村正直が題字「貞風凌俗」を寄せていることである。この書が刊行された直後の1880（明治13）年に、明治天皇・皇后・皇太后への献納を、榎村を通じて願い出て認められている<図11>。榎村は、明治維新で衰退した京都を復興させるための新政策を展開したことで知られ、本校の創設にも関わっていた。榎村は彼女の後援者のような役割も果たしていたのではないかと【12】。

このように明治前期の女性として注目すべき経歴を持つ白川幸だが、1879（明治12）年12月女学校を離れ、名古屋の商家（青木氏）に嫁いだ。その後一男一女を儲けたが、夫に先立たれた後、1890（明治23）年に没した。享年35歳という早世である。

本校が所蔵する作品は、彼女の才を現代に伝えるとともに、1877～79年（女学校在籍中）という時期に、日本人女性が制作した西洋画として極めて価値の高いものといえるのではないだろうか。

現在、実家の願生寺には彼女の7～8歳のころの絵画や、すぐれて写実的な父親の肖像画などが残されているという【13】。

3) 仮説の検証

1879年段階で「白川幸」作と認識されていた⑤～⑧は、1932年（までのどこか）の段階で「エリザベス＝ウェットン」作となったのであるが、それが何時かの特定は難しい。2) iiiで記した通り、母校の歴史を華々しく顕彰したいとなった時、母校との関係性も希薄となった50年前の無名の一卒業生（故人）より、創業当時の名物教師で西洋画の名手として認知されていた人物の方がそれらしい…ましてや西洋風の絵画を当時の日本人女性が描けるはずがなかるう…などといった先入観から、この60周年記念式典で“取り違え”が発生したのではないだろうか。A『飛騨高山平湯瀑布』が単に“風景画”と紹介された理由は、画題の場所が飛騨とゆかりのうすい京都の人々にはなじみがなかったことであろう。

平湯瀑布とは、現在は観光地として著名な平湯大滝のことと思われる。そこで、A＝⑦と、インターネットで入手した平湯大滝の画像とを比較してみた<図12>。その類似性は明らかである。白川幸ならこの滝をスケッチしていた可能性は高いが、飛騨へ行ったという明確な史料がないエリザベス自身が、ここまで写実的に描くことは難しいだろう。

とは言え、上記はいずれも状況証拠に過ぎず、⑤～⑧とA～Dとの一致を示す決定的な根拠を見つけるはできなかつた。今後、別の出品目録や本校資料の目録、白川幸またはエリザベス本人が残した記録や証言などの出現（発見）がない限り、この仮説が論証されることは難しいと思われる。わずかな可能性だが、本校が所蔵していないE『飛騨高山鍛冶橋』が地元の飛騨高山あたりに残され、そこに裏書などがあることにも期待したい。少なくとも、京都の歴史的建造物（小御所・紫宸殿・桂離宮）に混在する、飛騨高山周辺の名所が描かれた2作品の存在は、同地出身者の何らかの関与を示唆するものであることは間違いない。

おわりに

このレポートの仮説通りだとすると、白川幸の画力が、約100年にわたって西洋人が描いたと信じられるほどに高いレベルのものであることに驚いた。また、本校所蔵の絵画だけでなく、他の有名な絵画作品にも、もしかしたら知られている作者とは別人が描いたものがあるのかもしれない…と思うと、とても興味深い。そして、歴史的な事実である可能性が高い知識や情報をどのように多くの人に発信していくか、その方法を私たちにこれから考えていきたいと思う。

最後に、本校創設期の校名の変遷と、白川幸・エリザベス＝ウェットンの事跡は、年表にして一覧できるようにまとめておいた<表3>。

註

- 【1】『学校の文化資源の「創造」—京都府立鴨沂高等学校所在資料の発見と活用Ⅰ』（学校資料研究会・京都府立鴨沂高等学校京都文化科2020）、『「学校博物館」を成長させる—京都府立鴨沂高等学校所在資料の発見と活用Ⅱ』（学校資料研究会・京都府立鴨沂高等学校京都文化科2023）
- 【2】『京都府立鴨沂高等学校 所蔵美術図録』（京都府立鴨沂高等学校1980）
- 【3】島田康寛「京都における明治初期の洋画の状況」（『三の丸尚蔵館年報・紀要6』宮内庁三の丸尚蔵館2001）
- 【4】展示図録『京都洋画のあけぼの』（京都府京都文化博物館1999）
- 【5】ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』（小学館1975）
- 【6】重久篤太郎「京都の英学—京都府女紅場・女学校」（『英学史研究1973巻5号』日本英学史学会1972）
- 【7】井下清『橘花の香 母井下要子を憶ふ』（私家版1939）
- 【8】『創立六十周年記念誌』（京都府立京都第一高等女学校春錦会・京都鴨沂会1932）
- 【9】前掲【3】
- 【10】『名古屋市史人物編2』（名古屋市役所1934）。また吉岡勲監修小鳥幸男編著『図説飛驒の歴史』（郷土出版社1987）には、<図10>のように、出典の記載はないが肖像写真が掲載されている。
- 【11】森岡ゆかり「白川琴水『本朝彤史列女伝』についての初歩的考察—願生寺所蔵本を手がかりとして—」（『斐太紀11号平成26年秋季号』飛驒学の会2014）
- 【12】「京都府庁文書」明治13-0023 簿冊名：御巡幸一件 件名番号：102。
- 【13】多賀秋五郎「白川琴水の生涯とその教育思想」（『国士館大学文学部人文学会紀要第18号』1986）



图 2 ↑



图 4 ↑



图 1 ↑



图 3 ↑



图 6 ↑



图 8 ↑



图 5 ↑



图 7 ↑

同 上 時 代 品 一 部



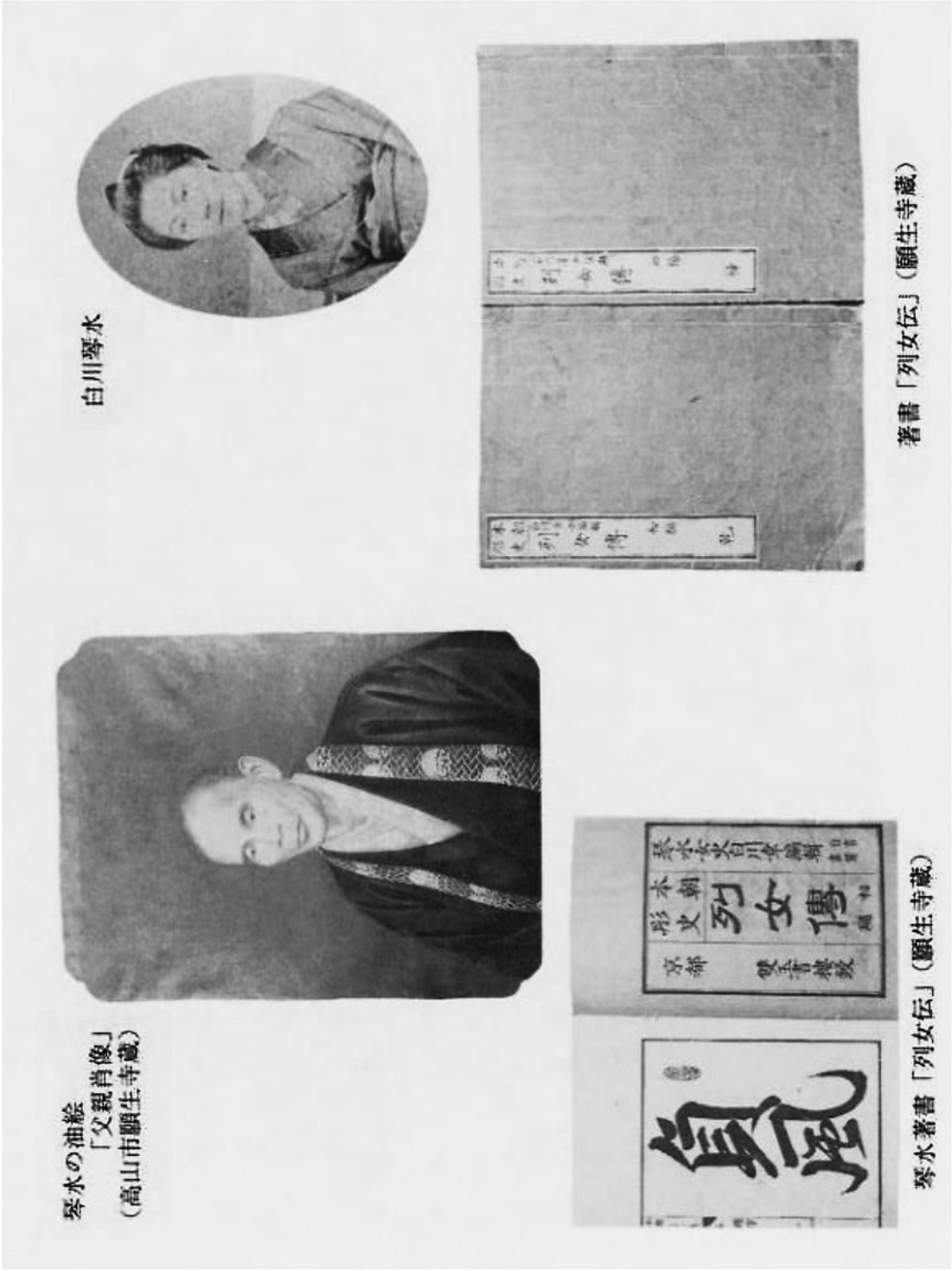


図 10 (『図説飛驒の歴史』 P133・国立国会図書館デジタルコレクションによる)

願書

本朝
形史
列女傳 二卷

右、私儀先斗御下女學校格教員

奉職中條梅仕候者、而今船

御巡幸之時、際之

聖上

皇太后宮

皇后宮、獻本仕度平素之志願、有之

何事者御許可相成候依御取計

此就下意此願奉懇願候也

岐阜縣平民

明治三年

白川幸

京都府知事真村正真 聽

图 12

写真↓



絵画↓



表1	油画図名	筆者	出品人	(出典ページ数)
A	飛騨国平湯瀑布	白川幸女	女学校	(二十六)
B	小御所ノ図	白川幸女	女学校	(二十六)
C	紫宸殿ノ図	同前	同前	(二十六)
D	桂別荘ノ図	同前	同前	(二十六)
E	飛騨高山鍛冶橋	同前	同前	(二十六)
F	比叡山夕景	米国人ウエートン氏	丹羽圭助	(二十六)
G	箱根山中	ウエート(ン)氏	巨勢蔵	(二十六)
H	鯉ノ図	高橋由一	女学校	(三十七)

*島田康寛「京都における明治初期の洋画の状況」による(出典ページ数は『三の丸尚蔵館年報・紀要』中の漢数字ページ)。なお、この資料によると、AとBの間で改ページがあるため、Bには「白川幸女」「女学校」が記載されているが、C以降は「同前」となる。なお、「米国人」は原史料の誤記。

表2	画題(タイトル)	制作年代	作者
①	叡山風景	1873	アーネスト・ウェットン夫人
②	女紅場之創始	1877	アーネスト・ウェットン
③	部屋内の行灯	記載なし	アーネスト・ウェットン夫人
④	御所御殿内部	記載なし	アーネスト・ウェットン夫人
⑤	御所紫宸殿	記載なし	アーネスト・ウェットン夫人
⑥	小御所	記載なし	アーネスト・ウェットン夫人
⑦	滝	記載なし	アーネスト・ウェットン夫人
⑧	桂離宮庭	記載なし	アーネスト・ウェットン夫人

表3

西暦	元号	校名	白川華年表	年号	Elizabeth Youghan Metton年表	年号
1856	安政3		0810誕生	0		6
1857	安政4			1		7
1858	安政5			2		8
1859	安政6			3		9
1860	万延元			4		10
1861	文久元			5		11
1862	文久2			6		12
1863	文久3		7歳・8歳のころの画帳が願生寺に残る(多賀)	7		13
1864	元治元			8		14
1865	慶応元			9		15
1866	慶応2			10		16
1867	慶応3			11		17
1868	明治元			12		18
1869	明治2			13		19
1870	明治3			14		20
1871	明治4			15		21
1872	明治5	新英学校 女紅場	村田香谷に画を学ぶ(『名古屋市史』)	16		22
1873	明治6			17	0710[エルザベツ・ヴォン]ウェットンを雇う(『資料御雇外国人』)	23
1874	明治7	英女学校 女紅場	大阪・集成学校で英学を学ぶ(『名古屋市史』)	18		24
1875	明治8		京都へ出て「蚕桑の間」に菊池三溪に詩を学ぶ(『琴水小稿』序)	19		25
1876	明治9	女学校 女紅場	「…明治九年丙子三月三十又一日讖 于西京祝殿坡橋高 三溪老人 菊池純」(『琴水小稿』序)	20		26
1877	明治10		1-女学校に入りウェットンに従って油画を学習する(『名古屋市史』) 0317准六等助教授	21	1109満期解雇(『資料御雇外国人』) 1109生徒に手紙を書く「Nov. 9 1877 My very dear girls, ... for nearly 4 years, ...」(重久)	27
1878	明治11		6-京都博覧会に油画を出品して、妙技牌銅賞を受ける(『名古屋市史』)	22		28
1879	明治12		4-准一等授業補 1102・1103東山双林寺文阿弥の油画展観に飛騨国平湯瀑布・小御所ノ図・紫宸殿ノ図・桂別荘ノ図・飛騨高山鍛冶橋の5点を出品(島田) 12-職を辞す(『名古屋市史』)	23		29
1880	明治13		『本朝形史列女伝』(奥付に1125出版御届12月刻成発兌) 0716天皇・皇后・皇太后に『本朝形史列女伝』の献納を願い出る(京都府庁文書)	24		30

* 灰色枠は、女学校等に在籍・在職していた期間を示す。



優秀賞

第18回全国高校生歴史フォーラム出品作品

愛媛県立松山北高等学校郷土研究部

「松山市に伝わる小野小町伝承の謎を解く」



小野小町



梅元寺



松山市小野地区

代表者 森川晴仁（2年）

岸本美花（2年）・岡部美紀（3年）

森貞裕太郎（1年）・谷口凱星（1年）・山住悠理（1年）

顧問 桑名 洋一



1 はじめに

私たちは過去三年間にわたって松山市小野谷地区に残る小野小町伝承について調査・研究を進めてきた。小野谷には、平安時代、美人の誉れ高かった女流歌人の小野小町が顔にできた瘡に悩み、摂津大坂の住吉大社に瘡の平癒を祈願したところ、伊予の薬師に祈願すれば治るとの御神託を受け、小野谷にある小野薬師（梅元寺）に来訪し、百日間の祈願をしたところ、薬師如来の靈験によって顔のあざが消え、元の姿に戻ったという伝承がある。この伝承を元に地区名が小野になったとされており、なぜ、この伝承が松山市小野谷地区に伝わっているのかについて解明するため、小野地区の方々の協力を得ながら調査を継続してきた。

2 先行研究の調査

私たちは、小町伝承に関する先行研究の有無から調査を開始した。すると、柳田國男氏が昭和七年（1932）に刊行された著作『女性と民間伝承』の中で和泉式部伝承や小野小町伝承について分析され、全国各地に同様の伝承が伝わっており、伝播者は熊野三山を拠点とする「熊野比丘尼」や「盲目の女旅芸人ごぜ」などの女性巡礼者であると説いていた。また、柳田國男氏は全国に流布する小町伝承の代表例として小野村（1961年松山市に合併）の小町伝承を紹介しており、現在では地元の方々にさえ忘れ去られようとしている小野谷の小町伝承が、戦前は全国区の伝承であったことが分かった。次に、地元伊予に伝わる地誌類を調査した。小野谷の小町伝承についての伊予における最古の記録は、奥平貞虎編纂『予陽郡郷俚諺集』（宝永七年・1710）（資料6）に求められる。当時、松山藩家老であった奥平貞虎（1668～1710）は、松山藩領の各村吏に命じて村々の調査報告をさせ、郡別に各村・旧跡の沿革、石高などについて古文書、詩歌等を交えて由来、伝承を忠実に採録させ提出させたものを書物にまとめる事業を行っており、彼の死後に『予陽郡郷俚諺集』として編纂・刊行されている。彼の生存年からすると、江戸時代の元禄期の頃の松山藩領内の様子をまとめたものであるといえる。ここには、小野小町が伊予の小野谷で生まれたこと、小町が病氣平癒の御礼として自分の形相を写し込めた薬師如来像を彫り梅元寺に奉納したが、今は梅の本（北梅本）の永尾山正観寺に梅元寺の本尊を移し安置している等の里俗（土地）の話（伝承）を採録している。更に、宮脇通赫が明治二十七年（1894）に編纂した『伊予温故録』（資料8）にも当たった。この本には、小町が大坂住吉神のお告げにより伊予に来たこと、小町が梅元寺に病平癒を祈り百日の籠居をしたこと、小町が薬師如来から「春雨の降ると見えしがはれにけりそのみのかさをそこに脱ぎおけ」という和歌を得て顔の瘡が取れ病気が治ったこと、病気が治った後も三年間留まり薬師如来像を彫ったこと、小町が彫った小野薬師から小野・小野川という地名が付いたこと、天和元年（1681）に村民の望みにより今の正観寺の場所に小野薬師を移したこと、梅元寺は小野谷に存在したが明治七年（1874）に廃したことなどの記事が新たに付け加えられている。これらは、先ほどの『予陽郡郷俚諺集』の成立時期である江戸中期から、『伊予温故録』が成立した明治期にかけて伝承に付け加えられた要素であると考えられる。また、小町伝承が小野谷で成立していることからすると、小野谷の小町伝承は小野谷梅元寺から、北梅山正観寺に小野薬師を移した天和元年（1681）以前に成立していたことが読み取れた。

3 なぜ梅元寺に伝承が伝わったのか

私たちは学校での文献調査の後、地元の方々の御協力を得て小野谷の現地調査を実施した。『予陽郡郷俚諺集』・『伊予温故録』に小野薬師を梅元寺から正観寺に移したという記事があったため、まず、天台宗山門派寺院である正観寺を訪問した。ところが、御住職から、地元では古くから小野川上流にある梅元寺という薬師堂が小町伝承の舞台だとされていると御教示を受け、後日、小野谷自治会の宮内裕子様と連絡を取り、梅元寺で地元の方々からお話を頂いた。梅元寺は明治政府の神仏分離令以降、無住の寺となり、小野谷自治会で管理しているということであったが、小町伝承について詳しく知っている人はもういないということであった。梅元寺には寺歴を示す看板があり、私たちはその看板の元弘三年(1333)に本堂が河野氏によって再建されたという記事に着目した。この元弘三年には、松山平野南部で星岡合戦という大規模な合戦があり、伊予に攻めてきた鎌倉幕府方の北条時直(長門探題)の軍勢に対し、在地領主の得能氏、土居氏等が奮戦して撃退している。この年の梅元寺本堂再建は、この星岡合戦前に在地領主が戦勝祈願をし、合戦勝利後に大願成就の御礼として本堂を再建したものと見られる。そこで、小野村が松山市との合併前に編纂した市町村誌である『小野村史・全』(昭和三十五年・1960)をめぐってみると、梅元寺は裏山にあった行基山城城主得能氏の祈願寺であったことが分かった。得能氏は伊予守護職であった河野氏の一流であり、惣領家の河野氏が鎌倉幕府方および北朝方(足利尊氏方)に属したのに対し、得能氏は伊予南朝方(後醍醐天皇方)の頭目として「浮穴屋形」(屋形号は一國を支配する守護職の称号)を称していたという。よって、梅元寺のある小野谷は、南北朝期に南朝方の拠点であったことが分かった。『小野村史・全』掲載の梅元寺寺歴によれば、梅元寺と得能氏の関係は、嘉吉三年(1443)、得能(河野)通光が御台所の病氣平癒の靈験に対して寺領を寄進したところまで追える。しかし、明德三年(1392)の南北朝合一以後、伊予南朝方の総帥であった得能氏は勢力を失い、河野惣領家に家臣化していく。その後、得能氏の庇護を失った梅元寺を近年まで経営してきたのが、得能氏の家来筋に当たる森貞氏である。小野谷のフィールドワークでお世話になった宮内裕子様は森貞氏の出であり、「今でこそ梅元寺は小野谷自治会の共同管理になっているが、少し前までは森貞氏のお寺であった。」と教えて頂いた。また、森貞一族の先祖は野田神社(北梅本)に祀られる平安時代中期の武将の野田新藤次忠勝とされており、忠勝は天慶の乱(935)において、朝廷の派遣した小野好古(小野小町の甥)の官軍に属し、藤原純友の首を取ったという伝承を持つ豪傑である(『予章記』)。よって、森貞氏は得能氏の没落後、小野谷で梅元寺を維持していくために、自分たちの先祖の忠勝が属した大將軍小野好古にちなむ小町伝承を梅元寺に取り入れ、薬師の靈験伝承を説くことによって梅元寺を守ってきたことが分かった。また、元々、梅元寺は室町時代中期の嘉吉年間までは得能氏の祈願寺であったため、小町伝承が伝わった時期は、梅元寺が薬師信仰を元に民間信仰の寺となった嘉吉年間以降であることが推測できた。なお、森貞一族は、現在でも7月の第1日曜日に野田神社脇の森貞神社に一族が参集して先祖祭りを行っている。よって梅元寺は今でこそ山間部の狭い谷間にある小さな薬師堂だが、南北朝期、得能河野氏の祈願寺であったという由緒を持ち、小町に縁のある森貞氏が庇護してきたという歴史を持つため梅元寺に小町伝承が伝わったものと考えられる。また、この伝承は、小野谷に伝わる小町伝承、梅元寺に伝わる南朝伝承、森貞氏に伝わる純友伝承の三つの伝承を含む複合的伝承であるということが判明した。

4 小町伝承と地名の関連性について

私たちは、全国の小町伝承地にまで視野を広げ、伝承が伝わる地区の地名について全国的調査をした。私たちの調査対象地は53か所であったが、そのうちの24か所(45%)が小野という地名である(資料2)。53か所の小町伝承のうち約半数が小野という地区に伝わっていることは、小町伝承と小野という地名に強い関連性があることを示している。日本の地名は、小字程度で1000万件程あると言われていたが、その中で全国53か所中、24か所が「小野」地名であるという結果は、伝承伝播者が「小野」地名を狙って伝承を伝えていった可能性が高いことを示している。

5 小町伝承の伝播者は誰か

柳田國男氏の著作『女性と民間伝承』の中で和泉式部伝承や小町伝承について、全国各地に伝わる同様の伝承の伝播者は、熊野三山を拠点とする「熊野比丘尼」や「盲目の女旅芸人ごぜ」などの女性巡礼者であると説いていた。しかし、小町伝承は薬師如来の靈驗伝承であり、熊野信仰の本地仏は阿弥陀如来であるため、私たちは柳田國男氏の説に疑問を感じていた。調査の当初、私たちは梅元寺が創建以来、天台宗山門派の寺院で他宗派に改宗されていないことから、小町伝承を伝えたのは天台宗の聖であると結論付けていた。その後、伝承伝播者は誰かという疑問点を解決するためには、梅元寺の調査だけでは答えが出ないと考え、全国的視野で伝承伝播の特色を調査する必要があると考えようになった。そこで、小町伝承が伝わる全国の寺院30か寺の宗派と本尊について調査した。その結果、伝承伝播寺院の宗派調査では、(資料4)の円グラフのように真言宗が11か寺、次に曹洞宗が6か寺、天台宗・臨済宗・浄土宗がともに4か寺、不明が1か寺と続いた。よって、小町伝承の伝播者は宗派に関係なく伝承を伝えていった可能性がある。また、浄土真宗寺院・日蓮宗寺院・時宗寺院には伝播が見られず、この3つの宗派の寺院への伝播を避けた可能性もある。多くの小町伝承研究者が小町伝承を伝播したのは時衆、あるいは熊野比丘尼のように時衆に関係のある宗教者であるという説を取っているが、時宗寺院に伝承が伝わっていないことは予想外であった。また、小町伝承は薬師信仰であり、薬師如来を本尊とする寺院の多い天台宗に多く伝播しているのではないかと予想していたが、大日如来や不動明王を本尊とすることが多い真言宗寺院に最も多く伝えられていたことも意外な結果であった。よって、伝播者の実像については宗派に捕らわれず見直す必要があることが分かった。次に同じく伝承寺院30か寺の本尊についても調べてみた(資料5)。その結果、本尊が薬師如来である寺院が10か寺と全体の3割程度にとどまった。小町伝承が薬師如来の靈驗伝承であるため、薬師如来を本尊とする寺院に伝承が伝わっているものと調査前は推測していたが、調査結果から薬師如来以外を本尊とする寺院が2/3を占め、小町伝承の伝播者は寺院の本尊に関係なく薬師如来の靈驗伝承を各地に伝えていっていることが分かった。この二つの調査結果により、小町伝承伝播者は寺の宗派や本尊に関係なく広く伝承を伝え歩いてきたことが判明した。中世史研究の泰斗である石井進氏は全国に分布する八尾比丘尼伝説・源義経伝説等の伝承伝播者について分析し「伝播者である旅する盲御前たちは同時に聖なる巫女であり芸能人でもあった。伝播者は、聖と俗の中間の姿を取る俗聖であり、語り手は『現場を見た人』であり、物語は彼女の体験談であり、語り手は物語の女主人公自身に転化するものであった。」として、女性俗聖が自分の体験談として伝承を広げていったとする説を取る。同意できる見解である。ただ、小町伝承の伝播者が宗派・

本尊に関係なく各地の寺院に寄寓し、伝承を伝播していつている様子からは伝播者の宗教性が薄いことがうかがえ、伝播者は「小町と薬師の霊験談」の語りを村々に入り込む手段として活用し、薬師信仰流布という宗教的目的よりも、旅をして回遊する中で日々の生計を立てるために全国を流浪していったものと捉えられた。よって、私たちは梅元寺および全国に小町伝承を伝えたのは名もない俗聖の女性宗教者であったとする結論に至った。

6 小町伝承が小野谷に伝わった時期はいつか

私たちが調査を続ける中、郷土研究部OBの大森昂さんから『予陽塵芥集』（松山藩軍学者 野沢弘通（象水）編・天保三年（1832）刊）（資料7）という新出資料を紹介してもらった。そこに記載された小町伝承の記事には、全国各地に伝わる小町伝承の中にしばしば見られ、物語の重要構成要素となっている「南無薬師の歌」（小野小町と薬師如来の和歌のやりとり）の記事が記載されており、小野谷における小町伝承も成立時期から伝承の中に「南無薬師の歌」が含まれていた可能性が高いことに気付かされた。そこで伝承の重要構成要素である「南無薬師の歌」を糸口にして、全国各地の伝承と小野谷の小町伝承を比較検討し、再度全国的視野から小町伝承が小野谷に伝わった時期について検証していくことにした。「南無薬師の歌」の重要性について初めて指摘したのは柳田國男氏である。「南無薬師の歌」とは、100日の祈願をしても効能があらわれない小町が薬師に対し苛立ち、「南無薬師 諸病悉除の願たへて 身より薬師の名こそをしけれ」と薬師をなじる和歌を歌ったところ、薬師が小町の夢にあらわれ、「村雨は 唯一時の内そかし をのか蓑笠そこに脱をけ」と返歌を返したという和歌のやりとりを指す。「南無薬師の歌」のやり取りの後、小町が夢から覚めると瘡が治って元の美しい姿になったという結末になる。その「南無薬師の歌」を含む伝承の伝播の過程を追えば、松山市小野谷にどの時期に伝承が伝わったか解明できると考えた（資料15）。

最古の「南無薬師の歌」伝承は、寛永五年（1628）に京都で発刊された、京都誓願寺十五世住職安楽庵策伝和尚がまとめた『醒睡笑』掲載の「南無薬師の歌」伝承である（資料9）。登場する薬師は比叡山延暦寺の薬師如来で、瘡の罹患者は「山門北谷の稚児」になっている。二番目に確認できるのは寛永十年（1633）に発刊された『新撰狂歌集』という、編者も版元も不明な本に載っている「南無薬師の歌」伝承である（資料10）。薬師は京都で人気のある因幡薬師（平等寺）であり、罹患者は京都「五条高辻に住ける人」となっている。『醒睡笑』発刊の五年後に刊行されているが、伝承の舞台はやはり京都である。三番目に古い記事は京都押小路通寺町西江入町の巖津喜兵衛が、寛文十二年（1672）に刊行した『一休閑東話』に載っている「南無薬師の歌」伝承である（資料11）。薬師は三河国（愛知県）の鳳来寺に祀られている峯薬師（日本三大薬師）であり、罹患者は「矢矧川の里に住んでいる人」になっている。この「南無薬師の歌」伝承の舞台は三河であり、柳田國男氏も小町伝承の流布には三河鳳来寺に集う聖僧が関与しているのではないかと論じているが、著者の巖津喜兵衛は京都の人であり、『一休閑東話』は京都で刊行されているため、この三冊の文学書から「南無薬師の歌」伝承は京都から発信され全国に流布していったものと考えられる。次に確認されるのは、元禄期に書写されたとされる宮崎県法華岳薬師寺（日本三大薬師）の「住持記」に記された「南無薬師の歌」伝承（資料12）であり、罹患者が平安時代の著名歌人、和泉式部になる。著名人が罹患者になっている「南無薬師の歌」伝承はこれが初めてである。また、和泉式部が罹患者になっている唯一の「南無薬

師の歌」伝承であるとされている。伝承の舞台は日向宮崎であり、京都を介していないはじめての伝承になる。更に、享保二十年(1735)に成立した『古戦場備中府志』という地誌にある備中青江城に関する記事(資料13)では、岡山県法輪寺の備中日間(ひるま)薬師(日本三体薬師)が登場し、罹患者は小野小町となり、ここで初めて小野小町が登場する。(資料15)は「南無薬師の歌」伝承が載っている書物を、発行年の古い順に並べたものである。以上の「南無薬師の歌」伝承の変遷を見ると、京都誓願寺の僧であった安楽庵策伝和尚の『醒睡笑』が京都で刊行後、約100年前後の期間の中で、瘡を患った罹患者は、山門の兒子、京都五条高辻に住ける人、三河矢矧に瘡を病む者、和泉式部、小野小町へと変遷し、小野小町で最終的に熟成したものと捉えられる。各地域における地誌等の伝承記事は、伝承伝播後に採録されるため、100年前後で全国の地誌に「南無薬師の歌」伝承が採録されていることからすると、「南無薬師の歌」伝承は、『醒睡笑』が京都で刊行された後、江戸時代前期の短期間の内に全国に流布していったものと考えられる。また、「南無薬師の歌」伝承が京都を発信源として、初期の段階では有名薬師を祀る寺院に広められていったことが分かる。京都から距離のある宮崎県法華岳薬師や岡山県倉敷の日間薬師がそれを示している。私たちの調査では、全国伝承地の寺院の本尊は薬師如来以外の仏も多いため、伝承を広めていく中で薬師を本尊とする寺院に伝承を伝播するという規則性が崩れ、本尊が薬師以外の寺にも伝播していったものと見られる。また、過去の調査結果から「小野」地名のある箇所にも伝承を広めていったことも分かっている。松山市小野谷の小町伝承も「南無薬師の歌」を構成要素として持つため、伝承が全国に広まっていく流れの中で、同時期に小野谷に伝えられたものと見て間違いのないであろう。そこから小野谷の小町伝承が伝えられた時期は、『醒睡笑』が世に出た寛永五年(1628)以後、小野薬師が梅元寺から北梅本正観寺に移る天和元年(1681)以前の江戸時代前期53年間に絞られることになった。この時期のどこかで俗聖の女性宗教者が小野谷を訪れ、梅元寺の森貞氏に小町伝承を伝えたものと見られる。『予陽塵芥集』(天保三年・1832刊)(資料7)にある小野谷の伝承の記事には、「小町身に悪疾を生ず、因而道後の湯に入らんと当国に來り浴するにしろしなし」として道後の湯に効能なしと記されている。この伝承は道後温泉管理者の石手寺(真言宗・本尊薬師如来)を暗に批判しているものと捉えられる。伝承中の記事からみて、伊予に來た俗聖の女性宗教者は、小町伝承を伝えようと、まずは伊予一番の有名薬師である五十一番札所(四国八十八か所)の石手寺に向かった形跡が読み取れる。そこで伝承の伝播に失敗し、「小野」地名を持つ小野谷に向かい、彼女を迎え入れてくれた小野谷に小町伝承を落としていったものと推測できる。この道後温泉の記事の構成要素は、松山市小野谷に伝わる小町伝承のオリジナリティの部分として現在に伝わっている。

8 おわりに

これまで、私たちは三年間かけて小野谷の小町伝承の謎について解明してきた。その結果、小野谷の小町伝承は南朝伝承と純友伝承を含む複合的伝承であること、梅元寺に伝わったのは小野谷という地名が関係していること、小町伝承は宗派・本尊に関係なく全国の様々な寺院に伝播されていったこと、小町伝承の伝播者は名もない俗聖の女性宗教者であったこと、小町伝承が小野谷の梅元寺に伝わった時期が寛永五年(1628)から天和元年(1681)までの53年間に絞られ、「南無薬師の歌」伝承が京都から全国に流布していく中で、小野谷に伝えられたものと結論付けた。今後は、この伝承の復活にも努めていきたい。

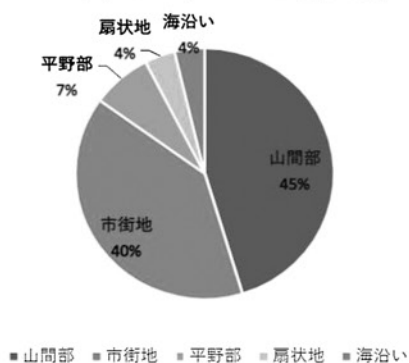
愛媛県立松山北高等学校郷土研究部
 「松山市に伝わる小野小町伝承の謎を解く」
 今回、調査した松山市小野地区の地図

添付資料



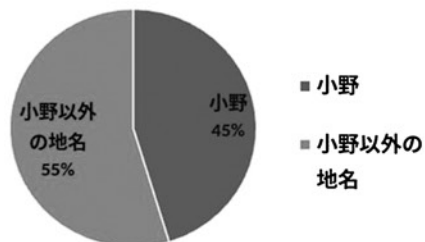
(資料1) 「小町伝承が伝わる地域分類」

「小町伝承が伝わる地域分類」



(資料2) 「小町伝承が伝わる小野地域とその他の地域の割合」

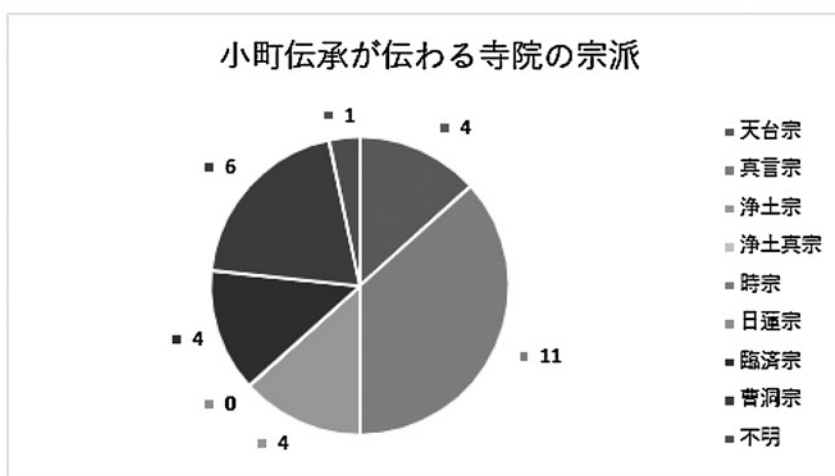
「小町伝承が伝わっている小野地域
 とその他の地名の地域の割合」



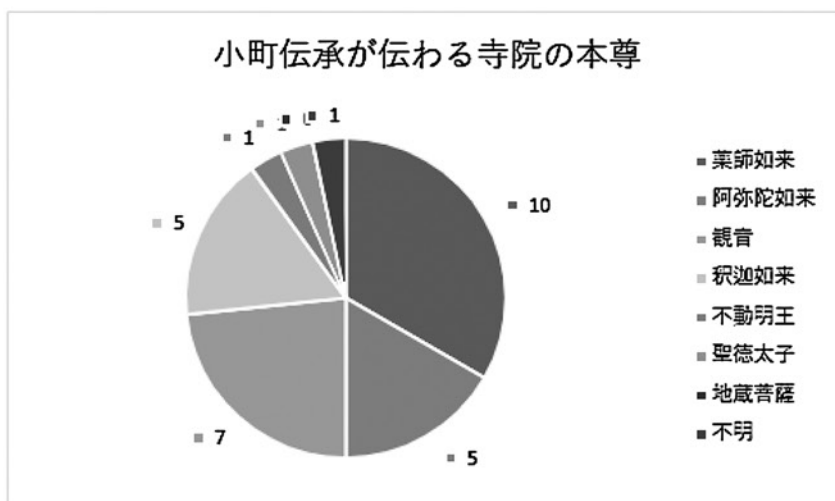
(資料3) 「全国の小野小町伝承伝播寺院の宗派・本尊調査」(30ヶ寺)

寺院名	所在地	宗派	本尊
極楽寺	岩手県北上市	真言宗智山派	阿弥陀如来
誓願寺	秋田県秋田市旭南	浄土宗	阿弥陀如来
専光寺	秋田県横手市金沢	浄土宗	阿弥陀如来
向野寺	秋田県湯沢市雄勝町	曹洞宗(元天台宗)	釈迦牟尼仏
歌懸神社(吉祥寺)	山形県山形市駅前通	曹洞宗	不明
玉昌寺	山形県東村山郡中山町	曹洞宗	薬師如来
小野薬師堂(宝積院)	福島県白河市子小田川	真言宗豊山派	薬師如来
北向観音堂	茨城県新治郡八郷町	不明	十一面観世音菩薩
観音寺薬師堂	茨城県潮来市牛堀町上戸	真言宗豊山派	聖観世音菩薩
大慈寺	栃木県下都賀郡岩舟町	天台宗	薬師如来
得成寺	群馬県富岡市相野田	真言宗豊山派	不動明王
武蔵国分寺	東京都国分寺市元町	真言宗豊山派	木造薬師如来坐像
無量院(薬王山能覚寺)	東京都文京区小石川	浄土宗	不明
萬松寺	東京都町田市小野路町	臨済宗建長寺派	薬師瑠璃如来
甲斐善光寺	山梨県甲府市岩井	浄土宗	善光寺式如来
小野寺	岐阜県美濃加茂市	臨済宗妙心寺派	不明
延算寺	岐阜県岐阜市岩井	高野山真言宗	薬師如来
月心寺	滋賀県大津市大谷走井	臨済宗	童形聖徳太子像
小町寺(補陀洛寺)	京都府京都市左京区市原野	天台宗延暦寺派	阿弥陀如来
神泉苑	京都府中京区二条神泉苑	真言宗 東寺	聖観音
退耕庵	京都府東山区東福寺退耕庵	臨済宗	千手観音
随心院	京都府山科区小野	真言宗	如意輪観世音菩薩
妙性寺	京都府京丹後市大宮町五十河	曹洞宗	釈迦牟尼佛
久唱寺	京都府福知山市小野脇	曹洞宗	釈迦牟尼仏
雲光禅寺(雲光寺)	鳥取県西伯郡会見町(南部町)	曹洞宗	釈迦牟尼仏
法輪寺	岡山県倉敷市羽島	真言宗御室派	薬師如来
石手寺	愛媛県松山市石手2丁目	真言宗豊山派	薬師如来
正観寺	愛媛県松山市北梅本町	天台宗	薬師如来
梅元寺	愛媛県松山市北梅本町	天台宗	薬師如来
金剛福寺	高知県土佐清水市足摺岬	真言宗豊山派	三面千手観世音菩薩

(資料4) 「小町伝承が伝わる寺院の宗派」調査(30ヶ寺)



(資料5) 「小町伝承が伝わる寺院の本尊」(30ヶ寺)



(資料6) 『予陽郡郷俚諺集』(松山藩家老奥平貞虎編・宝暦十二年(1762)刊)

※『伊予史談会双書第15集 予陽郡郷俚諺集・伊予古蹟史』に所収

「小野谷と云所に薬師の像あり、仏体の内に美女の容を彫籠たり、里俗の諺に、昔小野小町此所より出たり、其形相を写し籠たりと言伝ふ、尤所の名に應したれとも、小町は出羽郡司小野良実か女と云、然れば不審の事也、如何様故有へし、委しく弁し難し、今は梅の本永尾山正観寺に此本尊を引移し安置也、按するに小野某か女と云ふ、」

(資料7) 『予陽塵芥集』(松山藩軍学者野沢弘通(象水)編・天保三年(1832)刊)

「永尾山正観寺」

「梅本村 本尊薬師 天台宗 里俗小野の薬師といふ、又仏躰に美女の容を彫たるあり 小野の小町像成といへり 民の物語に 小野の山本六代の孫中納言良実の子出羽郡司右京亮良家の女也 然

るに 良実大和守に任し上洛の時 近江国玉造庄佐少女為猶子と為し小町と号すと云ふ しかるに
小町身に悪疾を生ず 因而道後の湯に入らんと当国に來り浴するにしるしなし 此薬師に祈るに
愈(癒)されハ詠しける

南無薬師 諸病悉除の願たへて 身より薬師の名こそをしけれ

薬師夢中に御返歌

村雨ハ 唯一時の内そかし をのか蓑笠それに脱をけ

小町平癒して帰り給ふと云ふ 小町の事説ニ多し 又当国に來り給ふ事もいふかし」

(資料8) 『伊予温故録』 (宮脇通赫・明治二十七年(1894))

寺伝に云、文武帝御宇慶雲三丙午六月十七日、僧行基梅本村長尾山の麓の靈地たるを以て一字
を創營し薬師を安置す。里人今に至り六月十七日を以て群集礼拝し香花を献ず。其の後、小野小
町曾て病あり、住吉神に祈る。仏教に従ひ当国に來り此寺に留り病平癒を祈る。誓ふに百日の籠
居を以てす。満日に至り爰に歌を得る。云、『春雨のふると見へしがはれにけりそのみのかさを
そこにぬぎ置く』病終に癒ゆ。此寺に寓すること三年。薬師の像を刻み短冊に書し、其の像の頭
中に蔵めて此寺に安置す。世人呼て小野薬師と云ふ。其の寺を小野山、地名を小野谷、川名を小
野川と改称す。後、河野通弘祈願す。効あるを以て庵を営み、其の像を安置し、小野谷梅元寺と
改む。河野家累世の祈願所たり。天和元辛酉年、村民の望に依て今の地に移す。寺号を正観寺と
改めたり。梅元寺はなほ小野谷に在しが、明治七年これを廃せり。

(資料9) 『醒睡笑』 (京都誓願寺の安樂庵策伝和尚著・寛永五年(1628))

「山門(延暦寺)北谷に兎あり、悪瘡の至りに根本中堂へ参籠す、
七日済すれども敢て効無し、うち恨みて下向に、短冊を内陣へ投入れ参らせたり、
『南無薬師 衆病悉除の 願ならば 身より仏の名こそ惜しけれ』
即ち内陣に御声ありて、
『村雨の 降るとは見えて 晴れにけり そのみのかさを そこにぬぎおけ』
本坊に還れば瘡みな痕無し。」

(資料10) 『新撰狂歌集』 (編者・版元不明・寛永十年(1633)刊行)

「むかし五条高辻に住ける人、瘡をいたはりて因幡薬師(平等寺)へこもりて
南無薬師諸病悉除の願なれば身より仏の名こそ惜しけれとよみければ、内陣より返し
村雨はただ一時のものぞかし をのが蓑笠そこに脱ぎおけ」

(資料11) 『一休関東話』 (京都 巖津喜兵衛著・寛文十二年(1672)刊行)

「峰の薬師へ狂歌を遣はさるゝ事」
「三河峰薬師、靈驗あらたか也、矢矧に瘡を病む者、七々日の願を立て、既に四十余日詣づれど
も其しるし無し、如来を恨み奉り散々に悪口す、一休狂歌一首遊ばし、今晚まうでて之を読むべ

しとのたまひければ、頃しも五月中の二日参る人多し、深更を待ちて之を読上げる、「なむやくし衆病悉除の願いなれば」と、読みも果てぬに内院震動して、「村雨はたゞーときのものぞかしおのがみのかさそこに脱ぎおけ、」置きあがりて見れば身の瘡無し、骨髓に徹つてすぐに発心して諸国を廻る、」

(資料 12) 『住持記』(宮崎県法華嶽寺縁起・著者不明・元禄年間書写)

「橘道貞の妻式部(和泉式部)が不治の病にかかっていた時、清水の観音から日向の法華嶽寺の薬師に祈れと夢告される、京から旅に出て日向の法華嶽寺に長い間籠るが、病はよくなる、式部は追い込まれて

「南無薬師 諸病悉よの願立て 身より仏の名こそ惜しけれ」
と詠んで千尋の谷に身をなげると

「村雨は たゞ一時のものぞかし おのが身の笠そこに脱ぎおけ」
と御歌が聞こえてきて式部の病が消えた、式部は再び都へ上がり、手慣れた琵琶を法華嶽寺に奉納した」

(資料 13) 『吉備群書集成(五)古戦場備中府志』(平川親忠著・元文二年(1737))

「青江城 酒津村」

「當城開基小野朝臣出羽守良実一本當隆又常隆、仁皇三十一代八世の孫、篁の次男たり、備中の国司として當城開基す、息女小町は阿賀郡湯川寺玄寶上人を歌道の師とし給ひ、世に誉を上給ふ、采女に召されて上洛し、小野小町と申侍となん。日間薬師に小町立願の歌、

「南無薬師衆病悉除の願立 身より佛の名こそをしけれ」と
薬師御返歌

「五月雨は只一時の物ぞかし をのがみのかたこゝにぬぎをけ」
日間山は我朝にて朝間、日間、夕間とて、三所の靈場たり、黒田村野山の東に小町谷の上に小町庵の跡有て、其地跡顯然たり、」

(資料 14) 『上野小町山(塩薬師)略縁起写』(編者不明・元禄期以後か)

「往昔より石薬師之有り、小町難病平癒の心願に日夜参籠ある満願の夜 捧誦す 「南無薬師 諸くわんの叶はずば 身より佛の名こそおしけれ」小町満願夜夢眠中授り給ふ 御歌「白雨は たゞ一時のものそかし 己が身のかさこゝにぬぎをけ」 現詠し如来空中に帰られ給ふ、直に病氣全快因て、里人ら迄子孫繁栄のため、塩を積備へ候 故に、字塩薬師と唱へ、其しるしか今におみて塩の井戸あり、夫より小町は本国陸奥江立帰 られ候」

(史料 15) 「南無薬師の歌」 伝承伝播の変遷表

資料名	年代	瘡を負う罹患者	祈願寺	特記事項
『醒睡笑』	寛永五年(1628)	山門北谷の児	近江延暦寺(天台宗)	京都誓願寺(浄土宗)の安楽庵策伝著
『新撰狂歌集』	寛永十年(1633)	五条高辻に住ける人	京都因幡薬師(平等寺・真言宗)	因幡薬師は京都で御利益の高い薬師として人気
『一休関東話』	寛永十二年(1672)	三河矢矧の里の住人	三河峰薬師(鳳来寺・言宗)	京都押小路通寺町西江入町の巖津喜兵衛編・峰薬師は日本三大薬師
『住持記』	元禄年間書写(1688 から 1704)	和泉式部	日向法華嶽寺(天台宗)	元亀・天正年間に天台宗から曹洞宗に転派・法華嶽寺薬師は日本三大薬師
『吉備群書集成(五)古戦場備中府志』	元文二年(1737)	小野小町	備中日間薬師(法輪寺・真言宗)	平川親忠著・日間薬師は日本三体薬師
『小町山略縁起写』	年代不明・元禄期以降	小野小町	上野塩薬師(得成寺・真言宗)	編者不明・塩薬師として有名
『予陽郡郷俚諺集』	宝暦十二年(1762)	小野小町	伊予小野薬師(梅元寺・天台宗)	編纂者・松山藩家老奥平貞虎 今は永尾山正観寺に本尊を引き移し安置す
『小野寺旧記』	宝暦十四年(1764)	小野小町	下野大慈寺(天台宗)	編者不明・本尊薬師如来
『予陽塵芥集』	天保三年(1832)	小野小町	伊予永尾山正観寺(天台宗)	松山藩軍師野沢弘通(象水)編述
『伊予温故録』	明治二十七年(1894)	小野小町	伊予永尾山正観寺(天台宗)	編纂者・宮脇通赫・天和元年(1681)、正観寺に小野薬師を移す
『正観寺事蹟記』	大正十二年(1923)	小野小町	伊予正観寺(天台宗)	著者・正観寺住職松尾見洲

(資料 16) 梅元寺の仏像調査

私たちは愛媛県美術館の学芸員である長井健先生の御協力の元、梅元寺の仏像調査もさせていただいた。その結果、庫裏にある長年、梅元寺で「小野薬師」として祀られてきた仏像は、手の指による印の切り方、薬師如来が持つ薬壺を持っていないことから、薬師如来像ではなく、阿弥陀如来像で間違いないということが判明した。この本尊阿弥陀如来像は鎌倉時代風の室町期の中央仏師による作品であり、かなり力のある勢力でないとこれだけのランクの仏像を所持することはできないということで、この地を支配していた南朝方頭目の得能河野氏関連の祈願仏ではないかと考えられる。この文化財調査を通して、梅元寺には、伊予南朝関連の貴重で価値の高い文化財が所蔵されている事が分かり、今後過疎化が進む小野谷地区において、どのようにしてこの貴重な文化財を保存していくかが大きな課題となった。



梅元寺 仏像鑑定調査 (令和4年6月11日土曜日 午前10時～12時 天候小雨)

梅元寺は住職不在の無住の天台宗寺院であり、明治の初め以降小野谷地区の住民で共同管理してきた薬師堂である。

1 本堂（薬師堂）の仏像調査

① 中央 薬師如来像

- 像高41cmの小型の薬師如来像である
- 部位数の多い複雑な寄木造
- 切れ長の眼に玉眼を使っており、法衣の衣文のヒダがダイナミックにうねる鎌倉時代風の丁寧な作風。顔立ちも上品で洗練されている。
- 見えない後背部まで、衣文がきれいに彫られており、小型の像でありながら耳たぶにも穴が開けられている。京都・奈良あたりの、中央の仏師による作品か。
- 足の指は欠損している部分を新しい部材で修復している。手は手首から折れた元の部位を付け直している。
- 表面の金箔は、ごく一部を残して剥落している。
- 目の特徴、耳の作風からして室町時代後期から、江戸時代初期にかけての作品であると考えられる。

- 平成二十一年(2009)七月の土石流災害による本堂全壊時に、泥の中から取り出されており、台座に「2007年修復」の文字が書かれている。松山市室町の神仏具店「川上神仏具店」で修復。折れた手首を継ぎ直す修復をしている。



②弘法大師像

- 宗派を問わず四国の寺院に多く見られる典型的な弘法大師像。靴・水瓶も残っている。
- 高野山奥の院入定前の、弘法大師の説法する御姿を写している。
- 部位数の少ない、単純な寄木造。ひび割れを防ぐための内彫も施されていない。
- 薬師堂をお遍路さんに宿泊所として提供していた可能性があり、お遍路さんの寄進によって奉納されたものかもしれない。
- 日本古来の鉱石から作る岩絵の具を使って彩色されており、洋風絵の具が日本に入る前の江戸時代後期から明治時代にかけての作品か。



梅元寺本堂（薬師堂・小野薬師）

2 庫裡（本堂東側）の仏像調査

① 押し入れ中 阿弥陀如来像（元の本尊・小野薬師と云われてきた）

- 薬師如来像と云われているが、手の指による印の切り方、薬壺（やっこ）を持っていないことから、阿弥陀如来像とみて間違いない。（地元の方々も驚いていた）
- 大きさが像高 75cm(2 尺 5 寸) あり、本尊仏としての規格を持っている。
- 斜め前傾姿勢で、衆生を救おうと足を踏み出す前の形を彫っている。
- 足下、指等、色々な部材を後継ぎしている。
- 胸の白い部分は絵の具がめくれて剥がれている。
- 本堂の薬師如来像も良い作風であったが、髪の毛も、漆を盛って、「うず」まで丁寧に作られており、耳たぶの穴も丁寧に空けられている。更に一段と良い作風の、中央で作製された、部位を多数組み合わせた複雑な寄木造像である。
- 口の部分はきゅっときつく結んだ唇の形が、古い仏像の品格を表している。
- 法衣の衣文のヒダが、本堂の薬師如来像より、さらに複雑で立体的である。
- 鎌倉風の室町期作品（前・中・後期は断定できない、解体修理時に胎内物が出てくればはっきりする可能性がある）であり、仏像は移動していくことが多いので断定はできないが、この地を支配していた南朝方頭目の得能河野氏の祈願仏ではないかと考えられる。かなり力のある勢力でないと、これだけのランクの仏像を寄進することはできない。
- 光背は、飛天光の透かし彫り形態で、人面鳥である迦陵頻伽（かりょうびんが）二羽が左右下部に透かし彫りされており、上部の欠損部にもう一羽いた可能性もある。非常に丁寧に細かい作風であり、江戸時代初期くらいの後付け作品であると考えられる。
- 台座は蓮台で、蓮の花弁の数が通常のものよりかなりの枚数であり、江戸時代初期の丁寧な作風であると見られる。作風の的に合致しているため、光背と台座はセットで作製されたものと推測できる。台座に文字が書かれている可能性があるが、損壊の危険性があるため見ることができない。



(資料 17) 「参考文献」

『小野村史・全』(小野村役場・昭和三十五年(1960))

『予陽郡郷里諺集』松山藩家老奥平貞虎編・宝永七年(1710)

『伊予温故録』宮脇通赫編・向陽社・明治二十七年(1894)

『西海巡見志・予陽塵芥集』伊予史談会編・伊予史談会・昭和六十年(1985)

『小野小町追跡「小町集」による小町説話の研究』片桐洋一・笠間書院・平成二十七年(2015)

「関東の小野小町伝承」小堀光夫・SFNRJ_K_023-08.pdf (ko-sho.org)

『薬師信仰—護国の仏から温泉の仏へ—』西尾正仁・岩田書院・平成十二年(2000)

『柳田国男全集(6)女性と民間伝承・桃太郎の誕生』柳田国男・筑摩書房・平成十一年(1999)

「廻国の比丘尼」(『仏教民俗学大系2 聖と民衆』)根井浄・名著出版・昭和六十一年(1986)

小学館『日本の歴史 12 中世武士団』石井進・小学館・昭和四十九年(1974)

(資料 18) 小町伝承を活用した地域活性化に向けて

三年前、フィールドワークを行った際に小野谷地区の地域の方から「小町伝承が伝わる小野谷では少子高齢化が進み、梅元寺の管理や、伝承を語り継いでいくことも、かなり難しくなっている。」というお話を頂いた。伝承継承に向け小町伝承を多くの人へ広め、語り手を増やしていくことを目的に、去年から本校郷土研究部と本校演劇部で連携し、小野公民館や、小野小学校で小野小町伝承を演劇化し、上演することによって小町伝承の復活に向けて活動してきた。





興原古墳の石材運搬に関する研究
—古墳時代社会解明への道しるべ—

長崎県立壱岐高等学校

東アジア歴史・中国語コース2年歴史学専攻

片野 一帆、後藤 健、須賀 干城、丸山 隼平



I はじめに

壱岐島は、東西 14.8km、南北 17.2km の島で、九州と朝鮮半島との間に位置しており、対馬島とともに古来より日本本土と朝鮮半島および大陸とを往来する際に重要な拠点としての役割を果たしていた（図 1）。

この壱岐島には、265 基の古墳が確認されており、長崎県内の古墳全体の 60% を占める（図 2）。私たち壱岐高校東アジア歴史・中国語コースでは、1 年時に、壱岐を代表する古墳の巡検を行い、巨石古墳と呼ばれるとても巨大な石室を持つ古墳も数多く見学した。活動を通して壱岐の古墳について学んでいくうちに、このような大きな石材をどのようにして運んだのか、どのような道を用いて運搬したのか、そしてその作業をどのような集団が行ったのか疑問に思った。これらのことから私たちは、古墳の石材の運搬について、研究を進めていくこととした。

II 石材の運搬方法に関する先行研究

運搬方法に関しては、石材を船に乗せ、河川を利用して運搬する方法（浅野 2022）と陸路で「修羅（しゅら）」という道具を使用して運搬する方法（近つ飛鳥博物館 1999）の二通りがあることが明らかになっている。

ここで用いる修羅とは、重量物を運搬することに使用する Y 字状の大型木ぞりを指す（図 3）。使い方は、修羅に引き綱を結び、運搬物の重さに応じた人数で綱を引く。摩擦を軽減するために、修羅の下には「コロ」を挟んで移動させる（註 1）。修羅を引く作業には、全体の指揮を行う人、綱を引く人、下りの場合は滑り落ちないように後ろから綱を引く人、コロを動かす人、テコ棒で舵取りをする人などの役割がある。現存している最古の修羅は三ツ塚古墳の発掘調査で 1978 年に出土したものである。江戸時代初期の駿府城の築城図屏風には修羅により石材を運搬している様子が描かれており、近世においても修羅が使われていることがわかる（近つ飛鳥博物館 1999）。

壱岐には、石材の運搬に使用できるほどの水量がある河川が存在しないため、本研究では陸路により運搬する方法を想定した。また、前述の三ツ塚古墳の修羅は 5 世紀のものであり、壱岐の多くの古墳の築造はこれ以降であると考えられているため、壱岐島内の石材の運搬にも修羅が用いられたと仮定して分析を進めることとした。

III 分析の対象

分析の対象となる古墳を見つけるために、まず、表層地質と石室石材の関係について注目した。壱岐島の表層地質のほとんどは玄武岩であり、他の石材は限られた地域でしか採石できない（図 4）。そのため、採石のしやすさから多くの古墳の石材が玄武岩である。表層地質が玄武岩である場合には採石地を絞り込むことができず、運搬ルートの分析が困難である。そこで、次の条件 1 に合致する古墳を探した（図 5）。

条件 1：表層地質が玄武岩でない場所に所在しているもの

この条件により、表 1 の 5 つの古墳が挙げられたので、現地を訪れる、報告書を探すなどこれらの古墳の検討を試みた。しかし、墳丘に立ち入ることができない、あるいは発掘調査が行われていないため石材が確認できず、分析対象とするには難しいことが分かった。

そこで条件を以下のように変更し、条件 2、3 にあてはまる古墳を探すこととした。

条件2：石室に使用されている石材が確認できるもの

条件3：表層地質が玄武岩の場所に所在し、石室に使用されている石材が玄武岩以外であるもの

興原（こうばる）古墳は条件2、3に合致する古墳である。2003年に測量調査が行われ、その際に石材の確認もされている。所在地の地質は玄武岩であり、石室には「隠田石（かくれだいし）」と呼ばれる粗面安山岩が使用されている。また、隠田石は採石地が判明しているため、興原古墳との位置関係が分かるので、運搬ルートを検討することが可能である。これらのことから、興原古墳を本研究の分析の対象とした。

IV 興原古墳について

興原古墳は、島内最大河川の旗鉢（はたほこ）川流域に形成された深江田原（ふかえたばる）と呼ばれる平野の西側、吉崎市石田町湯岳興触（ゆたけこうふれ）に所在する横穴式石室を持つ円墳である（図6、7、8、9）。築造された時代は遺物が出土していないため正確には不明だが、石室の形から6世紀後半ごろの築造とみられている。

墳丘部分に関しては現在西側の半分近くが消失しており、北東側もかなり削り取られている。また、南側もわずかではあるが裾部を墓地造成のために削り取られている。現在の規模は東西8.5m、南北15m、高さ4.8mとなっている。本来の規模は直径16～18m程度であったと考えられている。

石室は羨道を喪失しており、高さ2.8m、奥行き2.7m、奥壁側の幅2.2m、玄門側の幅2mの玄室部分のみが残っている（図10）。石室に使用されている隠田石は、古墳から1km程離れた場所に存在する隠田溜池を中心とした地域に分布している。江戸時代には近隣の神社の参道石段などにも使われている。当時の石切場は不明だが、現在も隠田溜池に隣接する角上山（つのかみやま）に露頭が確認できる。（石田町教育委員会2003）

V 石材運搬に関する分析方法

石材運搬についてのルートや人数を知るために、修羅のような運搬具を使用した近世・近代の事例を探したところ、先述した三ツ塚古墳で出土した修羅と似たような木ぞりである「キンマ」が宮城県南三陸町に現存していることがわかった（図23）（一瀬1999・2023）。このキンマは、「昭忠碑（しょうちゅうひ）」という戦没者慰霊のための石造物の運搬と、「三山碑（さんざんひ）」という石造物の運搬に際し、二度使用されている。「昭忠碑」の運搬は、1910（明治43）年9月に入谷村（現宮城県南三陸町）の帝国在郷軍人団長である村長が企画したものであり、実際に運んだ距離や日数、人数や石切場の位置等の記録が詳細に残っている（一瀬1999・2023）。採石地と建立場所が明確に判明しており、興原古墳の石材運搬の規模を明らかにする上で直接比較することができる好例である。

本研究で、興原古墳との比較を行う上で手掛かりとなる「昭忠碑」の要点は3つある。（一瀬1999・2023）

1. 石材の大きさについて

高さ2.45m、直径0.78mの花崗岩でできた砲弾型の碑であること。

2. 運搬ルートについて

桜葉沢（たらばざわ）川沿いの石切場から入谷八幡神社まで、1.3kmの道のりを運搬され

たこと。

3. 運搬具（修羅）について

運搬には、長さ 3.37m、幅 0.94m のケヤキの幹を用いた「キンマ」という修羅を用い、コロとして「バンギ」と呼ばれる雑木を布で巻いたものが用いられていること。

これらの情報をもとに、まず昭忠碑の石材の重量の推定と運搬ルートの推定を行う。次に、興原古墳においても同様に現地で行った石室の観察と運搬ルートの検討及び発掘調査報告書の情報をもとに、石材の重量の推定と、運搬ルートの復元を行う。それぞれのルートの傾斜については、地理院地図の断面図ツールを用いて断面図を作成し、計測した。

そしてそれらを比較することで、興原古墳の石材運搬の規模を推定する。

VI 分析

(1) 昭忠碑の分析

① 石材の重量の推定

昭忠碑の石材は花崗岩であることから次の計算式で求めることができる。

昭忠碑の体積 × 花崗岩の密度 = 重量

昭忠碑は高さ 2.45 m、直径 0.78 m の砲弾型であることから、円柱形と仮定し体積を求めた。密度は、一般的な花崗岩の密度である 2.7g/cm³（天野・渡部ほか 2021）とし、計算したところ、昭忠碑の体積：1170105.3 cm³ × 花崗岩の密度：2.7g/cm³ = 3159284.31g ≒ 3.16 t という結果となった。

② 運搬ルートの復元

ルートの復元には、白蔵峯を超える際になるべく緩やかな場所を選ぶこと、また運搬距離が 1.3km になることを条件として検討した。その結果、図 11 のように桜葉沢川沿いの石切場から白蔵峯を上り、尾根を伝って反対側の平野部に下り、再び入谷八幡神社のある八幡山に運び上げるルートとなる。傾斜については図 12 の通りである。

(2) 興原古墳の分析

① 石材の重量の推定

興原古墳の石室には大型の石材が 14 個残存している。このうち、玄門部の天井石を分析の対象とした（図 8、図 20）。興原古墳では発掘調査が行われていないため、幅・奥行き・高さが計測可能なものはこの石材のみだからである。

興原古墳の石材は、体積を求めるに際しほぼ直方体を呈していると仮定したため、幅・奥行き・高さの計測においては全て最大値を用いた。計測の結果は、幅 2.96m、奥行き 1.47m、高さ 0.88m である。

密度については、採石地である角上山で採取した隠田石のサンプルから、水を入れたビーカーとメスシリンダーを用いて算出した（図 21、22）。その結果、隠田石の密度は 2.255g/cm³ である。

ここから、天井石の重量を計算すると、天井石の体積：3829056 cm³ × 隠田石の密度：2.255g/cm³ = 8634521.28g ≒ 8.63 t という結果となった。

② 運搬ルートの復元

興原古墳の石材は、角上山の露頭を採石地として仮定し、できるだけ谷や急傾斜地を避

けることを条件として、ルートを復元した。なぜなら、傾斜が強いと下り坂では修羅の制御が難しくなるため危険であり、上り坂では引き上げるのに多大な労力が必要となると想定されるからである。復元したルートでは、角上山の採石地から尾根を東に220m下り、山の平坦部で南に90度旋回し、緩やかな尾根を550m下る。再度、南東方向に旋回し130m下り（註2）、そののち興原古墳に向けて110m程度緩やかな丘陵を上る（図13）。運搬ルート全体のうち70%が下りである。（図14、15、16、17、18、19）

（3）興原古墳の石材運搬の規模

これまでの検討により知り得た情報をまとめたものが表2である。「昭忠碑」の事例では、運搬の人数と日数が判明しているため、表2を用いて興原古墳の石材運搬にかかった（A）人数と（B）日数を求める。人数は石材の重量の比較、日数は距離の比較によって求められる。

（A）人数の復元

①石材の重量の比較

昭忠碑は約3.16 t、興原古墳の天井石は約8.63 tであり、重量は凡そ2.7倍である。

②修羅について

昭忠碑の運搬に使用されたキンマと呼ばれる修羅は、長さ3.37m、幅0.94mで、1930年に「三山碑」と呼ばれる石造物の運搬にも使われている（一瀬1999・2023）。三山碑の大きさは高さ2.51m、幅1.45mである。一方興原古墳の石材は、幅2.96m、奥行き1.47mであり、両者の大きさはほぼ同じである。よって、興原古墳の石材の運搬にはキンマと同じか、やや大きいくらいの修羅を使用したと仮定できる。

③傾斜の比較

図12、14と表3の通り、昭忠碑の運搬では峰越しがあるため、上り下りがある。それに対し、興原古墳の運搬は下りが中心である。下り坂においては、引き手の必要人数が減りそうに思えるが、後ろから綱を引く人数が増加するため、総数はあまり変わらないという（近つ飛鳥博物館1999）。このため、傾斜の違いは運搬人数の推定に大きく影響しないと判断される。

④コロについて

昭忠碑の運搬に使用された「バンギ」は、雑木の細い幹や枝で、布を巻いたり油を塗ったりして滑りを良くしたコロである（一瀬1999・2023）。成形木コロの方が、雑木コロ（バンギ）よりも摩擦が低い（図24）、運搬ルートの7割を下りが占める興原古墳においては、コントロールが難しく危険が伴うと想定される（註3）。そのため、興原古墳の運搬でも雑木コロが用いられたと仮定する。

以上①～④をまとめると、興原古墳との比較においては②～④は石材の運搬人数の推定に大きく影響しないと考えられるので、興原古墳の石材運搬に必要な人数は昭忠碑と興原古墳の石材の重量比から求められる。昭忠碑を運搬する人数は50人である（註4）ことが分かっている（一瀬1999・2023）。このため、興原古墳では昭忠碑の凡そ2.7倍である135人が運搬に携わっていると算出される（表4）。

(B) 日数の復元

⑤ 距離の比較

昭忠碑の運搬距離は 1.3 km であり、興原古墳の石材運搬距離は 1.1km である(表 2)。このことから興原古墳の石材運搬距離は、昭忠碑の運搬距離の 85% である。昭忠碑の運搬にかかった日数は 6 日間であったことが分かっている(一瀬 1999・2023)。必要日数は運搬距離に比例すると仮定することができ、興原古墳の運搬日数は $6 \text{日} \times 0.85 = 5.1 \div 5$ 日間を要したと推定される。

VII 考察

以上の分析から、石材運搬ルートと運搬の規模(人数と日数)が復元できた。その結果から、以下のことについて考えてみたい。

① 石材の運搬ルートと現代の道との関係

興原古墳における石材の運搬ルートを復元したところ、現代の道とほぼ重なるという結果が得られた。このことは、沓岐の他の古墳の石材の運搬ルートを考えるときに手掛かりとなる重要な視点であると考えられる。

② ルートの周辺環境と作業の季節

今回の分析から、興原古墳玄門部の天井石一つを運ぶだけでも、135 人の人手と最低でも 5 日間の時間が必要なことがわかった。これほどの人員が作業をすることを考えると、作業の基地となる平坦な場所が必要となるだろう。ルートの選定は、そのような周辺地形も踏まえて行われたと考えられる。実際、今回復元したルートにおいても、現在集落地や畑として使用されている平坦地がある(図 15)。

また、多くの人員を動員するには、古墳築造以外の作業がない時期に行う必要があると考えられる。そのため、農作業がなく築造に集中できる農閑期に石材の運搬を行っていたといえるのではないか。また、雨の多い夏を避けることで、ぬかるみを避けるなど修羅を使って石材を運搬しやすい道を確保することができたのではないか。

VIII 今後の課題

本研究では明らかにできなかった以下の点を今後の研究の課題としたい。

- 残りの石材の重量や墳丘の土量を計算することで、興原古墳全体の築造に必要な人数や日数について詳しく検討したい。
- 実際に運搬に使用された修羅の大きさや重さについて現状では明らかにする方法がわからないため、今後他の民俗例についても調べてみたい。
- 興原古墳と周辺の集落遺跡(興原遺跡・興触遺跡・興触川上遺跡)との関係について検討し、興原古墳がどのような人たちによって作られたのか考えてみたい。
- 牛や馬は修羅の牽引には不向きであるが(近つ飛鳥博物館 1999)、その他の作業において、興原古墳の築造にどれくらい関わったのか調べてみたい。

興原古墳は、これまで沓岐の古墳の研究のなかで詳しい分析がなされたことがなかった。今後、以上のような課題について研究を進めると同時に、沓岐の古墳時代の歴史を学習し、興原古墳が沓岐の古墳時代において、どのように位置づけられるか、研究を進めていきたい。



図1 志岐島の位置



図3 修羅（近つ飛鳥博物館にて撮影）

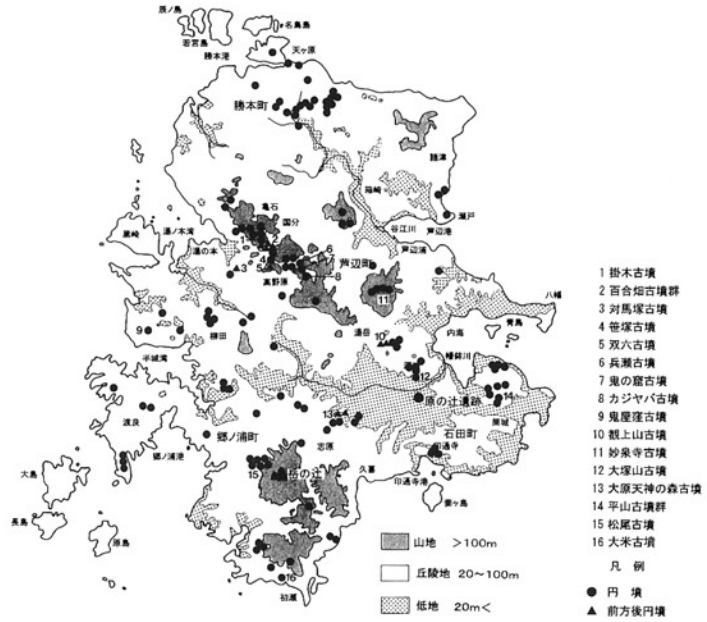


図2 志岐島の主要古墳分布図（志岐市教育委員会 2012）

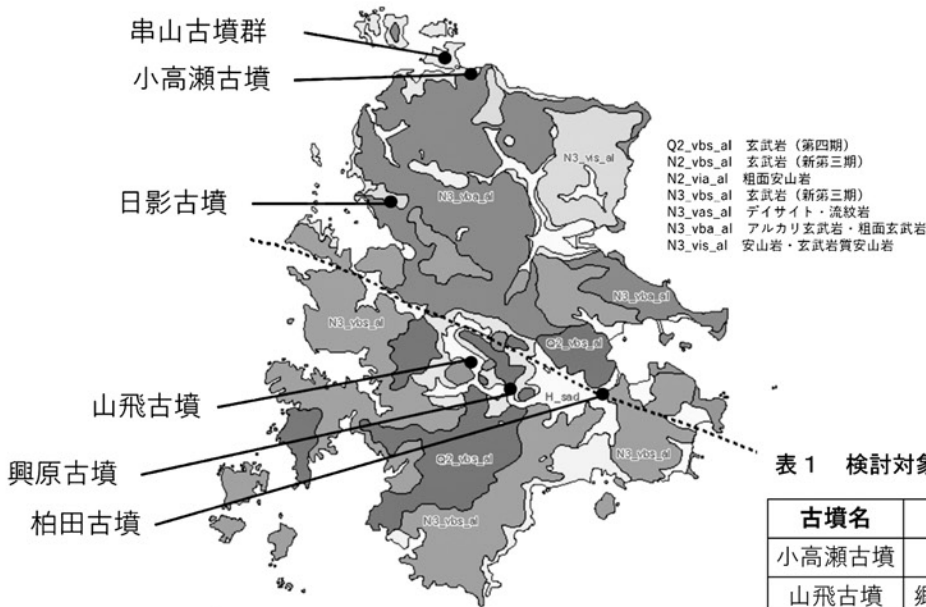


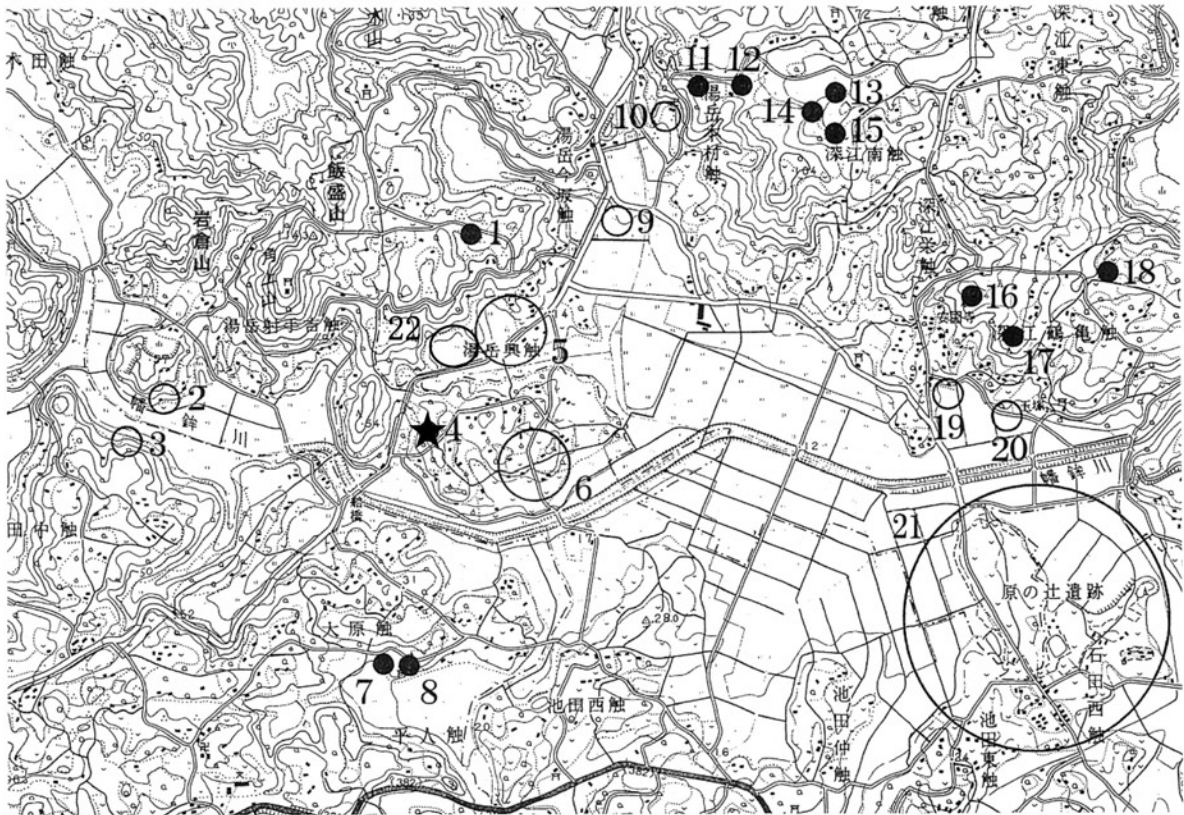
図4 志岐島の表層地質図と検討対象の古墳の分布
（産総研 日本シームレス地質図 V2 に加筆）

表1 検討対象の古墳の所在地・地質

古墳名	所在地	地質
小高瀬古墳	勝本町東触	砂岩・頁岩
山飛古墳	郷ノ浦町木田触	凝灰質砂岩
日影古墳	勝本町本宮南触	砂岩・頁岩
柏田古墳	石田町石田東触	礫・砂・泥
串山古墳群	勝本町東触	砂岩・頁岩



図5 表層地質図から地質を確認する様子



1. 久保頭古墳, 2. 朝日遺跡, 3. 峯岐ノ戸遺跡, 4. 興原古墳, 5. 興触遺跡, 6. 興原遺跡,
7. 大原天神の森1号墳, 8. 大原天神の森2号墳, 9. 親城跡, 10. 定光寺前遺跡, 11. 観上山1号墳,
12. 観上山2号墳, 13. 堂山1号墳, 14. 堂山2号墳, 15. 堂山3号墳, 16. 大塚山古墳, 17. 俵山古墳,
18. 鶴亀鬼屋古墳, 19. 安国寺前遺跡, 20. 関線遺跡, 21. 原の辻遺跡 22. 興触川上遺跡

図6 興原古墳周辺遺跡分布図（吉岐市教育委員会 2022 に加筆）



图7 興原古墳墳丘実測図 (石田町教育委員会 2003)

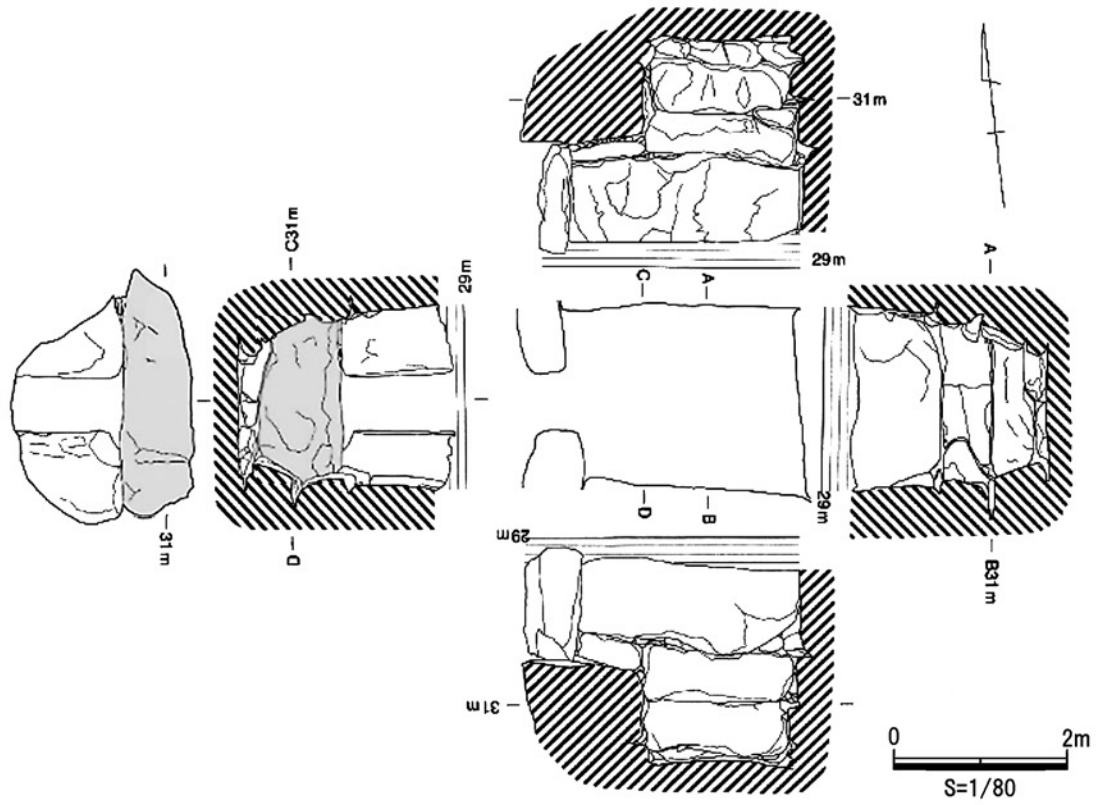


图8 興原古墳石室実測図 (石田町教育委員会 2003)



図9 興原古墳石室内部（沓崎市教育委員会提供）

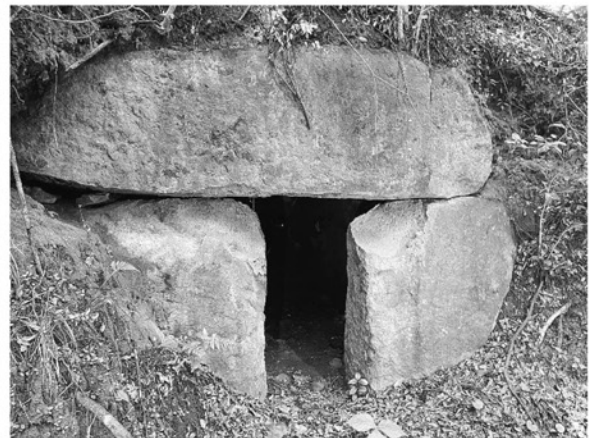


図10 興原古墳玄門

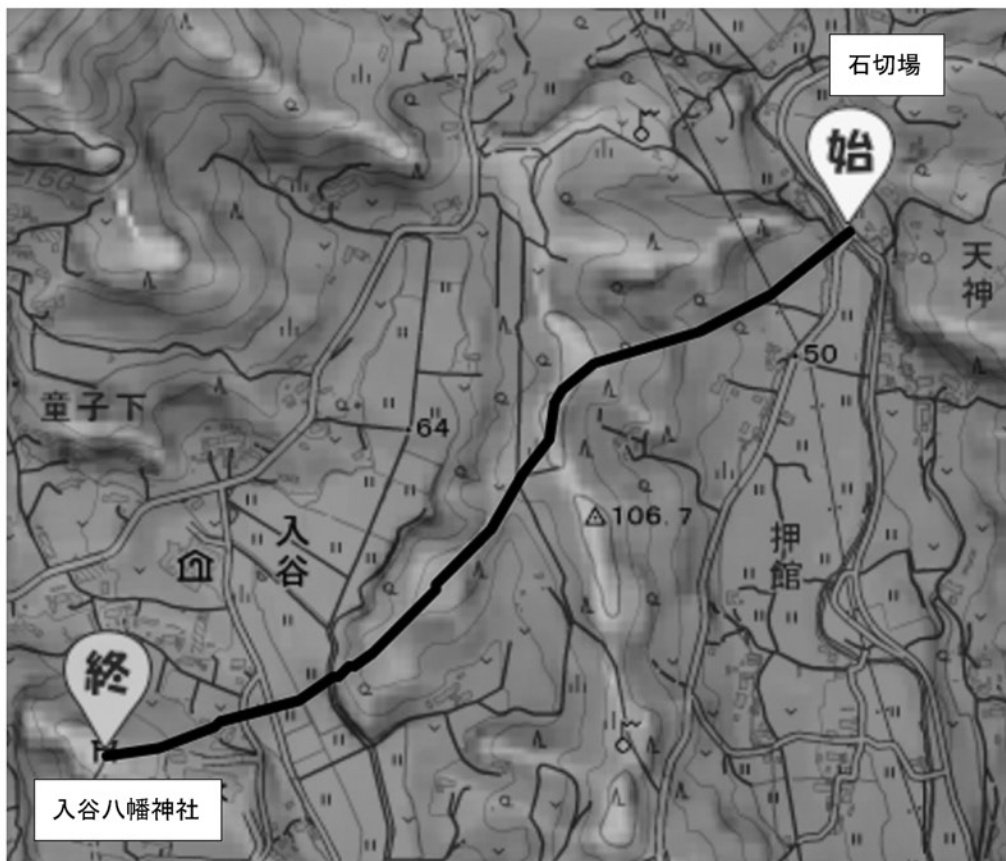


図11 昭忠碑運搬ルート復元案

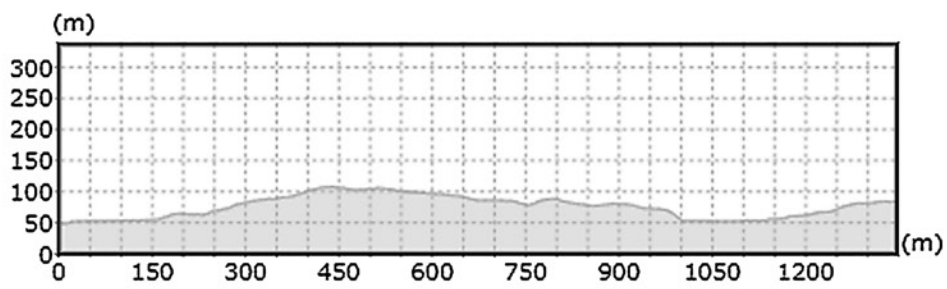


図12 入谷八幡神社昭忠碑運搬ルート復元案断面図

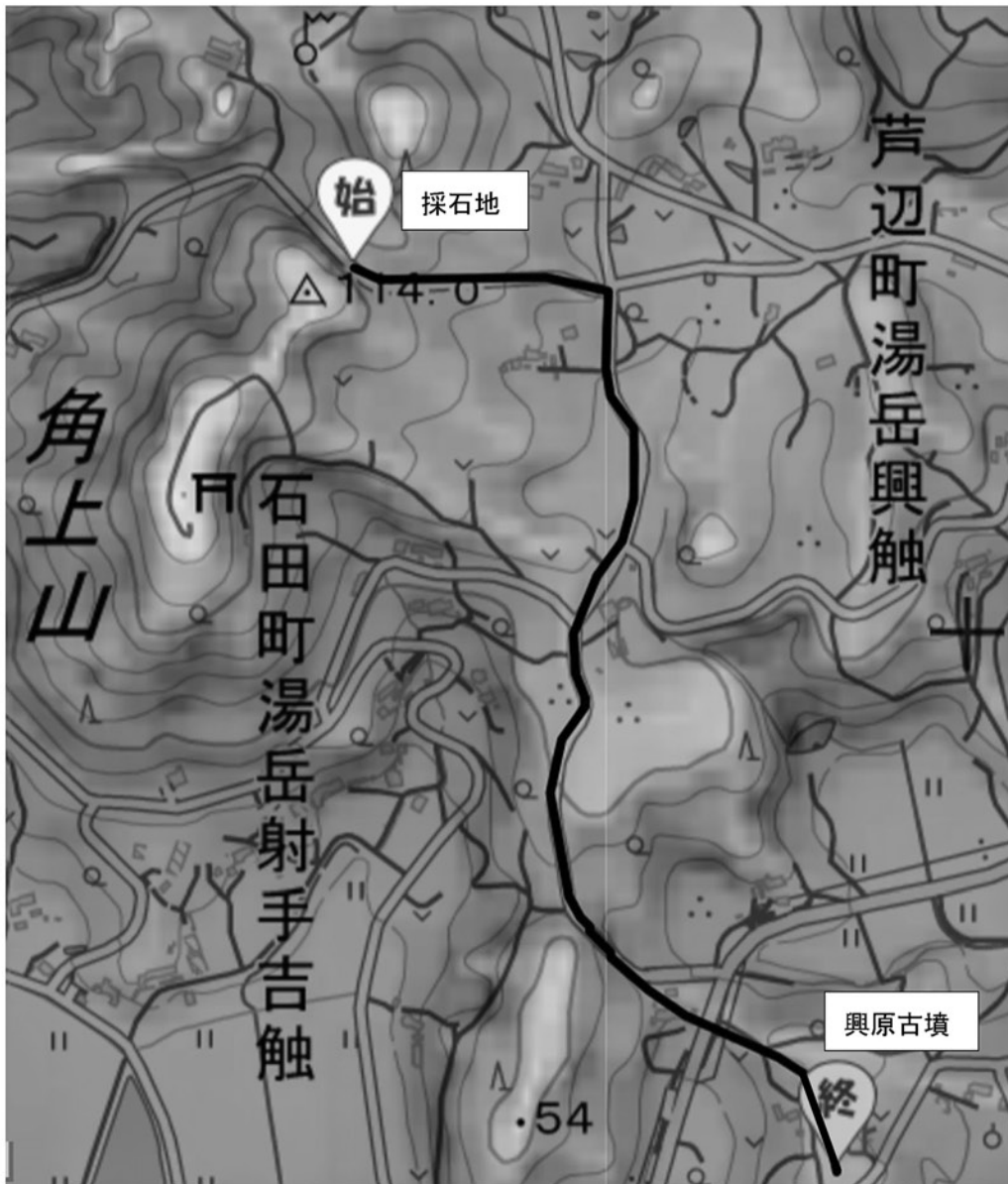


図13 興原古墳石材運搬ルート復元案

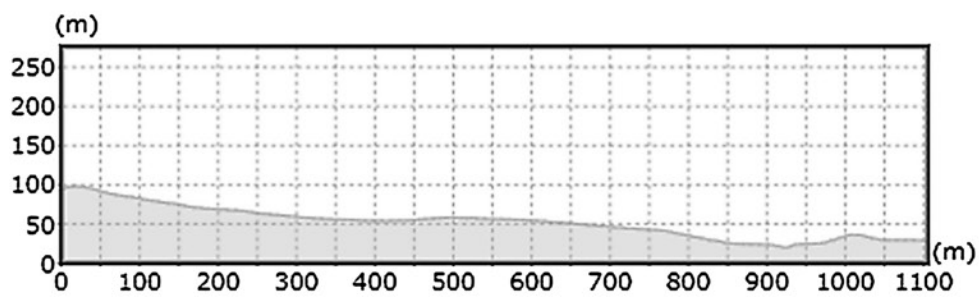


図14 興原古墳運搬ルート復元案断面図

表2 昭忠碑と興原古墳の分析結果の比較

	昭忠碑	興原古墳	評価
距離	1.3km	1.1km	昭忠碑の85%
傾斜	峰越 上り、下り	ほとんど下り	同一
石材の重量	2.8t	8.6t	約2.7倍
修羅の大きさ	3.7m×0.94m	同一	同一
コロ	雑木 (バンギ)	雑木	同一
人数	50人	135人	約2.7倍
日数	6日	約5日	85%

表3 運搬ルートでの傾斜の割合

	昭忠碑	興原古墳
上り	56%	18%
下り	40%	72%
平坦	4%	10%



図15 興原古墳石材運搬ルート復元案周辺地形図

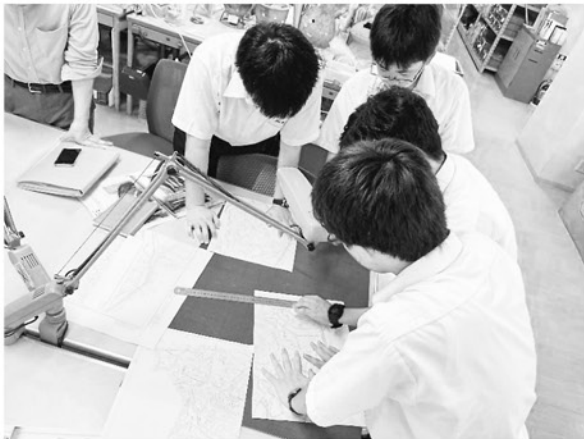


図 16 運搬ルート分析の様子



図 17 運搬ルートを実際に歩く様子



図 18 運搬ルートを実際に歩く様子2



図 19 運搬ルートを実際に歩く様子3



図 20 石材計測の様子



図 21 密度計測の様子



図 22 密度計測の様子 2

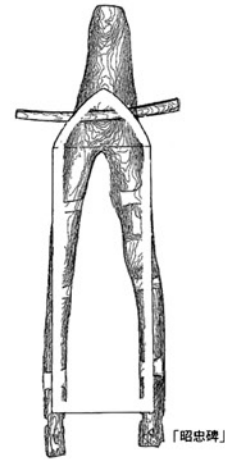


図 23 南三陸町の「キンマ」

実験日時 昭和53年 8月24日、25日
 実験場所 同志社大学田辺校地内道路用地
 まとめ 京大工学部助教授 太田秀樹

番号	重量 (t)	コロ	道板	距離 (m)	勾配	けん引力(t) (最大)	けん引力(t) (最小)	けん引力(t) (代表値)	換算人数 30kg/人	換算人数 50kg/人
1	4.00	なし	なし	50	0.6/100	2.6	1.0	2.2	87-33	52-20
2	4.00	雑木	なし	7	"	1.0	0.6	0.8	33-20	20-12
3	4.00	"	あり	5	"	0.5	-	0.5	17	10
4	11.85	なし	なし	40	"	6.8	6.0	6.5	227-200	136-120
5	11.85	雑木	あり	5	"	2.2	0.8	2.0	73-27	44-16
6	11.85	成形木	あり	-	"	1.0	0.6	0.8	33-20	20-12
7	35.40	"	あり	20	"	2.8	1.2	2.0	93-40	56-24
8	35.40	"	あり	5	5/100	(1.0)	(0.0)	自走		
9	35.40	雑木	なし	5	"	7.0	2.4	5.1	233-80	140-48
10	35.40	なし	なし	5	"	16.8	11.0	16.2	560-367	336-220

備考 人力牽引力 瞬間最大 40~55kg 定常 30kg
 「修羅」重量 大型 4000kg 小型 350kg

勾配の補正をした実験結果

番号	重量 (t)	コロ	道板	けん引力 (t) (最大)	けん引力 (t) (最小)	けん引力 (t) (代表値)
1	4.00	なし	なし	2.6	1.0	2.2
2	4.00	雑木	なし	1.0	0.6	0.8
3	4.00	"	あり	0.5	-	0.5
4	11.85	なし	なし	6.7	5.9	6.4
5	11.85	雑木	あり	2.1	0.7	1.9
6	11.85	成形木	あり	0.9	0.5	0.7
7	35.40	"	あり	2.6	1.0	1.8
8	35.36	"	あり	(2.8)	(1.8)	自走
9	35.36	雑木	なし	8.8	4.2	6.9
10	35.36	なし	なし	18.6	12.8	18.0

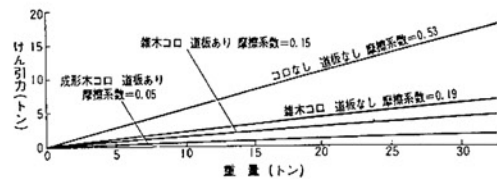


図 24 修羅の牽引実験結果 (近つ飛鳥博物館 1999 より転載)

表 4 修羅の牽引要員の内訳 (単位: 人)

内訳	昭忠碑	興原古墳
音頭を取る人	1	1
引く人	20	54
交代要員 (推定値)	20	54
その他 (コロを移動させる人, テコ棒で舵取りをする人)	9	25

註

- (1) ここで用いる「コロ」とは、丸太などの成形木に加え、雑木を下に敷くことで摩擦を軽減するものも含む。
- (2) 現在は間に県道が走っているが、地形から本来は繋がった尾根であったと考えられる。
- (3) 雑木コロ（パンギ）においても、サメ油を塗って滑りをよくした場合、畑の土手に三尺も突っ込んでしまったというエピソードが、昭忠碑の運搬の逸話として残る。雑木コロに比べ、摩擦力の低い成形木コロにおいては、コントロールがさらに難しくなると考えられる。
- (4) 50 人の内訳については、音頭を取る人が 1 名、綱を引く人が 20 名、交代要員が 20 名、その他コロを移動させる係、テコ棒を持った舵取り係を 9 名と推定した。なお、交代要員は綱を引く人数と同数必要であると仮定し、残りの人員をその他の人数とした。

【参考・引用文献】

- 浅野孝利 2022 「石棺・石室石材からみた古墳時代常総地域の流通」『筑波大学先史学・考古学研究』第 33 号 筑波大学人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学学術研究群人文学学位プログラム歴史・人類学サブプログラム
- 天野一男, 渡部潤一他 2021 『地学基礎』実教出版株式会社
- 壱岐市教育委員会 2008 『壱岐の古墳—壱岐島を代表する大型古墳—』
- 壱岐市教育委員会 2022 『車出遺跡群 1 次 (I 区・II 区)・久保頭古墳・双六古墳隣接地』壱岐市文化財調査報告書第 34 集
- 石田町教育委員会 2003 『石田町の古墳 原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第 7 集
- 一瀬和夫 1999 「キンマの残存とその石曳き伝承」『修羅！ その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ』平成 11 年度春季特別展大阪府立近つ飛鳥博物館図録 19 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 一瀬和夫 2023 『古墳を築く』吉川弘文館
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編 1999 『修羅！ その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ』平成 11 年度春季特別展大阪府立近つ飛鳥博物館図録 19
- 国土地理院, 地理院地図/GSI Maps, <https://maps.gsi.go.jp> (参照 2024-09-04)
- 産総研, 20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2, https://gbank.gsj.jp/seamless/v2/viewer/?base=CHIRIIN_BLANK¢er=33.7850%2C129.7061&z=12&opacity=1&subtype=ifs&target=cursor (参照 2024-09-04)

佳作ポスター

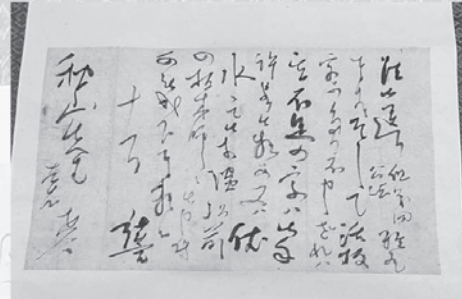
(高等学校等コード順に掲載)

意義 この研究は、幕末と明治の博物館蔵、「坂本龍馬手簡秋山宛」の宛先にあたる「秋山先生」に関し、考察、その人物を究明することにより、坂本龍馬研究のさらなる手掛かりを作ろうとするものである。

<坂本龍馬秋山某宛書簡とは>

<原文>

唯御送り但万国公法（原文折り返し）。難有
奉存候。そして活版
字がたり不申ざれば（原文ママ）、
其不足の字ハ御手
許より御頼か、又ハ伏
水にて御相談、以前
の版木師ニ御申付
可被成下奉願候。謹言。
十一日
秋山先生 才谷



「坂本龍馬 手紙（巻物）秋山先生宛
一巻」幕末と明治の博物館蔵 筆者撮影

左右

（宮地佐一郎『坂本龍馬全集 増補改訂版』東京
光風社 1980年 1018頁）

坂本龍馬直筆書簡の一つといわれている史料。大洗町幕末と明治の博物館蔵。前身の常陽明治記念館に初代館長の田中光顕が寄贈したといわれる（常陽明治記念館『常陽明治記念館創立五十周年記念館』参照）。

「秋山先生がどこの誰なのか不明」

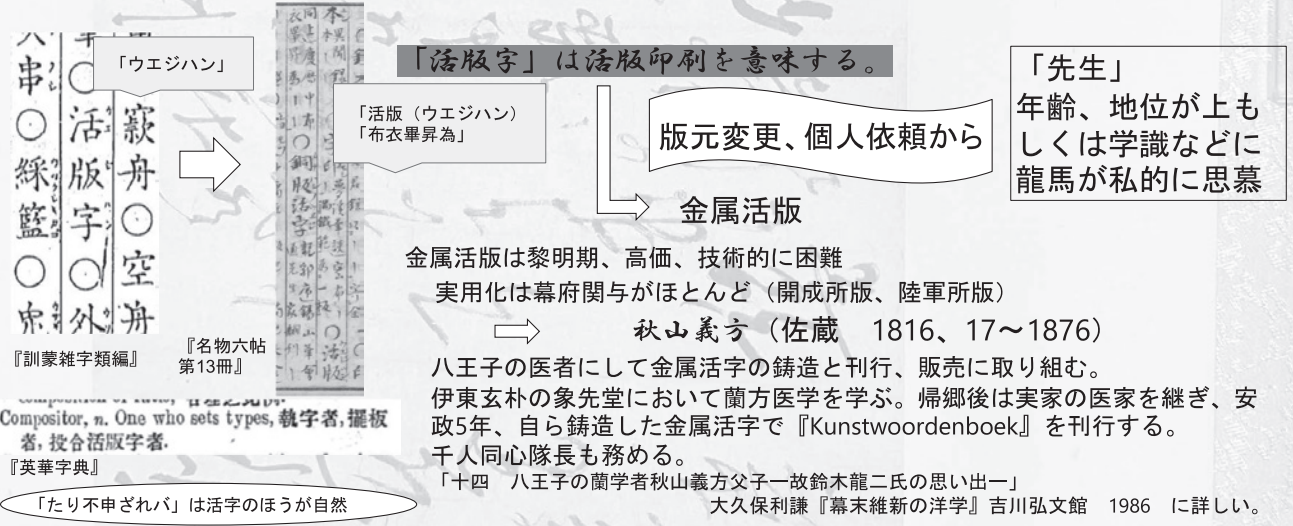
宮川禎一『坂本龍馬からの手紙』

従来は「才谷」（慶応3年1月3日久保松太郎宛初出）
の偽名に加え、「万国公法」に注目し、これをいろ
は丸事件後の談判において使用されたものとして
「十一日」を「慶応3年5月11日」と解釈。

<主題>秋山先生とはどのような人物なのか（「秋山先生」考）

<「坂本龍馬秋山某宛書簡」の実証>

「活版字」：「印刷」全体を指すとする説と「活字」または「活版印刷」を指すとする説がある。「秋山先生」の印刷業の形態を探る重要な手がかりとなる語句である。



<秋山義方と秋山先生>

- ・ほぼ唯一の、個人での金属活字刊行者。⇒脱藩者集団海援隊の依頼先として最適。
- ・秋山義方は龍馬の約30歳年上。⇒学識も含め「先生」と呼ばれる。
- ・千人同心にして医者で身分的・職業的束縛が少なく移動がより容易。
⇒「伏水」での打ち合わせも想定可能。
- ・強い蘭学者ネットワークの存在
（湊長安、伊東玄朴、高野長英らと）⇒蘭学者経由で海援隊士との面識が疑われる
つながりを示す書簡が現存する）

<結論>

「秋山先生」は金属活字の鑄造、
書籍刊行に取り組んだ秋山義方
である、と判断した。

<主要参考文献>

宮地佐一郎『坂本龍馬全集 増補改訂版』東京 光風社 1980年
宮川禎一『増補改訂版 全書簡現代語訳 坂本龍馬からの手紙』2014年
日本医史学会『中外医事新報』（1286）日本医史学会 1940年
「安政5年父が翻刻せる蘭文「経齊三方附醫戒」に就いて」秋山練造
秋山義方刊行 『Kunstwoordenboek』（後略）
早稲田大学図書館
古典籍総合データベース 文庫
08E0164



下野薬師寺の戒壇設置について 一氏寺からの官寺化として一

濱崎 孝則

世田谷学園高等学校

I 序論

761年、東大寺に加えて筑紫観世音寺・下野薬師寺に戒壇が置かれたことが記録に残っている。東大寺と筑紫観世音寺は平城京と大宰府という古代日本の中心都市にあったことから納得できたが、下野の地に戒壇が設置されたことに関して理由付けが納得することができなかった。よって、「なぜ下野薬師寺に戒壇が置かれたのか」を主題に研究を行うこととした。

II 下野薬師寺の起源

建立当初、下野薬師寺は下野一帯を支配していた下毛野朝臣氏の氏寺として下毛野朝臣古麻呂が建立したとする記録と、天武天皇の勅願寺であるという記録が確認されている。このことから、下野薬師寺は天武天皇の意向を汲み取った古麻呂が氏寺として下野の地に建立した寺院を始まりとしている、と考えられている。

III 下毛野氏の活躍

先述の下毛野朝臣氏は時代を遡ると下毛野君氏とも呼ばれている。「君」とは大野の後裔にあたる地方豪族に対し、ヤマト政権が与えた姓である。実際、下毛野君氏は豊城命の末裔として記録されている。

こうした高い家柄の出身である古麻呂は藤原朝臣不比等ら中央貴族とともに700年の律令選定に参加し、702年、議政官に任じられた。その後、古麻呂は兵部卿や式部卿など中央機関の要職を歴任した後、709年に亡くなった。

下毛野氏が「朝臣」の姓を賜った時期、あるいは古麻呂が政権参加していった時期に、地方豪族から中央貴族化し、それに伴い下毛野朝臣氏の氏寺の機能も下野薬師寺から平城京にあった下野寺に移転した可能性が指摘されている。このことから、下野薬師寺の官寺化は、下野薬師寺の氏寺としての機能が空洞化したことに起因するものと考えられる。

IV 官寺の拡大

天武朝以前の仏教は氏寺といった形式で氏族ごとに受容されていた一方、天武朝以降、仏教は官寺の造営を通じて国家的な推進を受けていたとされている。よって、下野薬師寺が官寺化された経緯を、当時の官寺の拡大を政治の流れから読み解いていくことにする。古麻呂が活躍した律令撰定から戒壇設置までの政権の大半で官寺の拡大が確認されている。

奈良時代初頭の藤原朝臣不比等政権では平城京遷都にあわせて、蘇我氏の氏寺を源流とする元興寺などの有力寺院が移転され官寺として造営された。

続く長屋王政権は藤原四子の一人である藤原武智麻呂と協調し、東北の蝦夷や九州の隼人の統制を強化していた。須田勉氏によると、長屋王政権において仏教が地方支配に利用され、下野薬師寺の官寺化が長屋王政権の地方支配政策によるものではないかと指摘し、官寺化の年代を722年と推定している。720年に、藤原氏の氏寺を源流とする興福寺に造興福寺仏殿司という令外官がおかれたのを筆頭に氏寺の官寺化が進んでおり、氏寺の官寺化は藤原武智麻呂が主導した可能性が高いと須田勉氏は指摘している。

続く橘諸兄政権は、聖武天皇の意向を受け「国分寺建立の詔」(741)を發布した。また、「龜田永年私財法」(743)に基づき同政権は749年、官寺に寺別の墓田を割り当てている。

恵美押勝政権は、761年に九州の筑紫観世音寺と東国の下野薬師寺に戒壇院を置いている。

V 下野薬師寺の格付け

龜田永年私財法は墓田の永久私有を認める一方で、位階に応じて所有面積を制限した。寺院も同様に、749年に寺別墓田の割り当てが実施されている。よって、寺別墓田の規模から各寺院の格付けを推測できる。

整理：続日本紀一天平勝宝元(749)年七月乙未条「寺別墓田」

- ・四千町＝東大寺　・二千町＝元興寺※①
 - ・一千町＝大安寺/薬師寺/興福寺※①/法華寺/国分寺※②
 - ・五百町＝弘福寺/法隆寺※①/四天王寺/崇福寺/新薬師寺/建興寺/下野薬師寺※①②/筑紫観世音寺※②
 - ・四百町＝国分尼寺※②　・一百町＝定額寺(その他の官寺)※②
- ※①：氏寺の流れを主に汲む官寺※②：地方に存在していた官寺

律令撰定に参加し、議政官に名を連ねた人物は朝臣の姓をもつ藤原氏、粟田氏、下毛野氏の三氏のみで、粟田氏の氏寺は確認されていない。このことから、藤原氏と下毛野氏の氏寺が元興寺などと同様に官寺化され、そして寺院として非常に高い格付けを得ていたと言える。

また、地方寺院で国分寺・国分尼寺・定額寺以外で寺別墓田が与えられている寺院は、後に戒壇院が設置される下野薬師寺と筑紫観世音寺のみである。筑紫観世音寺は723年と745年にそれぞれ令外官である「造筑紫観世音寺別当」が派遣されていることから、造営の時期が先述の長屋王政権の地方支配政策や橘諸兄政権の仏教政策と重なる。同時期の738年、「下野国造薬師寺工」が同様に赴任している。加えて749年には、寺別墓田を平城京の寺院と同規模に割り当てられていることから、東国で最も有力の官寺として整備が進められていたことが読み取れる。なお、造寺工は中央の官寺でも一部でしか設置されない令外官であり、地方における下野薬師寺が中央における大寺院と同格の影響力を持っていたことが分かる。

VI 戒壇設置の意図

長屋王政権以降、地方政策の一つとして、筑紫観世音寺や下野薬師寺の造営が行われたと推定すると、戒壇の設置に関して何らかの恣意性があったと考えるのが妥当である。三戒壇のそれぞれの対象地域や信仰対象などを調べると以下の表のようになる。このことから、少なくとも仏教政策において下野地域は東国の中心地と見られていたと考えられる。

表「戒壇が置かれた各寺院の特徴」

	所在地	信仰対象	寺別墓田	対象地域
東大寺	平城京	金光明最勝王経	四千町	中部～中四国
筑紫観世音寺	大宰府	護国観音信仰	五百町	九州
下野薬師寺	下野国	薬師信仰	五百町	東国

東北地方で古くから要衝とされる「白河関」は律令体制において東山道の関で、現在の栃木県と福島県の県境部に存在し、東北地方の手に位置する対蝦夷最前線の地が下野であったことが確認できる。実際に、下野薬師寺が生命の安泰を願う薬師信仰を行っているのは、蝦夷に出兵する兵士の安全を願ったものだと、とする指摘がある。

同じく大宰府は7世紀から対中華の最前線基地として「遠の朝廷」「西の朝廷」とよばれ、強力な自治権を行使しており、護国的観音信仰に基づいた筑紫観世音寺が整備されていった一連の流れが見られる。下野薬師寺と筑紫観世音寺は軍事的側面と、仏教による自治を目指した政権の意図があったと考えられる。

また、東大寺は全国に先駆けて戒壇が置かれていた。東大寺は総国分寺として政権から保護を受けつつ、經典研究を行い、仏教界での影響力が極めて高かった。国分寺は經典を信仰する寺院であり、全国の仏教を管理できる立場であった。

こうした観点から、三戒壇は宗教的のみならず軍事的にも政権の地方政策の方針を反映し設置されたものである、と須田勉氏は指摘している。

VII 下野の地理

下野地域は畿内から白河の関を経由し東北に至る東山道の対蝦夷最前線であった。東山道には下野国足利駅と上野国新田駅から武蔵国府付近の東海道に接続する「東山道武蔵路」がある。つまり、古代東国において上野国や下野国という古くは「毛野」と呼ばれた地域が高い交通の利便性を持っていたのである。そうした中で、下野薬師寺や下野国府・国分寺は東山道に接している。また、下野薬師寺が位置する地域には下毛野氏との関連を指摘される古墳が数多く見られ、地縁と関わりが深い氏寺文化の形跡と考えられるため下野薬師寺の起源を氏寺とする学説が有力視されている。

VIII 結論

今回の研究の主題として、戒壇が下野の地に置かれた理由を、下野国や下野薬師寺の事情から次のように整理した。一つ目に、氏寺であった下野薬師寺が官寺化し東国で最も有力の寺院となっていたこと。二つ目に、地方政策の軍事的・宗教的意図と下野薬師寺の状況が合致していたこと。三つ目に、東国の中で下野地域が高い交通の利便性を有していたこと。これらの三つの点から下野薬師寺が戒壇を設置する寺院として最適だったと言える。

当研究は、下毛野氏の氏族としての研究と、下野薬師寺の接続するものとなるよう意識したものである。下毛野古麻呂が有力であることに基づき氏寺からの官寺化を指摘したが、東国で下野薬師寺の他に、有力な寺院として、上野国の定額寺である「山王廃寺(放光寺)」などがあげられる。山王廃寺は上毛野君氏(のち上毛野朝臣氏)の氏寺とも考えられており、こうした他の東国の有力寺院と下野薬師寺との比較研究を通して下野薬師寺の特異性を明らかにすることが今後のさらなる研究の進展につながると考えている。

<主な資料・参考文献>

- ・『詳説日本史 日本史探究』山川出版社
- ・『詳説日本史図録』山川出版社
- ・南河内町史編さん委員会(1998)「南河内町史 通史編 古代・中世」
- ・南河内町教育委員会(2002)「ビジュアル 下野薬師寺一解説図録一」
- ・阿部昭(2011)「県史⑨栃木県の歴史」山川出版社
- ・水谷千秋(2022)「日本の豪族100 講談社現代新書」
- ・宝賀寿男(2011)「毛野氏—東国の雄族諸武家の源流(古代氏族の研究17)」青垣出版
- ・吉村武彦(2019)「シリーズ古代史をひらく 古代寺院」岩波書店
- ・吉村武彦(2022)「シリーズ地域の古代日本 東国と信越」角川選書
- ・須田勉(2012)「シリーズ遺跡を学ぶ 古代東国仏教の中心寺院・下野薬師寺」新泉社
- ・須田勉(2003)「初期長屋王政権の対地方政策に関する検討」日本考古学第15号、57-93
- ・相原嘉之(2021)「国家寺院の誕生と展開」奈良大学紀要50号、33-50
- ・関口静雄/松本麻美(2010)「下野薬師寺別院龍興寺蔵『龍興寺戒壇縁起』翻刻と解題」學苑40、51-63
- ・平岡定海(1984)「筑前國観世音寺の構造とその性格について」大手前女子大学論集第18号、43-82
- ・前橋市教育委員会文化財保護課(2012)「山王廃寺平成22年度調査報告」山王廃寺範囲内容確認調査報告書5
- ・國學院大學『古典文化学』事業「氏族データベース」koiki.kokugakuin.ac.jp

富士郡における士族の地方行政進出 —沼津勤番組員を中心に—

渡邊 正太郎
静岡県立富士高等学校

1) はじめに

明治維新により、江戸幕府は瓦解して徳川家には明治新政府より処分が下された。慶応4（1868）年5月には徳川家が駿河国へ転封されることが決定し、駿河府中藩（翌年静岡藩に改称）が成立。数千に及ぶといわれた幕臣が、徳川家にしたがって駿河国全体に移住、土着した。これが移住士族である。今回研究対象とした富士郡もこの例外ではなく、明治初年に大宮町万野原新田（現富士宮市）に用意された一大開墾地をはじめとして、富士郡各地に士族が移住している。移住士族らは地方行政に進出していくこととなるが、ここではその過程を明らかにしていく。

2) 士族の富士郡への移住過程

まずは本題に入る前に、富士郡への士族の移住過程をみていく。移住士族の形成した富士郡で最大の開墾地が大宮町万野原新田であり、土族授産の政策に基づいて移住士族のための開墾地が用意された。用地の区割りや移住士族の居宅となる長屋の建設などを経て、明治2（1869）年には万野原新田への士族の入植が開始された。

万野原新田にはおよそ300戸ほどが居住したといわれるが、士族は農業に不慣れで、さらに平民と同じ扱いを受けることに抵抗を覚える者も少なくなかった。そのため他地域に転出したり、農業から地方行政官や教師・巡査へ転職したりする者が相次いで士族の人口は急減した。

静岡県庁沼津出張所からの布達によれば、明治5（1872）年時点で富士郡には363名の士族が居住しており、その内の102名は万野原新田以外の地区に居住していた【図1】。

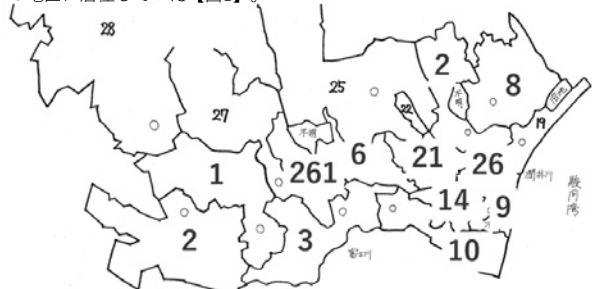


図1 富士郡各地区の士族居住人数(赤字)
士族人口引渡につき戸長へ出張依頼(1872、『沼津市史 史料編 近代1』所収)より筆者作成

移住士族たちは静岡藩の家臣となったが、その全員が藩の役職に就くことはできなかった。富士郡や東隣の駿東郡には仕事のない移住士族の中でも特に旧幕府陸軍関係者が集中していたため「陸軍生育方」が組織され、その御用掛は万野原新田などの開墾地を用意している。これが明治2（1869）年に他地域と同様に「勤番組」となり、富士郡や駿東郡に居住していた士族は「沼津勤番組」に管轄されることとなった。

当時の移住士族の姿は、富士宮市立郷土資料館の所蔵する「東町池谷本家文書」中にみられる。それは万野原新田と現在の富士市西部に移住していた一部の士族を除く富士郡の士族を管轄していた「厚原村役所」沼津勤番組十九番類世話役頭取の加藤栄三より明治3（1870）年11月に大宮町近辺の士族が移住していた諸村に送達された達書である。

「勤番組の者が富士郡に移住するにあたり、『不法之所行』を憂慮しているで、別紙の者たちを『見廻』させることにした。また、もしこのような者たちがいたら別紙の勤番組の連絡先に通報するように。」という内容であった。達書の別紙に記された勤番組員は移住士族の中でも主要な者たちで、後に地方行政進出の主力となる。達書中の「厚原村役所」では勤番組に所属した士族を管轄して士族行政が行なわれていた。

加藤栄三が達書を送達した同年の明治3（1870）年、沼津勤番組十九番類は十八番類に改められ、十八番類の世話役として矢田半平が追加される。さらに翌年2月には加藤の後任として平野雄三郎が十八番類世話役頭取に就任。また、この頃には沼津勤番組の西隣である小島勤番組の管轄より、富士郡にあたる士族40名が沼津勤番組の管轄となった。

厚原村役所が士族行政の中心であったとしたのは「幕臣平野雄三郎家文書」（沼津市明治史料館所蔵）によるところが大きい。文書群の中には移住士族からの届出願書等をはじめとする士族に関する行政文書が残っている。この文書群の先行研究には、樋口雄彦氏による「小普請の軍事的再編と静岡藩勤番組への帰着」（2006年）が挙げられる。

3) 地方行政への進出

明治5（1872）年1月、静岡県より戸籍法に基づき県下を81の戸籍区に分けること、さらに勤番組を廃止することが布達された。この時に各区の管轄を示した「駿河国區画則」という別冊が添えられたが、管轄には各村名に加え「土族屋敷」とわざわざ記されている。

戸籍区の長である戸長や副戸長は、布達時点では平民出身の名主が任命されていたが、その翌年には士族が集住する地区においては戸長が士族出身者に任命し直されている。その過程が明らかでない史料が「戸長副戸長人名録」【図2】であり、名簿には補筆された痕跡がみられる。

戸籍区	戸長・副戸長名	士族人数
第貳拾区	副戸長 吉原宿名主 野口泰藏 2	17
	副戸長 依田原新田名主 栢森孝兵衛 3	
	戸長 土族 古矢鉄五郎 1	
第廿三区	副戸長 伝法村名主 伊達五三九	26
	副戸長 同 望月順平	
	戸長 土族 矢田半平	
第廿四区	戸長 天間村長百姓 〇鈴木唯四郎	26
	副戸長 東久沢村百姓 室伏藤次郎 2	
	戸長 土族 渡辺義三 1	
第廿六区	副戸長 大宮町 池谷原三郎 2	262
	副戸長 大宮町 池谷繁太郎 3	
	副戸長 大宮町名主 佐藤茂三郎 4	
	戸長 土族 小西敬之 1	

図2 「戸長副戸長人名録」部分（黒の補筆部分は青で示した）

東町池谷本家文書26-1-2-1「戸長副戸長人名録」（1872年、富士宮市立郷土資料館所蔵）より筆者作成

このような事態になった理由としては、戸長職を平民が忌避・敬遠していたということが挙げられる。これを示す史料には「土族居住地に関し駿東・富士郡戸長御免願」（『沼津市史 史料編 近代1』所収）があるが、その内容は「富士郡・駿東郡の内、土族の集住地の地区の戸長らは自分の管轄であると分かって非常に驚き、扱いに困り許容し難いので戸長職を辞退したい。」というものであった。士族が前掲の加藤栄三達書にみられるような状況であったならば、平民が土族を管轄することを敬遠することは当然である。このため、戸長職には士族出身者が就任して平民戸長が副戸長に退いたのである。

このため、結果的に富士郡や駿東郡においては、戸長職に士族出身者が就任したことが契機となって士族出身者の行政への進出が本格化し、行政の主導権が士族へ移っていくこととなった。

ここで注意すべき点は、当時の戸長・副戸長は村方行政の全般を担ったのではなく、戸籍編成の事務のみを担っていたことである。従来の村方行政は名主が担っていたため、士族出身者の戸長への抵抗感が薄かったのである。明治6（1873）年には戸長・副戸長は廃止され、名主が戸長に改称されて業務が一統化されたことにより村方行政から士族は結果的に排除されることとなったが、県と村方の間の中間統治機構として設けられた「戸籍調所」の管理職は士族がそのすべてを占めた。その後戸籍区制から発展して大区小区制が成立するが、この時中間統治機構である富士郡の行政の長であった第二大区長は士族が務めており、富士郡の士族は郡レベルの行政に進出していくこととなる。

士族が富士郡の行政のみならず村方行政に再度進出する契機となったのは、戸籍区から発展した地方行政制度である大区小区制が廃止されることとなった明治12（1879）年の郡区町村編制法の施行であった。この頃から士族出身者の戸長が散見されるようになるが、明治17（1884）年の郡区町村編制法の改正によって士族戸長が相次いで誕生する。

村方に士族戸長が誕生した背景には、静岡県においては特例的に戸長の選出方法が民選より完全な官選へ移行されたことが大きい。戸長の行政的な側面を強めるため、土地に執着がなく、さらには学問を修めていたことで実務処理能力の高かった士族を戸長に任命する事例が相次いだ。一戸長役場の管轄区域が拡大されたことで、地元の利害関係にとらわれない人材が必要であったのである。旧名主層をはじめとする地元の有力者は、「用掛」として士族戸長の補佐にあたった。

明治22（1889）年に町村制が施行され、郡区町村編制法下の戸長役場の管轄をもとに新町村が誕生した。この頃にはすでに、富士郡に移住した士族は上京するなどしてその影響力は削がれていき、士族から行政官が輩出されなくなっていくが、それでも大正期までは村長や助役、収入役に士族出身者がみられた。つまり、富士郡の行政については士族が中心となり、平民が補佐するという構図が20年近く続いたことになる。

4) おわりに

ここでは、富士郡における士族の移住過程とそれに伴って沼津勤番組が展開した士族行政、移住士族の地方行政への進出の過程を研究した。四民平等に基づいた戸籍法の施行は地方行政の一大転換点となったが、平民による行政が展開されていた村方に、士族が移住したことによって、富士郡などにおいては実際に戸籍法が人々に根付くまでに非常に長い時間を要したことが明らかになった。また、これによる余波で現在に至るまでの地方行政の礎を旧慣の象徴的存在であった旧幕臣の士族が築き上げたということは特筆すべきことであると考える。

主な参考文献

- ・樋口雄彦「小普請の軍事的再編と静岡藩勤番組への帰着」（2006年）
- ・沼津市『沼津市史 史料編 近代1』（1997年）
- ・原口清『明治前期地方政治史研究 上』（1972年）
- ・富士宮市『富士宮市史 下巻』（1986年）

人と道と道の関係性

～東海道、姫街道、そして犬くぐり道などからの考察～

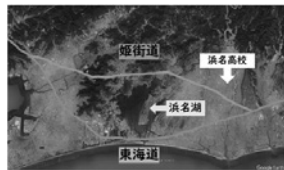
加藤大雅・馬淵太一
静岡県立浜名高等学校史学部

I 本研究の目的と方法

研究の目的は、私たちが住む静岡県浜松市の浜名湖周辺地域にある先人たちが通った道に着目し、「人と道と道の関係性」を明らかにすることである。すなわち、「ある場所で分岐し、再び合流する二つの道と、それらのどちらかを選択して通る人」という「人」と「道A」と「道B」の三者の関係性である(第1図)。動機は、私たちが通う浜名高校の近くに東海道と姫街道という二つの街道が並行していることに興味を持ったことである(第2図)。またこの二街道以外にも、この地域には東西に通る興味深い道が複数あると分かり、それらの道も研究対象とした。人や物の流通が盛んであったと思われる江戸時代を研究対象の時代とし、「東海道」と「姫街道」に限定した議論から発展させ、「人と道と道の関係性」という一般論について考察することにした。



第1図 人と道と道の関係性



第2図 両街道の位置
(Google Earthより引用して加工)

II 東海道と姫街道

東海道は江戸時代に整備された京都と江戸をつなぐ五街道の一つであり、姫街道は、いにしへの奈良時代に遠江の国府と三河の国府をつなぎ、現在も浜名湖の北を通る街道である。本章では、東海道と姫街道を取り巻く、「人と道と道の関係性」について考察する。

A 人と東海道と姫街道の関係性

江戸時代に姫街道が東海道の代わりとして使われた例は三つほど見つけた。

一つ目は、宝永4(1707)年の地震が起きたときである。『新居町史 第一巻 通史編上』には、今切から新居宿一帯が大打撃を受け、東海道の通行が困難となったため、代わりに姫街道が使われたと記されている。

二つ目は、篤姫(13代将軍 徳川家定の正室)による姫街道通行である。『次世代に伝える姫街道』には、嘉永7(1853)年10月12日、篤姫が東海道を避け、姫街道を通ったことが記されている。そこまでして姫街道を通りたかった理由は、東海道にある今切の渡しを避けるためだとされている。「今切」という言葉は、「今、(縁が)切れる」と、縁起の悪い言葉と言われている。また、長時間の乗船はストレスになりかねない。

三つ目は、象による姫街道通行である。『細江町史 通史編中』の中には、享保14(1729)年、象が東海道の今切の渡しを避けて姫街道を通ったことが記されている。その際に通った坂が急で、象が鳴いたことから、その坂は象鳴き坂と呼ばれるようになったのである。

以上より、両街道の関係性について、姫街道は東海道が使えないときの抜け道であると考察できる。

B 街道の抜け道と関所破り

前項の三つは正規の方法での通行であったが、「関所破り」といって、関所を違法に避ける方法も見つかった。ここでは、浜名湖の南北にあり、当時特に厳しかったとされる東海道の新居関所と姫街道の気賀関所の両関所に着目して考えていく。関所破りをした理由として、関所の取り締まりが厳しかったことや、関所の通行の際に必要な手形の発行が、女性は特に時間がかかったことが挙げられる。関所の抜け道の存在は三つほど判明した。

一つ目は、海(遠州灘)を通る方法である。文政12(1829)年、長崎の男女がこの方法で、新居関所を避けて、舞阪宿へ行ったことが『新居町史 第一巻 通史編上』に記されている。

二つ目は、浜名湖(三ヶ日、呉松)を通る方法である。『豊田町誌資料編 II』には、嘉永4(1851)年に小笠郡大東町の男性が、『西遊草』という旅人の清河八郎の手記には、安政2(1855)年に彼がこの方法で気賀関所を避けたことが記されている。清河は女連れで、先に書いたように旅には不利であった。協力者の船頭と旅籠屋はそれをいいことに、呉松までの二、三里ほどの距離を五里と偽り、清河に一分という当時にしては大金を支払わせたそうだ。

三つ目は、賄賂を使う方法である。『西遊草』には、宿の主人と関所の役人が親しい関係だったとき、主人が役人に心付け(お礼のお金)を渡すと、その宿に泊まる旅人は容易に通行できたと記されている。おそらく、早朝にこっそり通されたのだろう。

III 研究を進めていくに見つけたさらなる道と人との関係性

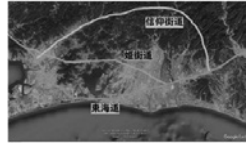
さらに調査を進めていくと、2つの抜け道を見つけることができた。「信仰街道」と呼ばれる道と、「犬くぐり道」と呼ばれる獣道のような小道である。

A 信仰と道の関係性

「信仰街道」は、姫街道の北側の山奥にこのような道が東西に通っていることが分かった(第3図)。調べていくと、道と信仰の関係性が分かってきた。『歩く江戸の旅人たち-スポーツ史から見たおかげ参り-』(谷釜 2020)には江戸の中期から後期にかけて、手形に行き先の寺社の名前を書く慣例があったと記されている。御利益に定評のある寺社への参詣が目的の場合は幕府の了承を得やすかったそうだ。そのため、信仰を建前に、道中の異文化に触れて楽しむことを目的とする者もいたようである。

B 犬くぐり道

フィールドワークで気賀地区を歩いていたら、犬くぐり道を発見した。私たちが実際に歩いた犬くぐり道を歩いてみたが、草をかき分けたような道であり、もはや、普通なら人が通ることが考えもつかない道なき道、獣道に思えた。いったん開けた場所に出た時は、いかにも「抜けている」という感じがした。後日調べてみた所、二つの資料より以下のことが分かった。まず、『細江町史 資料編3』には、この道は犬のまねをして通ることで、第4図のように、厳しい気賀関所を避けることができたことと記されていた。また、『細江町史 通史編中』には、地元の百姓が畑を通るのに関所の門限が早く、困っていたことを察した領主が、犬が通るような獣道を作ったことが記されている。以上より私たちは、「通る際は犬となれば、人の法は適用しなくてもよいと都合良く解釈して、役人も見て見ぬふりをしていた」と結論づけた。



第3図 信仰街道の位置
(Google Earthより引用して加工)



第4図 犬くぐり道の位置
(Google Mapより引用して加工)

IV まとめ

調査より、「人と道と道の関係性」は次の四つにまとめることができる。

一つ目は、進む先が困難な場合に別の道を通るケースである(第5図参照)。宝永地震、篤姫や象が通行した際の姫街道がこれにあたる(II章のA)。

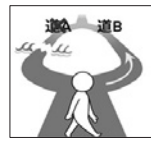
二つ目は、抜け道を作るケースである(第6図参照)。海や浜名湖を利用した関所破りが該当する(II章のB)。

三つ目は、ある道を通して貰うのが難しいとき、建前を使うケースである(第7図参照)。寺社への参詣を建前に使う抜け参りがこの例である(III章のA)。

四つ目は、発想の転換で通ってはいけない道を通れることにしてしまうケースである(第8図参照)。犬くぐり道は「通るとき自分は犬だ」「人の法は通用しない」という解釈のおかげで抜けることができたと思われる(III章のB)。

近現代でも抜け道というものは見られる。東名高速道路には新東名高速道路、旧国道1号線には現在の国道1号線とそのバイパスといったように、渋滞対策の道がそれぞれある。また、浜名湖の北側を走る天竜浜名湖線は戦時中、東海線線のバイパスに使われていたとされている。現代の高校生であれば、通学路の工事に備えて別の道を考えている、というのがいい例だろう(第9図参照)。

以上のことから、この研究で得られる「人と道と道の関係性」とは、「ある道を通れないとき、他に道があるならそちらを選んで通り、また、他に道がなければ作ってそこを通る」となる(第10図参照)。この研究から、「道は必ずある」という教訓が得られる。この教訓を胸に人生という道を行んでいきたい。



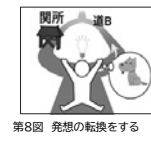
第5図 進む先が困難な場合に別の道を作る



第6図 抜け道を作る



第7図 建前を使う



第8図 発想の転換をする



第9図 高校生の例



第10図 人と道と道の関係性

(参考文献)
・ 浜松市史編さん委員会『浜松町史 通史編中』2000,295, 303, 331頁
・ 静岡県立浜松大学『国史研究 資料編 II』1983,57頁
・ 新居町史編さん委員会『新居町史 第一巻 通史編上』1989,332-334, 568, 576, 625, 654, 665頁
・ 姫街道本気編編纂委員会『次世代に伝える姫街道』2019,42頁
・ 静岡県編さん委員会『静岡県史資料編 III』1991,449頁
・ 小山俊 第一部『西遊草』1969,373-374, 240頁
・ 谷釜 隆『歩く江戸の旅人たち-スポーツ史から見たおかげ参り-』2020
・ 引佐町教育委員会『引佐町史 第1巻 宮田日記并清水日記』1979,32頁

(引用サイト)
・ Google Earth: <https://www.google.com/maps/> (2024-10-29)
・ Google Map: <https://www.google.com/maps/> (2024-10-29)

大野集落や出津集落のキリシタンが禁教令下の長崎で発見されなかった理由について

～大村氏・深堀氏との関係性・歴史や地理的環境から読み解く～

長崎県立大村高等学校 文理探究科国際探究コース 前田英太郎

I はじめに

長崎県 2018年7月に潜伏キリシタン関連遺産に登録されている。大村高松周辺地域 戦国期に活躍したキリシタン大名の大村純忠が有名
～大村氏について～
・現在で言う大村氏、西海市、時津町、長与町 長崎・佐世保市の一部を支配下に置いた大名
・天正10年には天正遣欧使節を派遣
・大村氏はキリスト教の信仰を奨励する一方、寺社弾圧を行っていたが、江戸時代になると禁教令によりキリスト教の弾圧をおこなった(例: 郡崩し)
～疑問～
信仰を捨てず、大野集落や出津集落のように幕府や藩に見つからなかった場所があったのはなぜなのか?
潜伏キリシタンの生活からではなく、キリスト教が広がるきっかけとなった大村純忠の時代や地理的観点から見てみたいと考えた。

II 大野集落や出津集落について

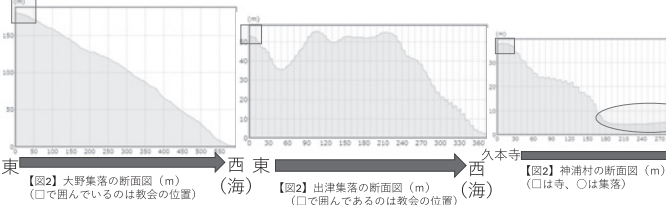
大野集落と出津集落の場所について・・・【図1】

- ①禁教令による迫害から逃れようとしたキリシタンが移り住んだ場所。
- ②五島のキリシタンの起源
江戸時代に行われた五島の移民政策によって大村領の「外海」から連れて来られた人のなかにキリシタンがいたから。
- ③西側には海、他の方角は山に囲まれている。

集落が位置している地形・・・【図2】

- ・どちらも、教会を始点し、海を終点として計測。
- ・実際に現地に行ってみたら、集落は教会があるところよりも標高の高いところに存在している。

地理的観点からキリシタン集落ではない神浦村の集落と比べて標高が高く、高低差の激しい土地に位置していることがわかる。



III 長崎の貿易港とキリスト教【図3】

長崎のキリシタンは海外からの文化や貿易港を起源となす。貿易港とキリスト教の広がりとの関係性を調べる。

①平戸港(松浦領) 【図3の赤】
天文19年 平戸にドゥアルテ・ダ・ガマのポルトガル船が入港
天文22年以降ほとんど毎年入港
平戸領主松浦隆信はキリスト教の布教を承認
永禄元年 松浦隆信とキリスト教徒との間で衝突
永禄4年 ポルトガル船員と平戸商人との間で殺傷事件がほころい、船長を含む14名のポルトガル人が死亡(宮の前事件)。
結果 松浦隆信が関係者の処罰を怠ったため、断絶

③福田浦港(福田領) 【図3の緑】
永禄8年 ポルトガル船福田浦で貿易開始
・キリシタンが急激に増加した。
・大村氏が福田氏に「鉄砲西洋砲ナドも積ませ来レバ、コレヲ他所ニナルベカラズ」(「長崎通草」による)と命令し西洋の武器を大村氏が独占

④長崎港(長崎領) 【図3の橙】
元亀元年 長崎にポルトガル船入港。深堀領主深堀純賢による長崎襲撃
●能通寺氏の支配下に入ったあとの天正6、7、8年にも深堀氏は長崎を襲撃している

⑤口津港(有馬領) 【図3の紫】
・深堀氏による長崎襲撃により長崎港入港が困難となったため入港
・有馬氏イエズス会に所領
・大村氏イエズス会に所領を寄進することを考える

⑥長崎港(長崎領) 【図3の黒】
佐賀の能通寺隆信が西部肥前を進攻し、大村氏は能通寺氏の支配下に入った。
しかし、長崎を直接支配せず、大村氏に貿易をさせた

⑦長崎港(長崎領) 【図3の青】
天正16年 バテレン追放令発布
長崎の住民に6匁の罰銀、キリシタンには8000クルード(銀2200貫目)の罰銀を課せられた。
ポルトガル人が大部分を肩代わりした。
その後、徳川氏の支配に入り、長崎は幕領となった

IV 大村領周辺の在地領主(地方・向地)について

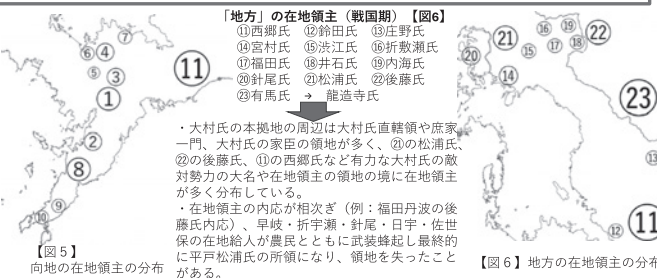
大村領の地域区分・・・「向地」「地方」「内海」「外海」・・・【図4】

「向地」の地理的特徴
北は大村湾、西には角力灘、東には橋湾が存在し、陸地は標高250~600mあたりの山が北側から南側の長崎半島にかけて広範囲に広がっている。

「地方」の在地領主(戦国期) 【図5】
①長崎氏 ②戸町氏 ③浦上氏 ④長与氏 ⑤西原宗(竹田氏)
⑥時津氏 ⑦伊木力氏 ⑧深堀氏 ⑨高浜氏 ⑩野母氏(野茂氏)

大村氏の本拠地である大村と向かい合っているが、在地領主が多く分布しており、在地領主の反乱(例: 長与純一の反乱)も起こった。江戸時代になると潜伏キリシタンが発見されたという出来事(浦上四番崩れ、伊万里島事件)があった。

「地方」の地理的特徴
西には大村湾が広がっており、東には今の佐賀県の県境に近い350~1070mあたりの山が広範囲に存在。



V 大村周辺の在地領主(内海・外海)について

「内海」の在地領主(戦国期)・・・【図7】
⑨の八木原村の八木原氏のみ
※残りは大村氏直轄領や庶家一門の領地である。

「内海」の地理的特徴
東側は大村湾、西側が標高250~560mあたりの山々が広範囲に覆われており、対岸に大村氏の本拠地の地域である「地方」がある。

「外海」の在地領主(戦国期)・・・【図7】
①天久保氏 ②大田和氏 ③小佐々氏 ④田川氏 ⑤神浦氏 ⑥久松氏 ⑦式見氏 ⑧福田氏 など

「外海」の地理的特徴
西側に角力灘、東側が標高250~560mあたりの山々が広範囲に覆われており、地形的に孤立している。

大村氏による「外海」の統一、豊臣氏による「外目村」支配
・大村純忠がなくなって息子の太村善前代になって統一権力(豊臣氏、徳川氏)を背後につけて統一
・天正15(1587)年に黒崎、陋刈、雪浦村の一部は豊臣氏の直轄地(外目村)に編入【図7】
※慶長10(1605)年に徳川氏が大村氏に返還
18年間に及ぶ統一権力による支配の終了

江戸時代の「外海」・・・【図7】【図8】
地図(物語史より引用)によると、三重村付近に一部大村領ではない場所が存在。

大村郷村記によると、大村領三重村の枝郷(黒崎村陋刈村、平村、長田村、悉津村、豊山村)は大村藩と佐賀藩深堀領との相給地である。

大村領の中に深堀領飛地があるほか、逆に深堀領にも大村領飛地がある。
(理由) 中世以来深堀一族が所領争いを繰り返しており、当時の分与相伝が江戸時代でも続いていたから。

【図9】 陋刈村について(大村郷村記) 【図9】 三重村について(大村郷村記) 【図9】 黒崎村について(大村郷村記)

VI 考察・今後の展望

大野集落や出津集落は他の一般集落と比べて、標高が高く、急な土地に位置しており、貿易港に近い。集落が存在する「外海」は他の3地域とは違い在地領主が広範囲に分布しており、大村氏に対する反乱や裏切りが相次いでいたことから、大村氏の支配が行き渡りにくいと考えた。そして、豊臣氏による「外海」の直轄支配により、支配者が大村氏、在地領主→豊臣氏→徳川氏→大村氏のように支配者が短期間で変わっており、政治的にも不安定な状況だった。また、江戸時代には出津集落のある黒崎村は大村領内に佐賀藩の深堀氏の飛地があり、大村藩と佐賀藩の相給地であった。大村氏はキリシタンに対する取り締まりは強かったが、深堀氏は弱かった。証拠としては明治4年の伊万里島事件であり、深堀領でキリシタンが多く発見されたのだ。このように藩によって取り締まりの厳しさが異なっていたため、大村氏は簡単に手を出さなかったのではないかと考える。集落も取り締まりの弱い藩が支配している場所に住んだのではないかと考えた。これらの恵まれた条件によって「外海」の潜伏キリシタン集落は禁教令が廃止されるまで発見されなかったのだ。今後の展望としては、「外海」に自生している「ゆうこう」と呼ばれる相橋領と潜伏キリシタンとの関係性を調べていきたい。

参考文献

- 新編大村市史中世編第2巻 大村郷村記第6巻 外海町誌 肥前国深堀の歴史 物語藩史地理院地図
- (https://maps.gsi.go.jp/#14/32.886206/129.694633&base=std&ls=std%7Cortold_01&blend=0&di=sp=10&sv=c1g1j0h0k0l0u0t0r0s0m0f0&d=0)
- 大村観光ナビ (http://old.omura.itours.travel/02history/history01_04c.html)

第18回全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧

(高等学校等コード順に掲載)

研究タイトル	高等学校名
長き東北のかたち 一律令国家への帰属過程ー	秋田県立秋田北高等学校
古代諏訪のミシャグジとその拡散について	山形県立山形東高等学校
カナダの文化的多様性	常磐大学高等学校
茨城県の海軍航空隊 ～航空隊の運用と変遷～	清真学園高等学校
平敦盛の魅力について	常総学院高等学校
六供町の由来を考察する	群馬県立前橋女子高等学校
埼玉県ときがわ町雲河原地区における矢穴調査	埼玉県立川越女子高等学校
江戸時代の河川と開発 ー埼玉県内新田村の成立とその立地を素材としてー	昌平中学・高等学校
児玉南柯日記から考える岩槻の火災	開智高等学校
最古の豆腐の研究 ー漢代以前に豆腐は存在しなかったのかー	筑波大学附属高等学校
坂本龍馬秋山某宛書簡における「秋山先生」考	〃
縄文の石器や土器の分布と生活文化 ー東京都西東京市下野谷遺跡からー	東京都立保谷高等学校
藩校における雅楽 ー「楽の藩校」での楽教習の要因についてー	明治大学付属明治高等学校
女性差別が誕生した経緯とは	和洋九段女子高等学校
「国防の最前線」としての近代対馬の認識の形成 ー「對馬島防禦要領」の作成背景からー	早稲田大学高等学院
太平洋戦争中の日本兵の心情	昭和第一高等学校
絹の道と日本のシルクの発展と危機の軌跡	聖学院高等学校
なぜ日本刀は武器としても鑑賞物としても扱われたのか	恵泉女学園高等学校
新発見の山城「赤柴城」の存在意義 ーその立地と縄張りの比較分析ー	駒場東邦高等学校
下野薬師寺の戒壇設置について ー氏寺からの官寺化としてー	世田谷学園中学校・高等学校
白洲次郎と正子の生き方から学ぶ今の私達に必要なこと	フェリシア高等学校
徳川秀忠の墓の意味と謎 ～徳川三代の背景にある家康の神格化～	佼成学園高等学校
武田信玄の死と墓の謎 ～甲陽軍鑑から考える水葬伝説～	〃
地域性によるくずし字の違い ー正応から明徳の古文書から探るー	神奈川県立横須賀高等学校
小田原のかまぼこについて	神奈川県立足柄高等学校
第二次世界大戦下における教育が与えた影響 ー横浜雙葉学園と国民学校との比較ー	横浜雙葉高等学校
幕末期のコレラ大流行と対策	立花学園高等学校
安田の文化・歴史の特徴 ～土地・産業から見る～	東京学館新潟高等学校
古代能登・加賀における古墳研究 ～北陸地域とヤマト政権とのつながり～	石川県立金沢二水高等学校
年貢割付状から分かる飢饉の影響について 鯖江藩 下大虫村を例に	福井県立鯖江高等学校
現代に受け継がれるべき教育「寺子屋」の実態について	日本航空高等学校
諏訪大社の神事と神官の武士化による諏訪地域文化への影響	長野県富士見高等学校
鋼鉄の男、ヨシフ・スターリンとロシア	長野県岡谷南高等学校
1日で落城!? 本当に高遠城は名城だったのか ～高遠城の戦いから読み解く高遠城の堅固さや名城さ～	長野県高遠高等学校
戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材	岐阜県立関高等学校
新宗教の歴史的展開と現代日本における様相に関する考察	岐阜県立多治見高等学校
富士郡における土族の地方行政進出 ー沼津勤番組員を中心にー	静岡県立富士高等学校
人と道と道の関係性 ～東海道、姫街道、そして犬くぐり道などからの考察～	静岡県立浜名高等学校
各務支考賛松尾芭蕉図の研究	愛知県立五条高等学校
「工業が発展していない、魅力のないまち東浦の、その原因の探求とそこから見いだされる活路」 ～近隣他市の文献との比較で東浦の魅力に迫る～	愛知県立刈谷高等学校
小牧・長久手の戦いと丹羽氏重	南山高等学校 男子部
邪馬台国はどこにあったのか	名古屋石田学園星城高等学校
三重県の方言とその背景の歴史	学校法人八木学園 英心高等学校
本校が所蔵する明治時代の西洋画の作者について	京都府立鴨沂高等学校
亀形石造物について	京都廣学館高等学校

研究タイトル	高等学校名
日本の鉄道の歴史 ～近代化を支えた物流のツール～	桃山学院高等学校
西日本の史跡にみる静御前像	〃
大和川の付け替えと狐伝説 ―土地を奪われた者たちの叫び―	天王寺学館高等学校
大老井伊直弼の実像の検証 ―先行研究批判から考察する―	神戸大学附属中等教育学校
かつての姫路モノレールについて	兵庫県立姫路東高等学校
宝塚市最明寺滝周辺の朝鮮寺の現況とこれから	雲雀丘学園高等学校
現代日本におけるアニミズムの特異性 ～人形供養を通して～	智辯学園和歌山高等学校
青谷上寺地遺跡水田復元の試み(Ⅱ) ―弥生時代水田の原風景を求めて―	鳥取県立青谷高等学校
豊予要塞 ～知られざる巨大要塞の歴史～	鹿島朝日高等学校
神武東征神話及び熊野の史跡群による八咫鳥伝承に関する一考察	〃
刀伊の入寇と軍事制度 ―律令制からの脱却―	松陰高等学校
松山市に伝わる小野小町伝承の謎を解く	愛媛県立松山北高等学校
History of 獅子舞	愛媛県立大洲高等学校
TOWNSCAPE OF UCHIKO	〃
隠された歴史、受け継がれてきた西予市	〃
宇和町の米作りについて	〃
五十崎の凧揚げの歴史について	〃
志ぐれ	〃
至徳堂ヒストリー	〃
大洲のうかいについて	〃
大洲高の History	〃
大洲高の歴史	〃
大洲高校の History	〃
大洲市民に愛されるいもたきについて	〃
歴史ある城下町 ～大洲市～	〃
宇和島藩における山家清兵衛と和霊神社の研究	愛媛県立吉田高等学校
天皇と一言主命の関係性の変化について	高知県立須崎総合高等学校
立花山城の立地についての考察	九州産業大学付属九州産業高等学校
大野遺跡や出津遺跡のキリシタンが禁教令下の時代に発見されなかった理由について ～大村氏・深堀氏との関係性・歴史や地理的環境から読み解く～	長崎県立大村高等学校
平戸市における古代の人々の生活 ～畑から出た石器から読み解く～	長崎県立猶興館高等学校
西ノ股遺跡から発掘された黒曜石の分析	長崎県立上五島高等学校
興原古墳の石材運搬に関する研究 ―古墳時代社会解明への道しるべ―	長崎県立壱岐高等学校
花卉型住居と神武東征	長崎南山高等学校
『ロシア艦船対馬占領事件』 ～幕末に対馬がロシアに侵略されかけた大事件～	長崎日本大学高等学校
高崎山城概略 ～ニホンザルの聖地の城としての側面～	大分県立別府鶴見丘高等学校
古墳時代の宮崎平野の実態について	宮崎県立宮崎大宮高等学校
田の神さあと地域の人々との関係	宮崎県立小林高等学校
野尻城から考えるこれからの野尻	〃
日本の武器と道具のつながり	〃
鹿児島県曾於市におけるユズ生産の現状と課題	鹿児島県立曾於高等学校
中世における比叡山延暦寺の姿 ～比叡山焼き討ちが行われた背景とその正当性について～	学校法人角川ドワンゴ学園 N 高等学校

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

〈 審査委員 〉

今津 節生 (審査委員長・奈良大学 学長)	比佐陽一郎 (実行委員長・奈良大学 文学部文化財学科 教授)
光石亜由美 (奈良大学 文学部国文学科 教授)	稲垣 稜 (奈良大学 文学部地理学科 教授)
岩崎 敬二 (奈良大学 文学部地理学科 教授)	岩戸 晶子 (奈良大学 文学部文化財学科 教授)
倉 光巖 (奈良大学 社会学部総合社会学科 教授)	宮本 亮一 (奈良大学 文学部史学科 准教授)
森川 正則 (奈良大学 文学部史学科 准教授)	岡部 純子 (奈良大学 社会学部心理学科 准教授)
穴井 潤 (奈良大学 文学部国文学科 講師)	北 奈緒美 (奈良県教育委員会 指導主事)

第18回 (2024年) 全国高校生歴史フォーラム 発 表 集

編集・発行 第18回全国高校生歴史フォーラム実行委員会
〒631-8502 奈良市山陵町1500 奈良大学 広報室内
TEL 0742-41-9588
印 刷 共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良で学ぶ
贅沢

主催

奈良大学・奈良県